
エストラーザ戦記

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エストラーザ戦記

【Zコード】

Z8461C

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

現実世界でオレは事故にあった。そして、記憶を失って覚醒した時には、縁溢れる『エストラーザ』と言う国の第一皇子『カイト』としての定めを持つてしまつた。しかも、最近この国を含む三国、『エストラーザ』、『キリアートン』、『サリバーン』の間の均衡が崩れ始めてしまつていた。このオレの運命は？個性豊かなキャラともにお送りするシリアルファンタジー架空戦記です。

#1 プロローグ

プロローグ

この日は今でも忘れられない、そんな口になつた。

彼女への想いは本当に純粋なもので、彼女が笑えばオレも嬉しい気持ちになり、悩みを相談されれば自分のことのように悩んだ。オレはそんな彼女を信じ愛していた。

しかしそれは、この物語の序章に過ぎない。

外は雨。

傘をかざす人の群れの中、オレは駆け足で彼女との待ち合わせの場所へと急いだ。

いつもの喫茶店。

そこは誰にも邪魔される事のないオレたちだけの一時ながらの憩いの場所。

ここでは、そこいら辺で流されている有線の曲はいつさい流されてない。この店の売りなのであるつか、それともマスターのこだわりなのか……ソフトなインストロメンタルのみが流れる、心の落ち着く場所。この店に来るお客様の大半がその雰囲気を気に入っているようである。

オレはいつもの窓際の席に座りいつものコーヒーを注文する。時計の針は、約束のその時間の十分前を指していた。

運ばれてきた、「コーヒー カップの取つ手に指を掛けひとつくち口をつける。

砂糖やミルクを入れるのは好みではない。

常連となりつつあるオレたちの事を知つていてるバイト生は、ミルクだけを運んで来る。ミルクは彼女のためのもの。何時も彼女はミルクティーを頼むからだ。ふと窓際に目を向けた。

ガラスに弾かれた雨の雫が滴り落ちてゆくのが眼に入る。そのために、その奥の状況に気付くのに時間が掛った。するとそこに彼女の姿を見た。

傘をさし、何やら隣の人物と親し気に話しかけている。

そいつが、彼女の学校の部活の先輩と名乗るもので、このオレの、唯一の悩みの種でもあった。彼の者が、彼女を好きなのは一目瞭然で、オレの存在さえ知つていながら、何時までも彼女の氣を引く事ばかりしている。

よりもよつて今、こいつの婆を見なくちゃいけないのかと一度持ち上げたカップをソーサーへと置き直す。

信号機が青へと変わった。足止めされているのだろうか、彼女は一向に横断して来る気配がない。

オレの中で、『やわざわ』と何かが沸き起つた。

次の瞬間、荷物もそのままに駆け出す。

店の中で何か叫んでいるのだが、そんなもの氣にも止めなかつた。

背後で店のベルが

『カラーンカラーンー』

と鳴つたのが聞こえた。ドアを開け放ち一直線に彼女のもとへと走つた。

降り続ける雨。

オレの眼には彼女と、その隣の男の姿しか入らなかつた。

信号は赤

その時オレの体は鈍い痛みを残し、宙を舞つていた。

その姿は、彼女の眼に入つたのであろうか。

決して見て欲しくはない。そんな事を朦朧とした意識の中で願つた。

オレの意識はそのままフードアウト。そして真っ暗な世界へと飛び立つた。

そこまでが、今までのオレが覚えていた全てだった。

#1 プロローグ（後書き）

今迄、恋愛物ばかりを書いておりましたが、今回はファンタジーでお送りします。少し恋愛も含まれたりしますが。。。気になつてたところを少し手直しをしながら、UPしていくと思つております。

最後までお付き合い頂けると嬉しい限りです。

#2 カイト

カイト

意識の底から声が聴こえて来る。

真っ暗な空間に浮遊している自分の体に気付き、

オレ、死んだのかな？

と、ぼやく。

暫くすると、一筋の光が自分の体を浮き立たせた。
一直線に差し込んで来る光。

オレ悪い事なんかしてないから、これは天国へと導く光なのかな
?!?

そんな事を何気なく考える。

しかし、先程から聴こえて来るこの声は……必死なまでに誰かを
呼んでいる。

そんなに叫んでよく声が枯れないよな

そんな事を人事のように考えてた時、その声がハツキリと耳に届
く程近付いた。

その刹那、

「気付いたのかつ！ カイト？」

耳もとで叫んでいたのか

とチラチラ眩しい木漏れ陽の中、自らが大きな青空を見上げている事を把坦した。したものの、

「こは何処なんだ？！」

体中が痛くて、これ以上起きあがれない。

「このまま眼を醒まさないんじゃないかって、心配したんだよ……
その声は弱々しくて、しかし何故かしら聴き慣れたそれは、自分を労っている事を知らしめる。

オレは少し横に頭を動かした。

「オレ、死んだんじやなかつたのか？」

とその声の主に問い合わせてみる。何でそんな事を言つてしまつたのか？そんな事は判らない。

「莫迦！軽々しく死ぬなんてこと言わないのでよー。」

さつきとは裏腹に力強い声。

逆光のために、その声の主が誰なのかが分からぬ。

「雨、止んだんだ……」

先程まで降りしきつていた雨が嘘のように澄んだ青空が広がつている。

「何言つてるの……？雨なんか降つてないよ」

可笑しな事を言つてくれるなという風に、不安な声が返してくる。

「もしかしてカイト、頭をぶつけて変になつたんじやないの？」

どうやら、『カイト』とはオレの事を言つてゐるらしい。

「ちょっと待つてくれ。オレの名前はカイトなんかじやなくて……」

あれ、思い出せないぞ……

これは困つた。と眼を閉じた。が、一向に自分の名を思い出せない。

そんな時、遠くから駆け寄つて来る足音が耳に入つて来た。

「カイト皇子、カイル様！」

その足音で耳横まで来たのが分かつた。

『ガチャガチャ』とした金属が擦れる音が耳に響く。

「クルト。良かった……このままカイトが起きあがれないんじゃ、ボク一步も動けないとこだつたんだ！」

と、カイルというらしい人間が答える。

「どうやら頭をぶつけたらしくって、カイトちょっと様子が変なんだ。だから早く主治医に見せないといけない様なんだよ」

と、どうやらこの状況を一番把握してるらしいカイルが説明している。

変?とは失礼な……

と心の中でぼやいてみるもののこの状況を全く把握できない自分は確かに変なのかも知れない。

しかも、皇子とか言われてるぞオレ……

「そうですか。分かりました。カイト皇子は私がお運びいたしますので、カイル様は暫くここでお待ち下さい。人を呼んで参ります」
そう言い残すと、このオレを抱きかえその男は歩き出した。いつも簡単にオレの体は『ふわり』と宙に上がった。

その際カイルと呼ばれたその人間の顔を垣間見る事が出来た。

そして驚いた、色白で、淡い緑色の瞳をした少年。柔らかそうな少しウェーブの掛った茶色の髪が後ろで一つに束ねられ、肩に掛けている。

まるで色さえ気にしなければ、何処かで見た事の有る面影である様な気さえした。

そして気付いた。そんな人間がこのオレを焦点のあわない眼差しで見上げていたことに……

一体ここは何処で、オレはどうしてしまったんだ？

オレは、でかい大理石の宮殿に戻されて、主治医と思われるお爺さんに診てもらつた。

そこは、天井に天幕が施されていて、いかにも西洋の宮殿の寝室といった感じである。

装飾も艶やかで、自分が本当に何がどうしてこういった事になつたのかが凄く疑問で、訊かれる事のみ答えるのが精一杯であった。

「カイト皇子の容態はいかがなのでしょうか？」

と、クルトと呼ばれてた男は主治医に尋ねていた。

「詳しく述べ、カイト様に訊かれる方が宜しいのではないでしようか？取りあえずこのまま本口は安静にされた方が宜しいかと思われます。状況がどうなのかと申しますと、全身の打撲と、その時少々頭を打たれたようで、記憶の障害があるといったところですな」とその主治医と言われる者が答えた。

「そのようですか」

「……」

オレは、何も話しかける事もできず、そのままぬぐぬぐとベッドの中では話を聞いていた。

「それでは、私はこれにて失礼いたします。くれぐれも、安静にならつていて下さりよ。カイト皇子！」

いかにも動こうと目論むだらう事を予測してか、そう言葉を残しこの部屋を一人は出て行つた。まだ、外はほの明るく、その光が優しく自分を包み込んでくる。

「一体何がこのオレに起こつたんだ？」

ボソリと言葉が口からこぼれた。

静かな部屋の中、腕を額に乗せて考えていた。

そうしていとただ独り残されて外界からまるで隔離されてしま

つたようである。

遠くで、小鳥のさえずりを聞いた。

『カイル』と呼ばれる少年の事がふと脳裏を過ぎった。

あいつ、どうしてるんだ？

何故か気になるあの少年は、あのまま、あの場所で待機しているはずである。

青い空と、緑の大地。彼は、その中に見た幻影であつたのか？
ふと記憶の中にかすかに残っている彼女の名前を思い出そうとするのだが、なぜだかそれさえも全く覚い出せない。

今では本当はこっちが本当の自分で、これまでの一連の世界だったものが嘘なのではないのか？とさえ疑いそうだ。
それともここは天国で、オレは死んでしまったのか？

お手上げだ

暫く横になっていたせいか、それとも頭を強くぶつけたせいなのか、深い眠りが襲つて来た。夢を見る事もなく。

「カイト…カイト…」

そう呼ぶ声で眼が覚める。

うすぼんやりとした視界の中、カイルと呼ばれる少年の顔が目の前に滲んで浮かんだ。

「心配したよ。もう大丈夫なの？軽い打撲で済んだって聞いたんだけど……」

あいかわらず、焦点のあわない瞳の少年がこちらを覗き込んでいた。

「カイト突然叫び声あげて手を離すんだもの、ビックリしたよ。ボクどうすればいいんだろうかって……」

そういうとオレの体の上に身を委ねた。話を聴いてると、ビリヤ
ら散歩の途中でオレが小さな穴に足を滑らせたらしい。

「オレ、今までの記憶がないんだ」

その事はカイルの耳にも入っているらしく詳しく述べてく
れた。

自分が、この国『エストラーザ』の第一皇子『カイト』という者
である事と、そして、一週間後には戴冠式を迎える事になつていて、
大事な身である事。この『カイル』が、義兄である事など断片的な
事であるが少しだけ理解できた。

「この国は外交が盛んな国で平和であるため、周りにある二国『サ
リバーン』と、『キリアートン』との間で最近平和の均衡が崩れは
じめている。現国王の容態が優れない今、カイト、君が頼りなんだ
から、十分気をつけてもらわないと……」

「この台詞で一気に眼が覚めた。

なんてこいつた。そんな事いきなりオレに押し付けられるなんて…

⋮

オレは開いた口が塞がらなかつた。

「ボクの事は気遣わなくつても……もつといいよ。たとえこの目が不
自由であろうと何とか身辺の事くらいなら自分一人でできる…カイ
トと遊べなくなるのは辛いけど、もうそんな事もできなくなる身な
んだから」

だから、違和感があつたのか

先程からの、焦点のあわない瞳の理由が分かつた。

なぜかしら、カイルの哀しい微笑み。

「記憶がない方が良いかもね。ぼくの心が安らぐ」

とつぶやく言葉は小さくて、聞き取る事が難しかつた。

「それってどういう意味？」「

訊き返すより先に、

「それじゃ、安静にしてて。またここに来るから」

そう言い残すと、カイルはよろよろとこの部屋を後にした。

沈黙がこの部屋に残された。

外はすでに暗くなっていた。オレはいろいろな疑問を残しつつも、そのまままつろな眠りに襲われた。

夢の中、再びカイルと呼ばれた少年の声を聴いたような気がしたが、それが他の誰かの声と重なり……やがて深い眠りについていた。

次の日は昨日の晴天とは裏腹に雷鳴を伴う大雨であった。

宮殿のガラス窓。そこに弾かれる雨粒。

ふと思つ。確かにあの口とさほど変わりはない。ただ雷は鳴つていなかつたのではあるが。

目を醒ましてから、暫くすると、身支屋の用意を始めた。

侍女らしき女性が、

「カイト皇子、御気分の方はいかがですか？」

と、優しく声を掛けてくれる。

体の節々の痛みも大分楽になり、ぶつけた頭も起きた時にはすつきりとしていた。

「ここは自分の置かれた立場を少し考慮に入れようと言葉を選んだ。大分良いみたいだ。本日はこれからどうするんだ？」

訊き返してみる。

「これから朝食をとつて頂いた後、戴冠式のためのリハーサルのようものが予定されております」

「そう」

素つ氣無く答えて、着なれ無い服を見に纏う。

それはずつしりと体を覆い、初めの内は身動きが上手く取れなかつた。

「食事には誰が？」

少しだけ昨日出逢つたカイルの事が気になり問い合わせる。

「今朝も、お一人でのお食事です」

「カイルは？」

訊き返すと、一瞬の事ではあつたが彼女の言葉が途切れたのを見逃さなかつた。

「カイト皇子……カイル様の事そろそろ気に病むのをお忘れ下さい。あなたが、この国の王になられるんです。いつまでもあの事を引きずつておられるのでございましたら、カイル様にも失礼ですよ」

鏡に映る自分の姿を見た。それは見覚えのない姿。

肩にかかるほど伸びた少しづくせ毛ぎみの金色の髪の毛を軽く払い除ける。すると、目の前に立つた侍女は、諫めるようにオレを見上げた。

あの事？あの事とは一体何の事であるのか？

憶えの無い事であればこそ訊き返したいと思つた。

「あの事とは？」

侍女にはオレが記憶を無くしている事を知らされていないのか、「何を仰せられてるんですか？そのために、カイル様は、眼を……」そしてハッと思い出したように口を噤む。

「どうした？言いかけた事は最後までいうものだ！」

カイルの眼が自分と何か関係があるのか？どうやらそこに、何か昨日のカイルとの会話に関わる何かを見い出せそうだと気付いた。

「口が過ぎました。お許し下さい」

そういうと、侍女はそそくさとこの部屋を後にした。

追いかけて訊き出そうと試みた。が、部屋の扉が閉じてから間もなく別の侍女が、食事の用意ができた事を告げに入つて來た。

「お食事の用意が出来ました。部屋を御案内いたしますので、こち

らへ」

そうオレを促すと、少し割腹の良いその侍女の後をついて行く事となつた。

オレと、カイルの間には一体何があるのか…?

大理石に囲まれた大広間の中央テーブル。

そこには、自分のための食事が用意されている。

しかし、オレには全くといって西洋のマナーなど皆無で、それでどうしたものか?!

箸の変わりに、ナイフやらフォークやら。そして、平べったい食器の山。

朝っぱらからこの量を食べると何とか?!

と思いつくりこの量の食事が並べられていた。

「オレ、こんなに食えないじゃなくて、食せないのだが……」

慣れない言葉遣いなのだろう、少し正して近くに控えていたその侍女に声をかける。

「残されてもかまいませんよ?」

侍女は気軽に答える。

残していいって……そんな贅沢な事したら……

と、気がとがめる。そして訊いてみた。

「残したらどうするの?」

ごくりと喉の奥が鳴る音が脳に届いた。

「捨てます」

余りにあつたと答えられ、頭の中が真っ白になつた。

「何でそんな事……」

と言いかけたが、これがこの世界の、この王宮の方針であるのだと瞬時悟ったため、これ以上何も言い返せなかつた。

「わかった。これとこれ。この分は食べるから、後は下げるくれ」

幾らか選んだ食器類を搔き集め、残りを下げる。

今までこんな事を言う事がなかつたためか、訝しげな表情をした侍女は言われるままその言われた以外の食事を下げた。

「これからは、これだけの分量で良い。余つたものは、みなで食せい！」

オレの言葉に有無を言わさない何かを感じ取つたらしく、反諭する声は聞こえてこなかつた。

食事は、さすがに富廷と言うだけの事はある。しかしオレには、この西洋の食文化についていけるのか？それが問題であつた。

昨日からのこの変化にとんだ世界。

これが夢ではない事が分かり、

『もうビビリでナレ！』

と一部投げやりになりつつも、自分の立場はわきまえるしか無さうだと腹を括つたつもりだった。

「はあ～」

そのつもりだつたが、次にはため息が漏れていた。

戴冠式のリハーサルは、程なく事を終えようとしていた頃の事である。大僧正の念仏はいつまで続くのかと呆れながら頭をまわし肩をほぐす。

横で見ていたらしい宰相の職に付くケルトが、

『ん、おほん！』

と咳払いをする。

長く続いた念仏が終わりを告げ解放されるという時、大きな雷鳴

が鳴り響く。そして一人の将校がそれにも負けず大きな音をたて、広間へと入つて來た。

ざわめく人々を誅するかのように宰相ケルトが、
「何事だ！今が何をしている時なのかわきまえよ！」
と場を制した。

静まる人々。その中で跪きながらも答える将校。まるで、映画のワンシーンの様に感じる。

「申し訳ございません。只今国内に『キリアートン』の賊が入り、第一皇子を差し出すようにと……そもそもばこの国内を焼き払つて回るとの緊急の使者が参りました！」

慌ててているためか、広間に響き渡る声。

「なんと……」

「陛下が臥せつてゐる今、このよつたな事態にならうとは……」

この突然の事にケルト宰相は言葉を濁す。

『密告者でもいたのか？』

と周りの貴族達が騒ぐ。

再びざわめく部屋の中、凜と響く声がそれを制した。

「ボクが、身替わりに出る」

それがカイルである事は顔を確かめる間もなく分かつた。

「カイル様！」

カイル付きの従者の一人が慌てて止めに入つた。

「大丈夫だよ。『キリアートン』とは平和協定を結んではいるけれど、『エストラーザ』と殆ど交流がない。それに、人質として誰か一人を手に入れたいと思つてゐるだけだろうと判断できる。ここは第一皇子であるうがなんどうが関係ない。だから、心配は要らぬい」

威厳のある発言。

「カイル……」

オレはそのカイルの様子に息を飲んだ。

「それでは、カイト皇子。御決断を！」

『しーん』と静まり返る。誰もがオレの言葉に耳を傾けていた。

「……」

オレは田を背け黙り込んだ。

なんて事だ。この決断をオレがやらなければならぬことは……

眠気なんか一瞬で吹き飛んでしまった

「カイト皇子。ここには、カイル様の言う通り。一時の安定をはかるためにも、この事をカイル様に委ねてみてはいかがでしょうか？……『キリアーン』の眞の目的が掴めない以上、カイト皇子に行かれでは困ります」

宰相ケルトの言葉。その言葉を聞いても、未だオレは考えていた。

……未だに慣れないこの世界でこんな重大な事をひつかぶらなければならぬなんて……あれつ？でも大事な何かを忘れている事があるよつな……

決断を下せないまま沈黙は続く。

「カイト皇子……ボクなら平氣です。ですから、このまま言つ通りにさせて下さい！」

答える無いオレに、カイルのその言葉の後を繋ぐかのよつこ、「カイル様の言つ通りです。ここには今暫くカイト様には辛抱して頂き後々の事を考えて頃きましょつ」とは、宰相ケルト。

「……わかつた。カイルの申し出を聞こつ。ただし、条件がある」
言つてみたものの条件とはどうするものなのか？適当に言つてみた。

「条件とは？」

「その使者と一緒にいまみえての会議だ！」

「莫迦な！－何をおっしゃつているんですか－」

宰相ケルトは声を荒げた。

「皇子が出て行く必要はありません！それほどまでに気こされい
ると言つのであれば、私がすべてを取り持ちます！」

「そのまま俺の言つ事など聽けない！－と言いたげに広間の中央に出
て、
「これより、カイト皇子の変わりにこの私、宰相ケルトがこの儀を
取り持つ。今の皇子に決断は任せられぬ事は皆の者も判るであろう。
したがつて、カイト皇子の代わりにカイル殿にこの任を仰せ伝える
！」

まわりでざわめきが起つた。

「有り難き宰せ……ケルト宰相！」

カイルはそう言い残すと、隣に控えている従者を二人程連れ立ち
その場を将校と供に去つて行つた。

「カイル！」

そう呼ぶ声が聞き届けられていないかのように振り返る事なくカ
イルは扉を背にしていた。

それから後、オレがカイルの悲報を知つたのは三日後のことであつ
た。

#3 カイル

カイル

縁が色濃くなるそんな時期に産まれた彼は、宮殿の端の暗い部屋で産まれた。

母が陛下の側室であったため、正室である妃の皿に触れないようにとの配慮であった。

正室にはまだ子供ができず、その事が特別な意味で重荷となつていたのである。

しかも産まれたのが男の子という事であれば田も当てられない。

カイルの母は野心や派閥争いといつも『ドロドロ』とした世界を好まない穏やかな性格で、それは、今この宮廷内にいるような人とは思えない程に……

しかし、生まれた子の事はすぐに宮殿中に広まった。

その事で、正室派の者達から次々と迫害を受け、ついには精神的に参つてしまつたのである。

それから程なくして、気の弱くなつたカイルの母は、陛下の断わりを受け、この国『エストラーザ』の宮殿を後にする事となつたのだ。

もともと宮廷の外で育つて来た彼女にとつては、少しの心の安らぎになるであろうとの配慮でもあつた。

しかし、ただし一つの条件がかせられた。

『カイル』は宮殿にて育てる事。

まだ産まれて間もないカイルにとつて、母の手から離されて育てられると言つことが、どれほど悲しみを背負う事となるであろうか？生まれたばかりにその事は考えられないにしろ、その後は？

乳母をたて、カイルはその場に残り母のみ宮殿をたつた。それは粉雪の舞い散るそんな季節だった。

しかしやの一年後、正室に男の子の『カイト』が産まれたのである。

陛下は、内乱を恐れこの子を第一皇子とする事を囁く、ひとまずの内憂になる因子を取り去ったのである。

これがカイトとカイルの由縁である。

カイルが第一皇子としての道を歩き始め、数え年、五年の畠田を経た頃、周りもこの皇子の不幸な待遇を思い、母に会いに行く事の承諾を得ようと陛下に意見をもちかける者が後を立たなくなつた。その頃、陛下自身も、成長して行く利発なカイルの姿を見るにつけ、いたたまれない気持ちを日々募らせていた。

それは正妃が目に入れても痛くないというほどに可愛がっている第一王子のカイトを見てきたせいでもある。

「カイルよ、週に一度は、母に会いに行く機会をやろう」

そう言つた陛下の顔を、カイル自身幼いまでも心に焼きつけていた。

ボクは不幸なんかじゃない。こんなに愛されているのだから

年端もない少年の心は純粋で、一種の悟りでもあった。

そして今でも覚えているこの時の母の悲しき姿。

カイルを手放してからの母ミレディーのやつれ果てた姿が訪れた簡素な家のベッドの上に横たわっていた。

「母上！」

と、駆け込んで捕らえたミレディーの手は痩せ細った骨の固まりで

……心労のみがこの姿を作り上げたのだという事を、周りの侍女た

ちより知らされる。

カイルにとつても、周りの侍女達にとつてもそれはかなり居た堪れないものであった。

「ミレーディー様！カイル様ですよ！」

そういわれる事で初めて目を開いた。ミレーディーの生氣の無い瞳。そこに映り込んだ自分の姿が彼女には一体どんな風に届いているのだろうか？

カイルは今の自分を見て欲しいと願い、そして顔を覗き込んだ。「母上！カイルです！父上の承諾を得て、週に一度母上のもとに通つても良い事になりました！」

未だ小さいその手で、母の骨張つた手を握り締めカイルは告げる。しかし、母の声を未だ聴いていないカイルは恐る恐る母の骨ばつた顔を見詰めながら、

「母上も、ボクに会いたかつたんだよね……これからは欠かさず来ることから、だから早く元気になつて、そしてこの手でボクを抱き締めて！」

その時母の顔にかすかな紅が差したように思えた。

「力……イル？」

弱々しい声だが、カイルの耳にはハッキリと届いた。

「ミレーディー様！」

普段、声もろくに出す事がなかつたのであるつ……周りの者達は嬉々として喜んだ瞬間でもあつた。

「ほ、本当に、力・イ・ルなの？」

細い手に力がこもる。

「私の、カイル。大きく……なつたのね……」

「はい」

「ごめんなさいね……私の心がもつと強かつたら……お前と一緒にいてあげられたのに……」

周りから喜びの声と、嬉し泣きをする者の声があがつた。

「心配しないで、ボクの事は。みんな良くしてくれてるよ。だから

ほらっ。母上も早く元気になつて！」

ミレディーの頬に一筋の涙が伝う。

「ありがとう。大丈夫だから。カイルに会えるんだもの……一刻も早く元気にならないとね……？」

「母上！」

感動の対面をきっかけに週に一度『蒼の日』が来る度にカイルは母の元を訪れる事となつた。そしてそれと共に、ミレディーの容態も見る見ると善くなつていつた。

三週間もする頃には一人で起き上がり辺りを散歩するまでにも回復していた。

そしてこの日も、カイルは母に会いに城下の家までやつて来ていた。片道歩いて三十分程もかかるという険しい道のりをモノともせず、一途に通つていた。

この国『エストラーザ』は、北から東を山。西を砂漠と言ふ風に囲まれる緑の多い平野に位置した国であった。

農作物は、豊かな大地に恵まれて育つ。その、少し下つた南には海があり他国との貿易を糧に商人の街としても栄えていた。

ミレディーのいるここは、今はまだ統治はされていない。後『キリアートン』よりの、北に位置する山のふもとにあり、気候は『エストラーザ』の温眼なものよりやや厳しい。

いつしか季節は、秋になつていた。

「母上！見て下さい」

ミレディーの前に差し出されたのは、裏の林の中で見つけて来た野草類であった。

「これって、この時期にしかとれない薬草なんだつて。母上、これを飲んでもつと元気になつて下さいね！」

「まあ、カイルつたら泥だらけになつて……ありがとう。そうさせてもらおうかしらね。ふふふ」

カイルは、会いに来る度に元気になつていいくミレディーの姿を見

ては嬉しくつてたまらなかつた。そんな一人を、周りの侍女達も暖かく見守つてゐる。

「カイル様。あなたがお越しになるので本当にミレディー様、見る見る善くなられておりますよ」

その言葉に、

「そんな事無いよ。ボクだけの力なんかじゃない。みんなが母上を元気づけてくれてるからだよーこれからも母上の事よりしくお願ひいたします」

と返す。

「そんな、とんでもございません。カイル様からそんな言葉をいただけるなんて……私どもはなんと幸せ者でしようと……」

その言葉を聞いては、カイルの身を心から案じた。

本当なら、母子共々同じ場所で育つて良いものを……何故に神は、こんな運命の元にこの一人を投じたのか……その事を呪いさえする。それほど、侍女達の目に一人が不憫で仕方なかつたりした。

「カイル。お城では今、どんな事をしているの？」

とミレディーはいつもながらにカイルの近状を問う。

「はい。今は収穫祭の真っ只中で宮中も慌ただしくなつてゐるんです。だから、その準備のお手伝いをしています」

「そう、もうそんな時期になつたのね」

と、遠い目をする。

簡素な小屋の窓辺から屋根の上の小鳥のさえずりが聞こえて來た。のどかなひととき。

「母上はいつもどんな事をされてゐたのですか？」

真直ぐなカイルの視線に戸惑つたよつたミレディーは、暫く考えるように目を閉じた。

「そうね、いつも祈つていたわ。来年もまた今年のよつて豊作でありますよつてつて」

目を閉じて言つたその目蓋は少し思い出に耽つてゐるかのよつてつて、揺れていた。

その様子をカイルなりに受け止める。

「母上、明日は獵に出て来ます。昨年、初めて行つたのですが、上手くしとめられませんでした。どうやら狩りは苦手のようです。何だか動物達が可哀想な感じがして……」「が上手く引けないのです」と頬に手を掛けミレディーの事を見た。

「優しい子。でもね、人はそうやつて狩りをして、今まで生きてきたの。私も動物の命を簡単に奪つてしまつて好きではないわ。それでも生きていくための糧になるのだから、その子達も本望なの。カイルも少し強くなりなさい。そうすれば、守りたいと思ったものを守れる強い人になれるわ。お父様のように」

そつとカイルの手を取る。

「お父上のように?」

「そう、あなたのお父様。陛下も心優しい方なのですよ。でも、一国のために、守る者達の為に、強くなる事を選んだ。とても強くて優しい方……」

細いミレディーの手に力がこもる。

「母上!ボクも母上を守るために強くなる。だから明日の狩り、一番をとれるように頑張る。きっと次の碧の田には、いい話を持つてやつて参りますね」

「ええ、楽しみにしているわね」

しかしこんな会話が楽しく出来るのが、この田で最後になろうとは夢にも思わない出来事が待り受けていたのであった。

#4 収穫祭

収穫祭

次の日は収穫祭を締めくくる最後の日であった。

収穫祭は一週間にも渡る長い日を経て、各人々の心に情熱と安らぎを与える。

この日はその中でも一番の好天氣で、宮殿の若人に活氣を与えていた。

そして朝早くから、陛下を従えて多くの者達が一同狩りをする平原で顔を並べている。

「本日は、誠に記念すべき日となりましょ！」

と、陛下に各従者達が唱える。

それは、『カイト皇子』の初めての狩りの日でもあった為であつた。

そして、『エストラーザ』の誰もがこの事に注目していた。

「カイトよ、今日のこの日はお前の初舞台ともなる。どんな舞台にしてくれるか楽しみにしてあるぞ」

「はい、父上。頑張ります！」

元気な返事をするカイト皇子に、軽く笑顔を見せ、それを合図に陛下一同それぞれの獲物を捜しに四方へと散つて行つた。

「カイト皇子、ボクがお供いたします」

そう進言したのはカイルであつた。

「お前は？」

「カイルです」

「わかった。ついて参れ」

この時初めて会いまみえた二人はまだ幼い六歳と五歳の少年であ

つた。

「この辺りで捜してみよう」

「はい、承知いたしました」

そういうと、カイルは獲物のいそがしい場所でおびき出すかの「」とく、辺りを馬で駆け回る。

『バサリ』という物音を立てる、鳥がはばたく音と共に羽根が辺りを舞い散った。

「カイト皇子！」

その瞬間を見のがすことなく、カイトの引いた弓は、その鳥目が直線に矢が放たれた。

『キイー』という叫び声をあげて落ちたその鳥は、見事、カイトの矢が射止めていたのである。

「お見事です」

「なんてことはない。カイルのおかげだ。さあ次へ行くぞ…」「はい！」

二人の呼吸はなんとも言いがたく華麗な旋律を描いていた。

次々と現われる獲物を追い落としては、土産のネタとなっていく。幼い一人には楽しい事この上なく、草原での狩りは、何時の間にか、北の地への入り口の森へと足を運んでいた。

暫くして、その事に気付いたカイルが、

「カイト皇子、この地は危のうござります。」これは一度引き返した方が宜しいかと思われます」

危ない地帯に入るとカイトを促す。

「なあーに。なんて事ないじゃないか。それに、こっちの方が獲物はたくさんいるしな！」

カイトは勝ち誇ったかのように次の獲物を探そうと躍起になつていた。

この北の地の領地には、蛮族と呼ばれる民族が住んでると聞かされていて。その民族は、狩りを主にした食料で生計を立てているだ

けに、いたつて獰猛な種族であると伝えられているからだつた。そしてこの地の至る所に、そのための罠が張られていることも知られていた。

「カイト皇子、いけません。今すぐここを出ましょう!」

「どうした? あんなこけおどしの噂を信じているのか? それとも、腕に自信がなくて、恐れおののいているのか? それなら今すぐカイル。お前だけでもこの地を後にするがいい!」

カイトは、言つても後に引きそうにない。

「そう言つわけには参りません……分かりました。ではお供いたします!」

さつそつと馬に乗るカイル。

「別に無理する必要はない。恐ければこのまま立ち去れ! オレ一人でも大事ない!」

ほんと意地の張り合いをしているかのようだつた。

しかしカイトが馬の背を叩く、その時だつた。

一瞬、森の奥から『キラリ』と閃光が走つたのを感じ取つた。それと同時に馬の嘶きが響き渡つた。

その事に瞬時気付いたカイルは、

「カイト皇子っ、危ない!」

そう叫ぶと共に、カイトの前に馬を走らせその光の前に身を投じた。

「うわっ」「うわっ

荒れ狂う馬から落馬するカイト。

「うつ」

『カツーン』と、背後で音がした。

呻き声をあげ、『ズルリ』と馬から落ちるカイル。

「何事だ!」

落馬して腰を打ちつけたのだが、ただならない呻き声に急いでカイトはカイルの傍に行き抱き起こしたのである。

「カイル!」

「カイト皇子……御無事……ですか……？」

「目を押されて苦しそうな呻き声をあげているカイルに慌ててカイトは、

「何を言つてゐる。オレは大丈夫だ。カイル……そなた……目を……
目をやられたのか！」

背後を振り返ると、一本の矢が木に刺さつて揺れている。

「カイト皇子が御無事で何より……」

「莫迦！そんな事言つてゐる場合ぢやないだらう！オレの馬に乗れ！
今すぐここを立ち去る！」

抱きかかえるくらいなんとかなると思えるくらいカイトは自分を
責めた。そして自らの馬にカイルを担ぎ上げカイト自身も馬を跨ぎ
カイルを前に乗せ今来た道を戻る。

「すぐに主治医に見てもらひ。今しばらく辛抱しろ！」

カイルとカイトを乗せた馬は、北の森を後に宮殿へと向かつた。

それから暫くの間カイルを運び込んだ部屋からは誰も出て来る事
もなく、静まり返つた宮中は事の重大さを感じさせ『ひしひし』と
周りをも包み込んでいた。

そこに陛下がカイルの部屋から現われたのである。

『コツリ、コツリ』と足音が廊下中に響く。

「カイト、一体何があつたのだ？」

「父上……」

カイトは全ての事の次第を包み隠さず話した。軽はずみな自分の
行動の果てに、罪の意識があつたからだつた。

「つまりは、お前の我が儘で、カイルは負傷したと言つ事だな
「はい。そうです。すべて、オレの責任です！」

『ピンチ』と張り詰めた緊張した空氣。

「お前はこれから先、お前の義兄、カイルの目となつて、行動を共
にしろ。それが、私からお前に課す罰だ！」

そう言い残すと陛下はその場を後にした。

「……承知しました」

当然の処置に頭を抱えた。

まさかカイルが、第二皇子としての自分の義兄である事など今知つたという自分の情報の少なさ。これ程自分の身を疎んじ、落ち込んだことは今の今までなかつた。無頓着な上に軽はずみな行動。それら全てに自らの反省点を幼きながらに感じた。

それから、半時も立つた頃主治医がカイルの部屋から顔を覗かせた。

「カイルの容体は？」

瞬時立ち上がり、カイトは駆け寄つた。

「傷は大した事はないのですが……ただ、矢に毒が塗られていたらしく……それが『北の森』独特の物で、この地でとれるものではないようです。せめて解毒剤になる物が何であるのかが分かれれば……治す事も可能なのですが……実に残念なことです……」

その言葉には威厳さえなくて……次の瞬間主治医を押しのけて、カイトはカイルのいる部屋に駆け込んでいた。

ベッドに横たわっているカイル。それを見て一瞬言葉を詰らせたが、意志を決め、駆け寄る。

「済まない。許してくれ……あの時カイルの言つ事を素直に聞いていれば……カイル！ オレのせいでお前の身にこんな事が起こるなんて事はなかつたのに……！ オレ、早く解毒剤を手に入れてきてやる。だから……」

カイルの手を取り悲痛な声をあげるカイト。

「カイト皇子？ そんなに気に病まないで下さい。ボクはあの時、当然の事をしたまでなのですよ。それより、皇子に大事がなくて良かつた……」

あくまで、カイトの事を気に掛けて来るカイルの様子がなんとも印象的で、周りの従者達は悲しみに声をあげた。

「オレの心配はもういい。自分の心配をしてくれ！ 先程父上と話を

した。これからは、オレがお前の目になる。いつもお前の側にいる。
だから安心しろ！」

「カイト皇子？…有り難きお言葉でござります……」

この先、約束通り、身辺の事以外のカイルの世話は、カイトが行う事となつた。

何処に赴く時も共に行動をするよになつた。

カイルが母を訪れる時も、散歩をする時も共に行動した。
表向きな行事に出席できないカイルに後ろめたさを感じる事もあつたが、それでも、自分が犯してしまつた罪に打ち勝とうと自分を向上させる目的に合わせて行事に参加する。

そんな日々がカイトが十五の歳になるまで続いた。

しかし、それが、カイル自身の重荷になつてている事をカイト自身考えてもみない事であつただろう。

そして現在。運命の日がやつて来たのである。

#5 キリアートン

『キリアートン』

冬の『キリアートン』は、秋の終わり頃から肌寒い風を呼ぶ。木々は冬模様。針葉林の山がまた寒そうな季節を告げてきた。

農作物を、切り開いた土地で刈り入れる事より、山に実る草や、木の実などを収穫して生活を成り立たせていた。

冬における狩猟はそう簡単には望めないので、秋の終わりになるまでには、食料となる獲物達を狩り取つては生計を立てていた。

この国は、もともと、『エストラーザ』に住んでいた者達の中から出没した山賊が作った国で、七年前にこの当時の棟梁であつた八歳にも満たない少年が一代で築いた国でもあつた。そして今、この地は十五歳になつたばかりのその少年によつて統治されている。

『キリアートン』の国王の名はグエイン・マイル・ド・キイル。國內でこの男程残忍な者はいないとまで称されるほどに、恐れられている者だ。

この男の命令に従わないと、辺りは血の海と化す。噂では有るが、それほどまでに凶暴な国王であるようだ。

この国王の独裁政治に、恐れをなした者達は、一旦散で山を駆け下りた。が、すぐ見つけだされ、裏切り者の烙印を押される。

烙印を押された者は、一生陽の目を見た事はない。

それ程この男の国を統一する力は絶大で、それは日を追うごとに顕著に現われていつたのである。

『エストラーザ』に賊を送り込み、第一皇子を差し出すよつとの使者を送つた事は、すべてを手に入れようというグエインの野望のはじまりである。戦えば、必ずと言つていい程『キリアートン』に勝敗はあがる。そこを無血で手に入れよつとしたのは、珍しくこの王らしくない采配であると言えよう。

「グエイン国王、この度の使者。これはなんとした事か？」

宰相メイティンは余りに急なことに王に詰め掛けた。

この男はグエインにとって信頼出来る配下の一人である。「無血で国の一いつを手に入れる。これが我が考えだ。何か不満でもあるのか？」

「不満などございません。只、国王らしくない方法をとっているので疑問を持ったまでです」

『チラリ』と様子を伺っている。

「しかし……『ヒストラーヴ』は、この要求を呑むのでありますようか？もしかすると、変わりの者を立てて来るかもしませぬ」
グエインは、考えている事など分かつているとでも言いた氣に、「そうだろうな」と軽く答える。

「そうだろうな……とはどういう意味ですか？まるでそれを確信しているかのような……」

訝しげな顔でメイティンはグエインに向けた。宰相らしくない表情だった。

「それを望んでいるのだ。そうすれば、この上なき楽しみが増えるところのもの。偽りの皇子。そんなものをよこすとは何事だ……とな」舌なめずりをして答えるグエインの様子にただならぬ冷や汗が額を伝つ。

「グエイン国王。初めからそれを目的に……？」

グエインは何を今更分かり切つた事を……とでも言つよう足を組み直す。

「それで、どうなんだ。皇子をこひらこよこすつもりが『ヒストラーヴ』にあるのかどうなかわかったのか？」
グエインの少しイライラしたような様子に、「明け方、使者が帰つて参りました」「して……如何なる様子だ？」

「承諾を得たようです」

「そうか、して、皇子はいつ？」

「半刻もすれば、従者三人を引き迎れてやつてくるやうです」

『ふむ……』と考えるよつた素振りを見せるグエイン。そして一つ

咳払いをすると、

「これより正装をする。侍女を部屋へよこせー」

座を離れマントを翻した。

「承知致しました」

それだけ言うと、宰相メイディンは、グエインとは反対の方へと歩き始める。

「国王が正装されるそうだ。早く用意をいたせ！」

そう言いながら、この部屋を後にした。

『「コツリコツリ』と踏みならすグエイン国王の靴音が広間中を響かせてやつて來たのは、

カイル第一皇子が到着して暫くしてからであった。

『エストラーザ』と比べ狭い広間のその奥。一、二階段を上った所に王座はある。少し暗い広間で、少しがび臭い臭いが鼻に付く。周りは、騎士と言つには程遠い豪傑な男が、鎧を身に纏い左右カイル達一行を囲んでいる。

暫くすると、右奥の扉から国王と宰相が現われた。

カイルの目にその姿は映らないが、靴音で想像するだけは出来る事であった。

「そちらにいるのが、『エストラーザ』の第一皇子であるか？」

宰相メイティンがまず声をかける。

「いかにも、私が皇子カイトでござります」

広間に響き渡る声高いカイルの声。

「間違いない第一皇であるか？」

もう一度訊き返す。

「間違いございません。われこそ第一皇子でござります」

『しーん』と静まり返る広間。本当に皇子血り出向いているとは信じられぬと言つた感じだった。

「グエイン国王と申されましたな。我が皇子をいかがなさるおつもりでしようか？これは、契約違反と言つものではありますんか？我が国との不可侵条約は『サリバーン』を合わせた三国間で結ばれています。されば、今すぐわれらを解放して頂きたくござります」カイルの従者の一人、サハンは恐れ多くも第一皇子にこの申し出は不可解だとグエイン国王に詰め寄る勢いで。

「そんな規約はたつた今破棄する。皇子……そなたはカイト皇子ではない！このグエインの眼を欺こうとは笑止千万！」

その言葉に周りがざわめいた。

「それは、どう言つ根拠で申されるのでしょつか？私は第一皇子力イトに相違ございませんが！」

物おじもせず、一步も引かないカイル。ここで引いたら、グエインの思う壘だと悟った。

「恐いもの見たさで参つたか……それも一興」

グエインは、カイルの前まで歩みでた。そして、カイルの頸を引き上げるようにして詰め寄る。

「お主がカイト皇子でない事は下調べ済みなのでな。判つてあるのだよ」

再び謁見の間にどよめきが走つた。

「よくその見えない目でやつて来られたものだ。カイル皇子。褒めて遣わすぞ。しかし、約束の皇子ではない。これこそこちらの申し分に逆らつた証拠！」

グエインは、カイルの端正な眼前に分厚い腰の剣を引き抜いて押し付けた。

それに怯む様子を見ることは出来なくとも感じ取ができるとおくびも見せないカイル。

「この者どもを引っ立てい！」

そうグエインは言い及ぶと、直ちに周りを取り囲んでいた従者ど

もが四人を捕らえた。

すれ違い様、グエインは、カイルの怯える事もしない横顔を冷静に見据えた。

少しも変わらないな……

目が見えない恐怖。この者にはそんな事はなんと言つ事でもないのであろうか……と、グエインは心中思ったのである。

「ただちにもう一度使者を出せ！偽者の皇子に三日猶予だけ与え。それを過ぎれば、彼の者の命保証しないぞ。そして今すぐ平和な世を続けたくば、今すぐ考えを改めるんだな。とそう伝えてこい！」

そう言つと不敵に笑いながら身を翻し奥へと去つていったのである。

#6 エストラーザ

『エストラーザ』

カイル皇子と、供の従者三人が囚われの身になつてから早半日が過ぎていた。そして、それを伝える使者がやつて来たのは夜半過ぎの事であつた。

「残念ながら『キリアートン』を騙す事はできなかつたようですね」宰相ケルトは頭を抱えていた。

「どこかに、我が国のことを見ている間者がいるのではないでしょうか……そうでなければこうあつさりと見抜かれますまい」

皇子カイトを欠いた会が、ここに宰相の狭いお香がかつた一室で行われている。

「しかしこの事をカイト皇子抜きで話されてもいかがなものでしょうか……？」

皇子の側近、クルトがボソリと呟いた。

「カイト皇子に内密に事を進めるのは、やはりこれから『エストラーザ』にとって不運を招く事になるやも知れませんぞ」

同じく批判の声を発するカイトの従者、トール。

「しかし、今カイト皇子の耳にこの事が入つたとなれば、カイル皇子奪還の戦が勃発することこの上ない。ただでさえ、カイト皇子はこの話に一番に反論を唱えた。しかしこの平和な国に、戦をする部隊を育ててている時間などないではありますぬか？」

と宰相ケルトがこの申し立てを遮る。

「確かに、今、記憶さえも失くされている不安定なカイト皇子の耳に入つたとなれば、自ら動く可能性だつてあり得ます」

困つたものだと一同頭を抱えた。

「せつかくのカイル様の行為がすべて水の泡」「どうするものか……」

「「IJ」にはカイル様に犠牲になつてもううのが、一番の良案なのだが……」

「「IJ」の国のためにか……それも致し方ない」

「しかし、この国を守るための算段がその後あるのでしょうか？」

とは、カイトの従者クルトの言葉。

「『キリアートン』のことだ、黙つてはいないうつ」

「ふむ。それはあり得る」

周りの者達は、またしても頭を抱える。

「やはり、一度カイト皇子に意見を求めるましょ」

クルトがケルト宰相に言葉を繋ぐ。

「そうするのが一番かも知れぬな。どちらにしろ、國の一大事。で
きれば、陛下も御一緒していただければいいのだが……」

だが、その頼みの綱の陛下は末期の病床についている。意見を求
められる程の余力がない。

「明日、議会を開く。皇子にその旨を伝えて参れ」

結局この決断を出した、が、しかしこの状態を向上するための算
段を思い浮かべる事は出来ないだろうと、宰相ケルトの頭にはあつ
た。

翌日。「IJ」の議会の重圧の中、カイト皇子はさうそく現われ、事
の次第を聞き入れた。

「だから言つたんだ！ああ……なんと言つ事だ……」

そんなにオレの心の中の義兄と言う存在では無いといつに、何
故かあの時のカイルの後ろ姿が脳裏を掠めた。

「『キリアートン』の国王グエインという者は、非情に残酷な性格
をしているそうだな」

「はい、一代にして国一つを統治した男で、年もまだ若いそうです。
確かに、カイト皇子と同じ年ではなかつたでしょ」

「貴族がそうしたまつた。それに対し、

「さて皇子、いかがいたしました。こうなつた以上、一刻の猶

予も「やせこません」

「いらぬ事を……とでもいう風に、これから的事をどうあるべきか
?それを求めて宰相ケルトは促す。

「このままでは、カイル様共々我らの国は崩壊いたします
事態の重さにオレ自身頭を悩ませた。

オレには荷が重すぎる……誰か良い知恵を授けてくれないだろう
か……

などと、一言も発せられない自分に腹立たしさを感じた。そんな
時ふと思いついた。

「確かに、我が國と他の二国は、契約を交わしていると聞いたのだが
……」

「確かに。一度我が国『ヒストラーザ』『キリアートン』『サリバ
ーン』の間で、五年前不可侵条約を締結しております……ですが、一
年程前からこの条約に反する輩が現われて参りました」

「それに対して、国は何をしていた?」

「……」

「黙つている所をみると、明らかに、何の処置も施していないのだ
な!」

その言葉に、宰相ケルトが、

「しかし皇子、それらの者達が出入りする通行手形には、何の偽装
も『やせこません』でした。何かを成すにもこの国の手形がある限り法
には触れません」

と、少し自嘲ぎみに答える。

暫くの間周囲にざわめきが起つていた。

「しかし、今回の事は確かに侵略を受けているのだぞ!ならば、こ
こはもう一度二国間で話し合いをするべきではないだろうか?いやそ
うすべきだ!」

オレの言葉に静まり返る厳格な会議室。

「直ちに、一国に使者を出してこの『ヒストラーザ』にて話し合いを持つように伝えよ。これは我が国の皇子にして国王となるカイトの意志だ！そもそもば、オレ自身『キリアートン』へと出向き、グエイン国王と会い見える。それが嫌であれば直ちに行え！以上！」

そう告げると、オレは複雑な気分で席を立った。

その晩、直ちに各国に伝令が回った。『サリバーン』からは、その夜に使者が現われ受諾の返答を返して来た。

しかし『キリアートン』からは次日になつても返事をよこす気配がない。

もう一日待つ事に決議は固まつた。が、次の日になつても『キリアートン』からはとうとう使者は訪れなかつた。

「期限切れだ。明日、オレが直接話をつけて来る。供は不要だ。グエイン国王の意志を直接訊きに参る。よいな！」

そうして、二日目の朝、オレは『キリアートン』へと旅立つた。

それが、この後とも言えない事のはじまりになるとも知らずに……

#7 ゲインとカイル

ゲインとカイル

栗毛色の髪に白い肌。

そして、穏やかな緑色の瞳は今も忘れる事が出来ずにいた。初め、天使が自分の傍に舞い降りたのかとも思えるくらい、それは印象的であつた。

実の所『キリアートン』の国王ゲインにとってカイルは命の恩人であつたのだ。それは未だ、この地方が国として成り立たない頃の話。ゲインが山賊として、『エストラーヴ』や各地を荒らしていた時の事であつた。

仲間の一団を従えて南下していた際、自ら張つていた狩猟用の罠にかかる、負傷してしまったゲインは、暫く、仲間とはぐれて敵から身を隠しつつ山を徘徊していた。

「くそつ。こんな時になんというドジをオレは……」

身に纏つた衣服を切り裂き、その布を負傷した足に巻き付ける。

こんな時に敵にでも見つかつたら厄介だ

ただただ、そんな事を考えていた。

そんな折、足下から声が聞こえて来た。

「カイル！ そんなに遠くに行つたら危ないよー！」

まだ年端も行かない同じ年齢くらいの少年の声であつた。

ちつ……なんて事だ、見つかるわけには……

そこに、『ガサツ』と、目の前の草を分け入る少年が目に入った。

栗毛色の長い髪を後ろで一つに束ねた少年だつた。自分とそつ年
が変わらないのではなかろうか？いや？少し年下か？

「大丈夫だよ。」の辺りは慣れてるからー早く母上に薬草を届けた
いんだ！」

そう言つと、足元に生えている薬草を探して探している。

「確かにこの辺りに多いんだ。あとね、傷口を癒す薬草もあるんだよ。
さつきカイト転んで怪我しただらう？ちょうど良いから一緒に探し
てあげる！」

草場の陰になつているグエインの姿は見えないらしい。とそう思
い込んでいた。

「あれっ、そこに誰かいるの？」

息を潜めていたはずだつた。それなのに気づかれた？

「変だな？なんだか気配がするんだけど……」

目が見えていないんだ……

と氣付くのにさほど時間はかからなかつた。

『ガサツ』

と小さく葉が擦れる音が響く。

「声を出すな！」

グエインはカイルの腕を取りその一の腕を後ろにまわし身動きが
とれないようとした。

「ここにはお前だけがいるのか？」

と、声のトーンを落とし、小声で訊く。

「…ひつん。ボクともう一人、ボクの弟がいるんだ」

『ギュッ』と握りしめられたその手の力が抜ける。

「お前、目が見えないのか？」

と切り返す。

「うん、見えないんだ。幽かに光を感じたりはするんだけど……」

「そつか…悪いが弟君に、こちらには来ないよう言つてもうえな

いだろうか？」

突き付けられた剣を背中に感て、事を察したカイルは、「カイトっ！悪いんだけど、母上の所に戻つて！半刻もすれば戻りますつて伝えて来てくれないかな？ボク、もう少しここで薬草を摘みたいんだ！」

とつさに機転を利かせたらしい、それとも何か？カイトなるものに危害を加えさせないためか？

「なんだ？そんなに摘んでもまた一週間後に来るんだぞ。余つちまう！良いから早く帰るうー」

不審に思つたカイトは『ガサガサ』と音を立ててこちらにやつて来る。グエインは、この後の事を考え、剣をよりきつく握り締めた。「わかつてゐる。もう少しだけだから！良いから気にしないで、先帰つていて！ボクもすぐ帰るからっ……」

少し上ずつたかも……ともカイルは思えたが、

「わかつたよ。それじゃあ気をつけろよ～慣れてるとはいえ、いろんな所に怪我する要因があるんだからな～」

しようがないなと言う声色を残して『ガサガサ』と音を立てながらその場からカイトは去つていった。

「ふう……」

カイルは息をつく。

「取りあえず一息つけるな……」

グエインもその事に少しだけ安堵を感じたのかもしれない。いや、この者を囮に逃げることくらい出来たはずなのに、負傷した脚でそこまで融通は利かないのも事実だ。

「ねえキミ、どこか怪我をしてるんじゃないの？」

先程からこの場所を立とうとしないこの者の行動に疑問を持つたカイルは問う。

「見せて。と言つても見えないんだけど。ちょうど、傷口に当てるための薬草を摘んでいるんだ。少しは善くなるかも……」

カイルは籠からその薬草を選別し、取り出した。

グエインは、ためらいながらもこの少年の言つ通り、傷付いた脚を見せた。

「かなり、傷口が深そうだね……」

巻き付けている布から滲んだ血がべつとつとカイルの手の平につく。その感触で判った。

「早くお医者様に見てもらつた方が良いよ。この辺りって、狩りをするための罠が多く仕掛けられてるらしい。僕も以前その罠に掛つてしまつたんだ」

と、何故だか悲しく微笑むカイルに、そうなのか。と少しだけ納得した。

「知つてゐる……所で、お前はこの辺りに住んでいるのか？」

「グエインは、柄にも無く他人の事に興味を持ち訊いてしまつた。母上がこの近くの山荘に身を寄せてるんだ。それで週に一度ボクがこつちまで足を向けている」

「目が見えないのか？」

少し疑問に思つたグエインは問いかけた。

「弟が……と言つても義弟なんだけどね……彼が、力を貸してくれてるんだ」

見えない目でこうかな？と先ほど巻きつけた布を外して薬草を傷口に刷り込むように当てた。

「イツ……」

「ごめん。本当は、この葉を摩つて傷口に当てるのが本当なんだけど……今のボクの手ではこれが精一杯なんだ……」

傷口を塞いで、新しく自分の衣服の右裾を口で引き製きその箇所に巻き付ける。

「はい、できたよ。これで少ししたら傷口も少し楽になる」

そこにあるであろう。その少年の顔に微笑みかけた。

「グエインは戸惑うしかなかつた。

「あ、あり……がとつ」

普段言葉に出して言つた事もないのと、さじない言い方になつ

た。

「お前の名前……なんて言うんだ？」

さつき叫んでいた少年の名前で知っていたはずなのに、自らが訊いておきたかった。

「名前？ ボクの名前はカイト。カイト・ラ・シユメール。君の名は？」

その名を聞き、戸惑ったように答える。

「オレの名はグエイン。グエイン・マイル・ド・キイル。お前とは、また会う機会がありそうだな。行つて良いぞ。次会う時は……」

その先が言えなかつた。

しかし、緩んだ腕から離れたカイルはそのまま振り向く事なくその場を立ち去つて行つた。

運命とは、かくも残酷なものだらうか？ 『エストラーヴ』の血筋の者に助けられる事になるとは……

しかし、時は流れしていく。ただ一定の方向にだけ。

運命は変える事が出来ないのである。それはこの地方に語り告げられたものであつた。

そんな事を思い出し、グエインは、溜め息をついていた。

「どうなされた。グエイン国王？ お珍しい」

宰相のメイデインは意外なこの国王の様子にそう言葉を投げかけてしまつた。

「本日、カイト皇子自らが参るそうです。これで我が国が『エストラーザ』を手中に治めたも同然ですな！」

勝ち誇つたかのように言つその顔はほころんでいた。

メイデイン宰相も、この国を建てた時グエインの側近くで仕えていた将校で、今では宰相の位にもなつていた。年もグエインとさほど変わらない。若くして実に優秀な宰相であった。

「今年の冬への貯えはどうだ？」

珍しくも国内の事を訊くとはどうした事か?メイティンは、疑問に思ったが、

「今年も例年になく守備は上々です。陛下が心配される事は何一つ

「ございません」

「そうか……」

グエインはそつけなく席を離れた。

「暫く一人になりたい。席をはずしてくれ……」

この時のグエイン国王の心中など何一つ掴み取れなかつたメイティン宰相は、

「承知致しました」

とだけ言つてこの場を離れて行つた。

この広い講堂に残されたグエイン国王は、もう一度座につき頭を抱えていた。

この国で、圧倒的力を有する残虐な王ともあらうべき姿とも思えない程……それは余りにも小さい姿であつた。

『サリバーン』

年中真夏のように暑いこの地方は、西に行く程雨さえ降らないそんな地帯であった。民のほとんどは、『エストラーザ』寄りの東側に居を構えている。また、オアシスを求め歩く遊牧民は、夏は東に、冬は西に移動する。そんな、戦いを微塵にも意図しない平和な国であつた。

食料になる作物は雨期に麦を植えては取っている。しかし、それではほとんど生活が成り立たないので、隣の国『エストラーザ』に半分頼っていた。

現国王ハザウェイは、おおらかで懐の広い男である。一つ間違うと、民衆に埋もれても気づかれないほどに、国王としてより人間味のある人物かもしれない。

そのためか、民衆受けする人物でもあつた。

そして、この人物の父の名はマクエル・ラ・シュメール。
つまり、『エストラーザ』の現国王ラシュエル・ラ・シュメールの弟であり、『エストラーザ』とは親戚格の国であった。

その、弟であつたマクエルは、兄のラシュエルの政治の仕方に不満を持ち、配下を引き連れて、この『サリバーン』を建てた。

今では亡きマクエルの事を、その子ハザウェイは、勇敢な人物として後世の書に記してはいるものの、その政治とは打って変わった国政を敷いている。

つまりは、『エストラーザ』無くして、この国の政治、そして生活は成り立たなかつたのであつた。

そして現国王には一人の子供が居た。

長男にフェンディ、長女にウェンディと言つ子らを授かっていた。
「お前達もそろそろ成人をする頃だな」

フロンティアは今年で十五歳。妹のウーホンティアは来年十五歳になる。

「はい、父上！」

聰明な瞳をしたフロンティアははつきりした口調で答える。

「私も、今年で十五になります。そろそろ、国内の仕事も覚え、父上の片腕になりたく思います」

そう答える姿勢は、この国を背負つて立つ皇子として充分に足る程であった。

「はつはつは。よくぞ申した。近い内にお前には一働きしてもいいだろう。心しておけよー。」

「はつ」

その隣に座している少し引っ込み思案なウーホンティアはその様子を暖かく見守っていた。

「それからウーホンティアよ、そもそもそろそろ嫁に行く準備をしなくてはならんのだが……お前の方でこの男なり……とこつ者はおりぬのか？」

突然自分に話を振られ戸惑うウーホンティア。

「いや、何……ちょっとした縁談を考えてはあるのじやが……そちに

意中の男がいては、申し訳ないのでな……」

少し控えた言い方は、ハザウェイ国王らしい優しさを秘めていたりする。

「意中の男の方などと……そんな方おりません」

少し顔を赤らめたウーホンティアは恥ずかし気に下を向いた。

「そうか、わかった。それならば、父が探して来た男であっても良いと申すのだな？」

微笑みながら、ウーホンティアに聞き返す。

「実は、この国と『エストラーザ』の国闘をやるやしないものにしてたいと思つてゐる。出来れば、国王となるであつたカイト皇子はぜひいつあるうかと思案していた所だ」

下を向いていたウーホンティアその言葉を聽くや和やかすぐ顔をあげた。

「カイト皇子と申しますと……一度『サリバーン』にて、雨季祭で参られたの方でござりますか？」

「そうだ」

ウーンディの頬が先程よりも赤らんだ。

「不満か？」

「いえ、とんでもございません……の方が、私の夫になつて下さるのでしたら喜んで、お受け致します」

と、そんな言葉がウーンディの口からもれる。

「はつはつは。なんだ、お前も気に入つていてようだな。気に病む事などなかつた。実は、そのよつな話を持つて来た事があるのだ」そして、今までのハザウェイが考へていた事のいきさつを伝えた。

「良い話じやないか」

フーンディが相槌を打つ。

「しかし、カイル皇子はこの事を存じなのですか？」

少し不安そうに、ウーンディは訊き返す。

「そのことであるが、皇子にはまだ知らされていないようだ」「そうですか……」

『ヒストラーザ』からの緊急の使者が現われたのは、そんな平和な話をしていた頃だった。

「それでは、『キリアートン』が、反乱軍をよみこしたと申されるのか！」

ここに広間の一角で、一同にざわめきが起つる。

ここに『サリバーン』の広間に『ヒストラーザ』からの使者を迎える報告を聽いていた。

「グーンめ、今を期に兵を擧げて来たのか……侮れん奴だ！」

「つきましては、一日後、緊急に三国間での話し合いを持つこととその顔をお伝えしたく参上つかまつりました」

「確かに、分かり申したと伝えて頂きたい。我が国は、今、戦をす

る」とは望んでおりんのでな。そつに飲えて頂きたい

「承知致しました」

『エストラーザ』からの使者が立ち上がり、広間から立ち去る。未だ、この事態を飲み込めない人々はざわめきを止めない。

「皆のもの、静まれ！」

「」の声の主フェンティは広間の中央に進み出て、制した。不安を漏らす者どもはその言葉に眼を向ける。

「」の国は、誰の手にも渡さない。今までの平和な国を死守する事態の時が来た。グラインの企みを討つためにも私は、一日後の会議に望む！安心せよ！」

国王ハザウェイはフェンティの後ろの座から立ち上がる。

「父上！私もお供致します！」

フーンティがハザウェイを振り返った。此處で自分の今までの成果を見届けてもらいたいが為でもあった。

「」には後学のためにも、私をお連れ下さい

頼もしい面持ちのフェンティの瞳が、ハザウェイの前にあつた。「わかった。明日にでも『エストラーザ』に旅立つ。そなたも用意を致せ！なれば、我と、フェンティが不在の後のことは、宰相トレビュウに任せる。後の事、宜しく頼むぞ」

「ははあ！」

宰相トレビュウの声が辺りに響き渡った。

「皆の者聽いておるな！陛下のおられぬ間、全て私の意志が陛下の言葉と聞き入れよ。」『サリバーン』を統括する。氣を引き締めて陛下の帰國を待つのだ！」

こうして『サリバーン』の臣はこれから的事を念頭に置き、一つの心になる意志を固めたのであった。

#9 裏切り者

裏切り者

『キリアーントン』への道のりはまさに長く険しいものであった。オレを乗せた馬の息があがつて来た頃、近くに流れる川の元で休憩をとつていた。

「よしよし、お前もよく走ったな」

今まで自分を乗せていた馬に思わず礼を言つ。

実は道中、『エストラーザー』と『キリアーントン』との国境で一度休憩をとつていた。

ここでもう一度休憩をとつておひづ

そう決めたオレは、正直かなり疲れていた。体は覚えていとは言え、初めて馬に乗ると言つのに、この長く厳しい道を行く事になるとま……

大分冷え込んで來たな

朝、城をたつたのだがもう夕暮れだ。ここから先、どれだけ冷え込むのだろうか？そんな事を少し考えた。

しかし、自分もよく決断したな

この見知らぬ世界で、右も左も判らないと言つて、供一人連れずここまでやつて來ていたからだ。

一応地図らしき物を持ってはいたが、それは役に立つ物でもなかつた。きっと誰も『キリアーントン』へと足を運ぶ者がいなかつたの

であるう事をそれを見て実感した。

「さてと、急がなければ。日が沈んでしまつ」

呴くと、馬を跨ぎオレは『キリアートン城』へと動き出す。

『キリアートン城』に到着するのはそれから、一、二時間後の日も暮れた頃であつた。

田の前には重厚な門が目の前に立ちはだかっていた。

周囲には、城を守る兵が見下ろすかのように立つてゐる。

「私は、『ヒストラーザ』のカイト皇子である！直ちにこの門を開け！グエイン国王にお田通り願いたい！」

オレは馬を降り、辺り一面に響き渡る声で開門を要請した。

その『キリアートン』の兵は本当なのか？と訝しく何やら話をしているらしかつたが、暫くすると、

「開門ー！」

と号令を出して、城内にオレを招き入れる。中にいる兵が、オレの周りを取り囲むように集まつて來た。

「カイト皇子、いらっしゃー！」

中で一番格が上であるう兵が先導する。暫くすると、もう一つの門が見えて來た。

「『ヒストラーザ』のカイト皇子が参られた。開門願いたいー！」

なんと厳重な守りだ

『ヒストラーザ』の城の事を思い起こす。緑溢れる平野に、このよくな門は無い。有るのは、背の高さほどどの門。

それだけグエイン国王は警戒心旺盛な人物だと窺えるな

相対した時の事を思い描いていた。

「どう切り出すか、もう少し考えておかなければ……」

第一の門を潜り終えると狭くはあるが開けた街が、眼前に広がった。

こうして、『キリアートン』の街に入り三十分後には、国王のいる広間へと導かれていったのである。

暫くすると、奥の扉が開いて侍人が現れる。

「これはこれは、カイト皇子よ。よくお越し下さいましたな」
体格の良い少し隙湿な黒い面影を宿したグエイン国王の第一声はそう悪いものではなかつた。が、気は抜けない。

漆黒の髪をしたグエイン。その表情は、何かを判別するかのようにオレを眺めていた。

「グエイン国王よ、この度のこの申し出、どう言つ事であるのか説明を頂きたい！」

厳しい面持ちで、オレはグエイン国王に進言する。

「ははは、カイト皇子よ、何もそういうじらをたてなくとも良いではないか？」

まるで楽しんでいるかのように笑うグエインに『むつ』としたオレは、

「グエイン国王よ、笑つて言える事ではないぞ！カイル及びその従者三人を返して頂こうか！そして、三国間の不可侵条約を破つた件についての、返答をお聴かせ願う！」

既に頭に血を上らせたオレは話の神髄に言い及んだ。

「不可侵条約？はて、そんなものを結んだ覚えはないが……」
惚ける気か！オレは余計頭に血が上つた。

「何を莫迦な事を言つている！ここにその訴状を用意して来た。御覧頂こうかな！」

『エストラーザ』に有つたその書状を突き付けた。

そこには、確かにグエイン国王の調印があつた。

「これでもまだシラを切るおつもりか？」
グエインの横顔に笑いのしわが走る。

「あははは、このようなもの無効だ！」

大げさに手を広げると、高笑いをはじめ、腕を前に伸ばし、オレを指差した。

「何？」

「そんなことより、何故わが国の申し出に背いたのだ？ 確か、初めに、第一皇子を遣すように伝えたはずであるが？」

そう言つと、もう片方の手に握っていたのであるつか？「ゴロゴロと言つ音とともに何かが転がってきた。

「…」

それが五つの首である事に気が付いたオレは、一瞬後ろに身体を反らせてしまった。

「…」

「驚く事はない。裏切り者の末路だ。裏切り者には死を。我が國の教えだ！」

「まさか……」

「そう、まさか。

「私は調印などしてはおらん」

そういうと、立ち上がり、その中の一つの首の髪を掴み持ち上げる。

「！」者が勝手にした事だ。我が弟のな！」

そう言つとその首をオレの前に放り投げる。その首を見詰めオレの脳裏を掠める様に出て来た言葉は、

「まさかこの他の首は……」

オレは立ち上がった。

「そう、お前が返して欲しがっているカイル第一皇子と、その供の者達だ」

吐き気が起つてくる。このようなものを見るためにオレは「！」に来たわけではない。

「うつ……」

「そなたも裏切り者のためここにまで来なければならぬ」とは……御苦労な事だ」

「ば……莫迦な……」

相対するグエインとオレ。考えの違いと言つものを感じ取つた。

「それとも、偽者を遣わすよつ言つたのは、カイト皇子そなたの意向か?ならばそれこそ問題だな!」

オレの周りに豪傑な兵が取り囲んだ。

「問題?」

ぐつと我慢していたオレの表情は崩れていたに違いない。
「国事を考えた、カイルの行為が問題だと言つのか?それともそれを許したこのオレの行動か!」

まったく後先考えないオレの発言は、自らの災いを招いた。

「カイト皇子!」

『ハツ』と気がついた。

「そなた、今なんと申した?」

『ニヤリ』と笑うグエインの顔がオレの前に突き出された。

「この度のこの考えを、そなたは許したのか?」

シマツタとばかり下を向くオレに、

「それならば、話しは早い!」

周りの兵はグエインの指図の通り動いた。

「カイト皇子を捕らえよ!」

このことが、『ヒストラーザ』の国民の耳に入るのは、翌朝の事であったのである。

#1-0 フェンディ

フェンディ

時間は前後することになる。

『エストラーザ』に着き、カイト皇子との謁見を終え滞在のための部屋を案内された『サリバーン』の一行は、明日からの『キリアートン』の出方を待つべく体を休めていた。

「父上、『キリアートン』は、この申し出に答えてくるでしょうか？」

と、冷静な目で見据えたフェンディは、父ハザウェイに問いかけた。

「そうであればよいが……」

良い表情を見せない父ハザウェイに、

「と、申されますと？」

問いかけた。

用意された椅子に腰掛けた二人はお互いを確認するかのごとく対峙していた。

「『キリアートン』のグロイン国王は、何か確信を持つて行動している感じがする。余りにも事の運びが不自然過ぎるのだ」

「確かに、今回の不可侵条約を簡単に見過ぎている気がしますね。

それに、『エストラーザ』の国内の事を把握しそぎている気がします」

フェンディは考えるように首を動かす。

「明日『キリアートン』が動かなければ、カイト皇子はどう出るのでしょうか？それが、この先駆になる気がします」

国王ハザウェイも同感だと頷く。

「全ては、明日はっきりするであろう」

「はい」

かくして、『キリアートン』からの使者は来なかつた。その事に
フェンディは問う。

「こまま、カイト皇子をゆかせて大丈夫なのでしょうか？」

それはカイト皇子の判断が下されて、『サリバーン』の国王の耳
に入つて間もなくの事であつた。

「わからん。が、しかしこのまま動かないでいるのは不味い。人質
を取られている以上、『エストラーザ』に分^ぶがないのだからな……」

カイルの事を聞かされている以上、カイト皇子が動かざる負えな
いのだ。

「何とかならないものでしようか？出来れば力を貸ししたいので
すが、好い方法が思い浮かばない以上『サリバーン』も動けません
確かに、事情が事情なだけに手が出せない。こには、カイト皇子
に任せらしかあるまいな……」

従つて、どう仕様もならないこの状況を嘆いたものの、『サリバ
ーン』に手はないのである。

「父上、もしカイト皇子の身に何か起^{おき}るようでしたら、私を『キ
リアートン』に派遣させて下さい。出来れば、カイト皇子の後をつ
いていきたいのですが、それが出来ないのであれば、いた仕方あり
ません」

この申し出を聞いてハザウェイは疑問符を投げかけた。

「何か策もあるのか？」

「いえ。そう言つ訳ではございませんが……ただ、『キリアートン』
のグエイン国王に一度会つてみたくございます。会つて、色々尋ね
てみたい事がありますので……」

「グエイン国王は、残虐非道な人物だと聞く。それなのにそつやす
やす、そなたを奴の元に遣りたくないのだが」

フェンディの身を案ずるハザウェイの気持ちがそのまま言葉とし
て発せられた。

「いえ、ご安心下さい。みすみす罷にかかるなどとは思つており

ません。供の者と、間者を引き連れて参ります。実は、もしもの時のために武力の温存をして参りました。できれば、役立たせたいのです」

息子フーンディの言葉に意外な面が見えた。まさかそのようなことを視野に入れ、事を運んでいるとは思っていなかつたからであつた。

「お主がそこまで言つてゐるなり、考えておいで。ただし、無茶な事だけはするな！」

「心得ております」

こうして、『サリバーン』の、フーンディ皇子の決心が固まり、時は流れ、カイト皇子の事が『エストラーザ』中に流れた頃、カイト皇子奪還の幕が、切つて下されたのである。

再生

「気が付いたか？」

カイルにとつて、目を開いても何も変わらない暗闇。

「昔、お前に助けられた者だ。今回だけは特別お前を救つてやる。この近くにある山荘にお前のための場所を作つてやつた。そこで生涯生活しろ」

「何故、ボクを助ける様な事を？」

幽かに動いた影に向かつてカイルは問う。

「言つただろう。借りを返すためだ」

「それだけの為とは思えない。何を企んでいる？」

この声の主がグエインである事を悟り、残酷な事この上もない人物と謳われる、この男に助けられるとはカイルには納得が出来なかつた。

「大きな声を出すな。この事は、オレと、お前の間にしか用いられない秘密だ！」

「何を言つている！？」

「いいから静にしろ！」

『キーッ、ガチヤン』扉の開く音。

暫くすると、白んだ空氣に触れる。鳥のさえずりが聴こえた。

「オレは、一日足りとも忘れる事が出来なかつた。グエイン・マイル・ド・キール。この名をお前は忘れているかも知れないが、このオレはお前の名を忘れる事など出来なかつた。カイル・ラ・シュメールよ」

「！」

見る見るカイルの驚いた顔がグエインの眼に見て取れた。

「キミは、あの時の？」

「もう少しで着ぐ。話は後だ……」

「グエインの手の平を右手に感じながら、カイルは導かれるまま歩いていった。

『スース、ガラッ』乾いた木製の物が擦れるような音がした。
「ここがお前の過ぐす世界だ。たまに来てやる。さすがに食べるものくらいは、毎日用意してやるが……」

グエインが、カイルの両腕を掴み近くにある椅子に座らせるつに導いた。

「ここに椅子

そして、そこからとこづ風に手を使って教えた。

「ここにベッドがある。この小屋にある生活に必要なものはこのへらいだ」

薄くて硬い、布の手触りを感じた。

「この場を提供してくれるのか？」

「そうだ」

カイルは考えるように顎下で手を組んだ。

「グエイン国王。あなたの考てる事、それは一体なんなのだ？」

「カイル、お前を助ける事だ」

「助ける?」

「そうだ」

「ますます分からぬ。

「これでキミに、何の得があるんだ?」

「得?」

グエインがベッドに腰をおろす。

『ギシッ』と鈍い、木が軋む音が聴こえた。

「オレにとつての得は、カイルと言つ人物におつりが来る程の貸しを作る事くらいだな」

「それは、これからと言つ意味か?」

次には冷めたような顔つきで、カイルはグエインがいるであろう方を見る。

「でも、オレはそれを貸しだなんて思わない」

グエインの眼はあるで愛おしいようにカイルを見つめていた。でもそんな事は、カイルには判らない。

「オレ自身に対しての、これはエゴだ」
さつぱり分からぬ。この男の言つていること自体、全てが矛盾している。

「エゴ？」

「そうだ。これはオレのエゴなんだ」

一瞬の沈黙。隙間から流れ込む冷たい風。それが肌に感じられた。
過去の自分と、今の自分を愛して止まないオレの、罪と罰をこんなふうに補おうといつ、なんとも虚しいエゴだ！」

このグエインの心の中に潜む悲しい何かがそつをせているというのか？

それが、今カイルが幽かに感じたこと。

グエインは手の平で頭を抱える様に俯いた。

「オレには弟がいた。お前の様に義弟という駄ではないのだがな……」

遠くで鳴る、鐘の音が聴こえてきた。

「オレは実の弟をこの手で殺めてしまった。この国を愛していた弟をな！」

鳴り響く鐘の音。

「あいつは、平和を望んでいた。しかしそれはこの手で葬らなければならなかつた。聴こえるだろ？あれは、オレの弟の死を知らせる鐘の音だ」

暫く静かに聴き入るようにグエインは黙つた。

「おれたち兄弟は、双子の兄弟だつた」

「双子……」

それを聴いたカイルの顔に、不思議な影が落ちる。

「そりゃだ。知つての通り、双子というのは、凶兆の証だ。オレたち兄弟にかせられた証。産まれた時、兄であるオレは……未だ『キリアートン』の国を起こす前のオレは……生きる証をもらひ事が出来なかつた」

「生きる証？」

カイルの言葉を無視するかのようにグエインは、話の先を続ける。「母は、兄として産まれたこのオレを殺そうと言つたらしいが、父はこの事を、政治的目的で生かした。利用出来る全ての事……あいつは、それをオレに求めたんだ！」

窮屈な場所でもがいている大きな生き物のような……そんな印象をカイルは感じた。

「オレはそれが許せなかつた。飽くまでオレは弟の影としか生きられないのだからな……」

「影……それでは、『キリアートン』を建てたのは……いつたい……」

「オレ達の名前は一つしかない」

「えつ？」

それは一体どいつ言う事なのだ？

「グエイン・マイル・ド・キイルこの名前しかないんだ」

たつた一つの名前。それは人間の生きる証を排除した印といえよう。

「こんな事を、君は何故敵国のこのボクに話す？」

カイルは、思つた。これは『キリアートン』の極秘事項なのではないか？と。

「だからH「なんだ。このオレの……」

十三回日の鐘の音が鳴り終わつた。

「カイル。お前の事はいろんな手段を使って調べた。お前の周りにオレの間者を差し向けてまでな……」

『ガタツ』と椅子が揺れるほど驚カイルは驚いた。そこまでして？

「そして思つた。お前は、義弟の事を妬ましいと思つた事はなかつたのか？只でさえ側室の子として産まれ、あまつさえ目を見えなく

してしまった……そんな義弟を憎いと思つた事はないのか?」

カイルは、グエインの真つ直ぐな視線を感じていた。

「それは……ボクに、カイト皇子のようになれば良かつた……と、そう言わせたいんですか?」

カイルの顔が鈍い色で翳つた。

「羨ましいと思つた事はないのか?」

グエイン国王が知りたかったのは、こんな事だつたのか?

「羨ましい……と思わなかつたと言えば嘘になる……だけどボクは、カイトの事を憎いと思つた事は一度だつてない!」

何も映さない、緑色の大きな瞳が力強く揺らいだ。

「それがオレには分からぬ……何故そんなに、他人に優しくなるのだ?」

今ここに、全く違う道を選んだ人物が相対していた。

「守りたいと思う者達がいるから……そつぱつたら分かるだろ?」

「？」

「守りたい者?」

グエインの心に過つたものがなんだつたのか分からぬが、微

かに彼の心に何かが生まれているようだつた。

「そう。守りたい者……それがあるからボクは強くなれた。今だつて守りたいとそう思つてゐる」

考えるようにグエインは頭を下に向けた。

「オレには無い。自分を保つので精一杯だ……それがお前とオレの違いだと云つのか?」

それは、まるで自分が誰なのかまだ分かつていない……そんな子供に見受けられる。

「ボクは、この世の平和と、幸せを夢に見る。それは、どんなに小さくとも、それがボクにとっての守りたいものであれば、毎日が楽しいから……幸せな気分になるんだ……キミはこういう気持ちは感じないので?」

どうしてだらうか?あやすようにカイルはグエインに問いかけて

しまった。

「幸せを感じた事など無い。すべて、自分のためになる事しか頭に無いからな……お前は……まるでオレの弟のよつた事を言ひ。あいつは、平和な国を作りたがっていた……しかし、そんなものなど何も面白く無いではないか！」

グエインは、吐き捨てるよつと声を出した。そんなものが何だといつのこと！

「お、面白くない？」

その言葉にカイルは、憤りを感じてしまった。面白じから、面白くないから。そんな理由で國を、民を従える？そんなことが有つて良い物では無い！

「そうだ、毎日同じ事の繰り替えしで、一体何が面白こと言つのだ？オレには理解できない……」

「それは、君が産まれ付いて、ずっと苦しい目にあつていながらそう思つんだ！」

その言葉に、グエインの目に妖しい光が揺らぐ。

「苦しい目にあつてきていないだと？！」

「安らぎを感じる暇なく、自分を不幸だとしか思わず！」……甘えてきたんだ！

「まるで説教を受けてる様だな……」

静かに時が流れしていく。これは、意味のある時間なのか？グエインはふと考えた。

「説教のつもりなど無い……ただキミは、逆らうきれない運命の中で生き、そして、まだ知らない優しさを欲しがっている……子供のように戸惑つているようにボクには感じられる。だから探してみればいいんじや無いかなと思う。自分にとつて大切なモノがなんのかを……」

まるで、子供に相談されている……そんな気がしてならない。

「オレは、子供なんかじゃない。既に、一国の『主』だ！」

そう言つグエインが子供だと、やはりカイルは思った。そして変

な気分に陥る。

何故神はこんな事をボクにさせなのか

「今日はここまでだ。明日また来る」

話はここまでだ……と言うように急にグエインは腰を上げた。
『ギシッ』と、言つ音が聴こえたかと思つと、『スー、ガラツ、タ
ンツ』そして、少しだけ感じた光の海が再び闇に閉ざされた。

カイルは思った。

ボクにできる」と。それはここにいる」と。ただそれだけなんだ

……

時は余りにも早く動いていた……

#1-2 気掛けり

気掛けり

暗い闇の中の夢を見た。

それは、死の臭い立つ草原に、一人の少年が対峙している。そんな夢だった。

それを外から見ているオレは、そんな一人をどこかで見た事あるような気がして、ただ眺めていた。

白い服を着た少年と、黒い服の少年。

暫くすると周りが明るくなり、次第に辺りの情景がはっきりして来た。

突如、それが何なのか?に気が付き吐き気がした。

周囲には、積み重なるように首のない死体が「ロロロロ」としていたからだった。

すぐにその視界から逃れようと視線をそらす。

目をそらした先には、またあの一人の光景が。すると、一瞬『キラリ』と光ったのが判つた。それは、二人の間に差し出された剣。黒服を着た少年が、先に切り掛かる。それを制するように白い服を着た少年が受け止めた。

それの繰り返しが永遠に暫く続く。

オレはただ見ていた。声は発したくても発せられなかつた。

何をそんなにこの二人はいがみ合つてゐるのだろう?

特に黒服の少年……闇雲にただ突進してゐる感がある。

『カキーン、カキーン』

辺りに響き渡る金属音。

どうやら、白服の少年が押されているようである。

かすかに声が聴こえてきた。どこかで聴いた事のある声。

「そろそろ諦めて、オレに切られる！」

「そういう訳にはいかない。」ここでオレが引けば死んでいった者達が浮かばれない！」

こちらの少年は金髪をなびかせ、力強い言葉を発していた。そう、どちらも聞き覚えがあるような声。

「カイトよ、それがお前の本心なのか？」

黒い服の少年が尋ねる。

「当然だ！」

白い服の少年が答える。

「ならば覚悟しろ！ お前に勝機はない！」

続けて追い込もうとしている。

「グエイン！ 勝機は、最後までやらねば分からぬ…」

オレは、この二つの名前に覚えがあった。

カイト？ グエイン？

我が名を忘れ、ただ浮遊してこの情景見ている……
「これでどうだ！」

カイトと言つ少年の横つ腹に剣が差し出されるが、それを間一髪避ける。

しかし、またまた押されていくだけでこの勝負あつたかと思われた時、

「この勝負、待った！」

と、栗毛色の髪の少年が割つて入つて来た。

「カイト、グエイン、こんな事して、何の実がある…」

中座させられる一人。オレはハラハラしながらそれを見ていた。
「決まつていい。富みと栄誉のためだ…」

グエインと呼ばれた少年が何を今さら……といつぶつと、その少年を見据えて答える。

「こんな状態で……何が富みと栄養だー誰も居なくなつたんだぞー！」
攻め立てる栗色の髪の少年。

「カイル……」

「カイル……？」

その名前を聴いて何故だか胸に痛みが走つた。
程なくして、田の前が真つ白になる。

『ピチヨーン』

何処からか水滴が落ちる音を聴いた。そしてフェードインしていく
る声を聴いた。

「カイト皇子！カイト皇子！」

その声に引き戻されるようにオレの意識は覚醒し始める。暗闇に
微かに聞こえる声で。

そしてオレは田を開いた。

「カイト皇子！何と、『ご無事でしたか！』

終に現実に引き戻された。

「かなり麁うなされていたようですが……気付かれて何よりです
どうやら鉄格子の外からの声であるようだ。

「誰なんだ……？」

『キリアートン』の兵に捕まりそのまま牢獄に入れられてから、一
体、何日？それともそう経つていないのか？オレには時間の觀念に
乏しかつた。

「私は、『サリバーン』のフェンディ皇子の密偵で、ハイルと申し
ます。あなたが、この場所に入つてから一日が経つた。という所で
しょうか！」

「『サリバーン』の……？それでは、我が国に加勢の手が回つたとい
うのか？」

「オレ向となく判るよつたな……と問う。

「そうです。『ヒストラー』の危機は我が国の危機！今に、我が国のフヨンティ皇子がやつて参ります。御安心を……」

その男、ハイルは安心してくだせりとでも言つかのよう答える。「暫くこのまま我慢なさつて下さい。必ずお助け致します」と、すると『ガシャガシャ』と言ひ鎧を擦るよつた音が聴こえてきた。それを切つ掛けに、近付いて来た兵から身を隠すよつにこの場を去つていった。

『サリバーン』とは何処の国なんだ？何だか聴いた事のある名前なのにはつきりと思ひ出せない

オレは暫く考えていた。そして、再びカイルの事が頭に浮かんだ。

オレにとって『ヒストラー』といつ国。そしてカイル

未だこの世界の住人となつてから、一週間も経つていないので、この世界が大事な何かのようを感じ始めている。

オレが、カイト皇子という一個人である事実がこの世界の秩序なんだと思い始めていた。余りにもリアルすぎる。これは、変えよつのない事実なんだ……！と改めて自覚してみた。

オレはこの先どうなつてしまつんだろうつか？……

今のオレには頭では理解できない事が、実際、体では反応している事でも、今の状況下でハツキリと分かつた。馬に等乗れないはずだたのに……等色々と。

ならば、この世界のオレは剣術くらいは嗜んでいるだらう。と開き直る。

自分自身、剣術を嗜んでいたような覚えがあるし。だからだろうか？少しあは見当はついている。

頭でも理解出来る事があつて助かつたと思つた。

そして、ふと思い出した。既に一つ、失つてしまつた者が有るのだと。

でも、もう、カイルは居ない

この地に来て、もう守るべき者が居なくなつてゐる氣がして來た。

オレはどうしてここまでカイルの事を案じてゐるのか？

あの時、投げ出された首の中にカイルの首を見た瞬間、確かに逆上する程の怒りを感じた。そして今では絶望を感じている。

カイルはもう居ない

本当はカイル自身に否定して欲しかつた……しかしもうその相手は居ない。

誰かこのオレを救つてくれ！

何故なのか判らないが、切に心の底からそう思つた。

オレのせいで、カイルは…

カイルの面影が脳裏を駆け巡る。

しかし、気掛かりはそれだけに留まらない。

『サリバーン』の使者としてやつて来る一行の身に何か怒らねば
良いが、このオレのよつと……

フロンティア皇子、彼の者はこの状況下、如何なる策を講じている
といつのだらうか？

自分のようこそ、おろかな行為はしないであろうとはまだ判つても
心配になる。

どうか無事にこの国から出でていかれますよ！」

オレは自分の心配よりも、フロンティア皇子の身を察した。
一度入つたら出るもの適わず……

何だかこの国はそんな國のように感じられた。

本当に運命は変えられないのか？この世界の教えの様に……

そうはなりたくない。

運命は切り開ける。

オレはそう思いたかった……

#13出逢い

出会い

再び、時間は前後する。

「では、父上行つて参ります」

囚われの身となつた、カイト皇子の事態を知り、フェンディ皇子はこの時が来たとばかりに身支度を済ませ、既に客間を離れ、庭へと赴いていたハザウェイ王に声を掛ける。

「気をつけて行つてこい。そして必ず戻つて参れよ！」

「必ずカイト皇子を救い出し、戻つて参ります。それでは！ハツ！」さつそうと馬を操り、フェンディはカイト皇子が捕らえられる『キリアーント』を目指し数十人ばかりの供を連れて旅立つた。それは粉雪が『チラリチラリ』と舞う朝であつた。

「ここから一手に別れよう

『キリアーント』という国に何の面識もない一同は、まず周りの地形を知る必要があると、この場所で一度調査をする事にした。

「では、わたくしは東の奥のこの辺りを見て参ります」

簡略化された地図を見ながら、フェンディの片腕の一人、マーチンはそう言つた。

「ふむ。ならば、私はこちらの北側への道を行くとしよう

同じく片腕の一人、ユールが言つ。

「フェンディ皇子、偵察となれば少人数の方が宜しいかと思います。四方に別れて、四、五人の部隊で行動致しましょう！」

その言葉に合意したかのように、

「皇子の身の回りが手薄になり、少し心配かも知れませんが、その方が、『キリアーント』の連中には気付かれにくいでしょう」

従者リオンと、メイトが同意したように頷く。

メイトは、それを頭に入れて、
「我が部隊がフェンディ皇子の援護に回ります。皇子、宜しいでし
ょうか?」

メイトは、女だてらひこの部隊の大将をやつてのけるほど剣と弓
を使いこなせる女傑である。浅黒い肌に、黒くてこさつぱりとした
髪。まさしく鬪うが為に生きているといった感じだった。

「宜しく頼む」

話は決まり、実行に移される。

「それでは!」

各隊は、この場を立ち去るうと馬に跨る。

「メイト、フェンディ皇子の身を頼むぞ」

「心配するな。判つている!」

各隊の者達は、メイトにそれぞれ声を掛け目的を果たそうと四方
に散つて行つた。

「では、我が部隊も行きましょう!」
そして、フェンディと共に前進して行くのであった。

フェンディの部隊は、『キリアートン』の地の西に位置する森の
中を進んで行つた。

朝から降つてゐる雪が木々の根に積もり、砂漠化の進んだ『サリ
バーン』の民にとって、この慣れない道を苦労しながら進んで行つ
た。

「寒いな……」

フェンディは吐く息の白を『サリバーン』との気候の違いに少
し根を上げそうになつてゐた。

「皇子、この布を……」

すぐ後ろを歩くメイトが、フェンディのその様子に気付き、予備
に持つてゐるという布を差し出した。

「メイト?」

「わたくしが余分に持つて参つたのです。遠慮なさらずお使い下

「さい」

「すまぬ。素直にそうさせてもらうつか」

ふと、メイトの馬に積まれている荷物を窺つた。が、そんなものは無むそうだった。メイトの嘘が…心に染み入る。

「この辺りはまだ、開拓していないうだな……木々を切り倒した形跡がない」

そして、話を本題に戻す。

「『キリアーントン』の国王グエインの計らいでしうか?」

そのことに、答えるメイト。

「あり得るな。もともと山賊をやっていた人間だと聞く……地の利を持つてこのようにしているのだう」

「そのようですね」

そんな会話を交わした後、黙々と五人の部下達を連れたフーンティは、西の地から少しずつではあるが中央にある『キリアーントン』城へと歩を進める。次第に風が強くなり、降り積もる雪の深さで馬を操れない程になっていた。

「ここからは歩きだ。各自馬を連れて足下を取られないうに進め！」

フーンティが皇子として、そして、この部隊を率いる者として指示する。

しかし、視界を遮るように吹雪くこの『キリアーントン』の領地。自國『サリバーン』の中で育つて来た者達にはこの国の気候に付いて行くだけで精一杯だった。

こんな木が多く覆い立っているのに、顔や頭に冷たい雪が叩き付ける。風と共に運ばれて来るのを腕で塞いでは歩き続けた。

「このままだと、『キリアーントン』に着くまでにこゝえ死んでしまうな…何とかこの雪だけでも、止んでくれればいいのだが…野宿する訳にも行かないし…」

余りの風土の違いに、流石にフーンティは根を上げてしまった。

「フェンディ皇子……ほらつ。あそこに小屋があります！少し休みましょう」

誰も住んでいないであろう様子の小屋がメイトの視界に入った。丸太を簡単に組み立てただけの小屋である。

「すまない。そうしよう」

フェンディ皇子の目にも入つたらしく、一行はその小屋を目指し足を運んだ。そこに着くのに半刻の時間を掛ける程雪は深くなつていった。

「誰も住んではいらないのだな……もし誰かいるようだつたら、直ちにその者を切らなければならぬ」

小屋の前まで来たフェンディの一一行はドアの前で中の様子を窺つた。

「この時期こんな所にいる者などいないでしょ？…もしもの時は、わたくしがこの場を受け持ちます」

「わかつた。任せる」

背の低い屋根からは痛そうな氷がぶら下がつっていた。どう見積もつても誰もいないであろう小屋だ。確かに人の動きがない。

『ガラリ』とこの小屋の戸が開けられる。

中は暗く人の気配が感じられなかつた。と言つより、生活感がないと言つた方が正しいのかも知れない。

奥にもまだ戸があるようだ。

『ギシリ』とフェンディは一步踏み入れる。

「誰かいるのか？」

『シーン』と静まつた部屋の中からは、物音一つ聞こえなかつた。

「良かつた、誰もいないようだ」

『ホツ』と息を付く。

「中に入ろう」

五人の『サリバーン』の者達はその小屋に足を踏み入れた。それ

にしても、暗い。

「明かりを…誰か火を熾せ！」

「承知しました」

そう言つて一人の男が火を熾す。運良く近くに乾いた木切れを見つけそれに点火した。

少し明るくなつた部屋の中。辺りの様子がぼんやりとではあるが、そのおかげで判るようになつた。

使われていない炊事場。埃を被つている。

「ひどいな」

本国の様式とはまるで異なつたこの様子に、少し戸惑いを感じた。
『サリバーン』の様式はもつと広々としているし、屋外食といった感じだ。

「フェンディ皇子、これを……」

と、食器の山をメイトが差し出す。

「これは、まだ新しい……まさか誰かがここを使用していると言つのか？」

その言葉に、一同が『スツ』と身構える。視線は奥の部屋へと向けられた。忍び足でフェンディはその戸の前まで立つた。そしてそろりと戸を開きかけた時、

「誰？」

という声が返つて来た。

今まで誰もいなものだと思つてきたにもかかわらず、その声を確かに聴いたのであつた。

フェンディは惜し気も無く『ガラリ』という音をたててその部屋にのりこむ。

「メイトー誰かいる……」

「なんですよー！」

少し部屋の中の空気が動いた。そこには確かに人がいる氣配が漂つた。それは何とも僅かな氣配。

「可哀想だが、お主の命を頂くー！」

明かりのない部屋の中、その氣配を頼りにフェンディは剣を引き抜き襲い掛かつた。

『ザクツ』という手ごたえだけが感じられた。

「な、何を！」

それが、布を切つただけで人の感触ではない事に気付いた。

「これでは……火を持って！」

配下の一人が明かりを戸の近くまで持つて来る。幽かに火に翳された中に見た者は、虚ろな目でこちらを伺つてゐる。

「どなたか分かりませぬが……ボクは何も致しませぬ」

落ち着いた声が返つて来る。

「そなたに姿を見られた。それが不運だつたのだ！」

引き抜かれた剣は、薄暗い部屋の中逆光の光を受けて『キラリ』と弧を描く。それが、その主の眼前まで落ちて来た。それなのに、ピクリとも動く様子が見られないその主にフェンディは気づいた。

顔面寸前『ピタリ』と止まる刃。

悲鳴さえも無い静まり返つてゐる部屋の中。

「もしかしてお主…目が見えぬのか？」

『ビクリ』とも動かないその様子に驚く。

「はい。見えません」

返つて来る答えにフェンディは、なぜか胸をなで下ろした。

「目も見えないので、こんな所で何をしている？」

なぜかこんな言葉を返してしまつた。

「見えなくとも、大体の事はできるから」

意表を付いた言葉。

「メイト、この者の顔を見たい。火を！」

差し出される松明。

「お主の名前は？」

「カイル。カイル・ラ・シユメールと申します

「何！」

フェンディは思い出していた。確かに、目を負傷したということ、自らの姿を国政に出した事のない親戚がいるという事を聞いたことがある。フェンディにとつて、初めて会つた親戚に当たる者。

「カイル殿なのか？」

「フェンティは愕然とした。もつ少しでこの者を切つていた所だつたからだ。

「しかし、カイル殿は『キリアートン』のグロイン国王の手で……そう聽かされたからこそ、カイト皇子はたつた独りでこの地に赴いたはず。

「これは一体……どう言つ事なんだ？」
「フェンティはただ立ち廻くすだけしか出来ない。次の言葉が出てこないのだ。

「それは、ボクにも判らない。どうやら助けられたようですが……一體どう言つ意図でこのような事になつたのかは判りませんが……確かにボクはこのように生きております」

落ち着いてカイルは話す。

「あの、グロイン王によつて……か？」

噂にしか聽かない国王の名前。

「そうです。それも、彼の者が一日に一度訪れるんです。この小屋に……それも朝早く」

「なんと、ここにグロイン自身が来るのか？」

驚きを隠せない。

「ところで、あなたは？」

「名乗るのが遅れました。わたくしは、『サリバーン』のフェンティ・ラ・シユメールです。つまり、あなたの鳩子に当たる者です」

丁寧にお辞儀をする。

「あなたが、フェンティ皇子で、噂には聞いておりました。お会いできて光栄です」

と、カイルは右手を差し出した。

「このような所でお会い出来るとはこちうんが光栄です。そして、無事なお姿である事も」

二人は手を取り合ひながら一度の事を話し合つた。

「カイトが……いえ、カイト皇子がこちらに来ていると? なんとおろかな事を!」

カイルはこの事を批難した。

「カイル殿が捕らえられた事で、『エストラーヴ』との……三国不可侵を訴えに一人で交渉しに出向かれたのですが……残念な事にそのまま拉致されたのです」

その言葉に、沈黙するカイル。

「しかし我が国にあるこの書状を……グエイン国王の署名を、持つて参りました」

それを見せようとカイルの前に突き出す。しかしカイルは依然として黙つている。

「これでもシラを通すならば、いつその事全ての兵を持つてしてもカイト皇子を奪還致す所存です……この事は今はまだ誰の耳にも入れてはおらぬ事ではありますが……」

フェンディは、密かに静かな闘志を燃やしていた。

「それは少し待つてもらえませんでしょうか? フェンディ皇子……」

カイルは少し考える様子を見せた。そして先を話す。

「グエイン国王の署名はきっと何の抗力も持たない物だと思われます。というより、持たないです!」

何を言うのかとフェンディはカイルの前にねじり込む。

「しかし、確かにこのようにハッキリと署名されております!」

「申し訳ない。ボクは目が見えませんのでそれを確かめる事は出来ませんが……それを書いたのは、前国王のグエインだとしたら……いかが致します?」

「何を莫迦な……」

「グエインは……」

とカイルが言いかけたが、フェンディはその言葉を聽かず自分の意を唱えた。

「カイル殿、もしもそうだとして、『キリアートン』としての国王が、この条約を破ると言つ事は、前国王だろうが、現国王であろう

が、国としての威信に関わる事であります。決してこの書状を無効にする事などは出来ますまい！」

「フェンティ皇子……」

カイルは言葉を詰らせた。

「あなたは、グエインに助けられた事で情が移つたのではありますか？今は『エストラーザ』…………つまり、あなたが生まれ育った国の危機なのですよ！」

カイルはフェンティの言葉を聞き、この自分の中に隠された何かが生まれい出ようとしているものに気付く。

「確かに、フェンティ皇子の言つ事は正しい事です……が、しかし、この書状を持つてしても、グエイン国王はきっと、承諾して話を聞く事はありますまい。そして只の戦乱を招く事になつてしまふ！それでも、あなたはこの書状を持ってグエインに会われると申されますか？」

カイルはなぜか話せないでいる。グエインの事を……

「もし、この書状が無効で、グエインの思うまま、戦乱を招く結果になつても、このフェンティは、立ち向かいります！」

フェンティは思つていた……ついにその時が来ているのだと。

「あなたは、それをお望みなのですね……」

カイルは眩くようすに言った。

「そうなのかもしれない。以前より考えてきた。我が国『サリバー』は、國土の広さでは三国の中では一番かも知れない……しかし、生活する民の苦労は三国一です。もし適うのであれば、『エストラーザ』の豊かな土地を分け与えて頂きたいぐらいだ」

心にある本音を隠す事なく言つ、フェンティの身が揺らいだ。

「その豊かな土地を得るためにも、戦乱の世になつてもかまわないと？そう申されるのですか、フェンティ皇子！……そう望まれて、敢えて『エストラーザ』を餌にすると申されるのですね？！」

カイルは見えない相手を見据えて怒鳴つていた。

「もしそうであると言うならば、カイル殿はどうなされるのですか

？」

フェンディは、真剣に問うた。

「もし戦になれば我が国の力ではきっと叩き潰されてしまうのは必死……確かに、あなたの国の力が必要になります。まずこのボクはこのような身。国王となられるカイト皇子が捕われている今、指揮するのは誰にも出来ない……しかし、戦いで得られる物は只の虚しい力のみが支配する世の中……ボクはお勧めしかねます」

それだけ言うと、カイルの口は堅く閉ざされた。

「ならば、やむなく承知したとわたくしは取つて良いのですね？」

フェンディは、さらに続ける。

「この、無血で国を奪い取る事がグエインの策略だったとしても、わたくしはやはり既に流された血をもつ平和なものだとは思つておりません」

フェンディの目は既に遠くの未来を見据えている。
見えないまでも、カイルにはそう感じ取つていた。

「あなたは、国のために戦いを望んでいるようだ。それを止める事はボクには出来ません。既に、避ける事の出来ない運命の輪が回り初めている限り」

この言葉を肯定の意と取つたフェンディは、

「メイトー！このお方を今から『ヒストラーザ』に送り届けてくれ」と、戸の前に控えているメイトに呼び掛けるフェンディ。しかし、「申し訳ありませんが、ボクはここに残ります」

と、カイルの口から意外な言葉が出た。何故そんなことを？その言葉に、

「カイル殿！それは如何なる事だ？このような所にいると言つのは、みすみす『キリアートン』側の人質としてこの待遇を自ら受け入れると言つ事だ。何故そんな事をむざむざと！」

フェンディは、入ってきたメイトの前に立ち上がった。座っていた椅子が軋む音が響く。

「ボクはこのような身。この『キリアートン』の地から逃れるとし

ても只の足手纏いになる。それに、ボクが今一番グエインに近い所にいる者だ……それなりの覚悟は出来ているぞ……できれば、グエインの手の中で何かを操る事もできる……」

何だか、心にもない事を言つて居るかのよつで、カイルは少し身を引いた。

「それでは何か策があるとでも言つのですか？できれば話して頂きたい」「関心」と耳でも傾けるようにフエンドティは、カイルの言葉を待つた。

「策などない。ただ……」

「ただ？」

「あの者の心に住まう物の正体がはつきりすれば……あるいは、戦をせずとも済むかも知れない……と思つたまでです」

「心に住むもの？……そんなものでこの状況が良くなるとも思つてているのですか？笑止！」

フエンドティは立ち上がりそのままカイルを見下す。

「カイル殿は、このままここに滞在するそうだ。メイト構わぬ！」

フエンドティはカイルを背にし最後に訊いた。

「今晚はすまぬが、隣の部屋を借りる。グエインは朝、いつ参る？」「明けの六つには参ります」

「分かつた、それまで申し訳ないが宿としてお借りする。では！」

そういうと、『ガラリ』といつ音を残しフエンドティはこの部屋を後にした。

明け五つ前にはフエンドティの一一行はこの小屋を後にしていった。いつさいその痕跡を残さずに……

そしてただ運命の輪は回り続けていた。

今日とこづ日

昨夜の事が嘘のように雪は降り止んでいた。外から聴こえる静かな水音がカイルの耳に届いた。

カイルは、ベッドから起き上がり大分慣れてきたこの小屋から外に出でみた。外は冷たい空気を運んで来るそれを肌で感じていた。

「おはよう」

誰もいないこの森の中でカイルは挨拶をした。まるで毎日の日課のようだ。

暫くすると、雪を踏み進んで来る足音を聴いた。カイルには、それが一体誰なのかを聴き分ける事ができるようになっていた。自信に満ち溢れるその足音。

「カイル、大分慣れただな」

聴き慣れつつあるグエインの声を聴く。

「ええ……そのようですね」

そう答えると、それ以上の会話は今此処ですることでも無い気がし、背を向け小屋の中に入った。

「今日の飯を持ってきた。食え」

グエインは何処で狩りをしてきたのかも知れない鳥を炊事場に置いた。

「肉は嫌いか?」

目の見えないカイルに死んだ鳥を脚を掴んでグエインは問う。

「嫌いではございません」

それが見えていないカイルは、どういう状況かただ想像するだけで、頭をもたげて椅子に座る。

「ということは、好きでもないと言う事か? さすが、血を好まない奴だな」

笑つて、グエインはまな板の上でそれを捌き始めた。

『ゴリゴリ』という、骨を切り捌く音が耳に入り、カイルは顔をしかめながらも静かに椅子に座っていた。

そして昨夜の事を思い出していた。

「昨日の夜、我が国『キリアートン』に『サリバーン』からの使者が来た。『ヒストラーザ』のカイト皇子を返して欲しいとのことだつた……お主の義弟をな」

と、わざとらしく今まで隠し通してきた事をカイルに囁く。

「お主の弟は、莫迦者なのか？たつた一人で我が国にやつてきて、先に遣いを出した者達を戻せと申してきた」

「ええ……昨夜この小屋にも『サリバーン』の者がやつてきました。その事を聞きましたので知つております」

「ほう、して、そなたは何故その者達と共に逃げなかつたのだ？」

グエインは、『カイル』がこうして生きていると言う事を『サリバーン』に知られても驚く事もなく、ただ、逃げもしなかつた事だけを聞いた。

相変わらず鳥を捌く音だけがやけに響く。グエインは手を休めるつもりは無いみたいだつた。

「グエインという者の事が知りたかつたからです」

するとグエインの手が一瞬だつたが止まつた。

「何故ボクを助け、しかもこのような事までしてボクを生かすのか

？」

再び動きだすグエインの手。

「それは前にも申したではないか。只のオレのエゴだと……そんな事で逃げ出さなかつたのか？お主も莫迦だな」

『はつはつはつ』とだけ笑つてゐる。その心中をカイルには計り知れない。

「そんな莫迦者達ばかりが『ヒストラーザ』にいるとするならばいづれ滅びる。そして、我が国『キリアートン』の世が来るだらうな

……」

カイルは黙つてグエインの言葉を聴いていた。

「国を支配するのは、優しさだけではやつていけないのだー時には冷酷非道な事も必要だ！」

「ボクはそうは思いません」

カイルは反論した。それは間違つているとそつ信じてゐるからである。

「民に平穏な世を送つてもらつ事を第一に考える事こそ、国王に必要な事だと思つております。そのためにも強くなる」

母ミレディーの言葉を思い出していた。

グエインは近くの鍋らしき物に捌いたばかりの鳥を放り込み、火を熾すとその上に鍋をかける。

「だから莫迦なのだ！」

炊事場から離れて囲炉裏に鍋をかけると藁^{わら}の上にあぐらをかくよう腰をおろしながら答えるグエイン。

「民に平和を教えると、その上にあぐらをかき、それが当然なんだと思ひはじめる。しかしそんなものはなんの役にも立たない只の腰抜けだ。この意味がお主には分かるか？」

鍋の中をかき混ぜながら訊き返す。

「分かる訳ない。戦いは何も生み出さないから……」

「生み出すも何もない。手に入れるのみだ！未来を……」

「…未来を手に入れる？」

合点がいかない。

「そうだ。運命はこの手に握んでこそ初めてなし得るのだ。決まった道などない！」

力を込めたグエインの言葉は、全てを可能にしてしまつよくな、そんな勢いがあつた。

「グエイン、あなたが望んでる世界とは一体どんな世界なのです？」

その質問に、グエインは黙つた。少し考へているようだった。

「このオレの欲しい世界は、果てしもなく広い世界の征服だ。その為には誰にも邪魔はさせない。こんな小さな国一つではなく、世界

あらゆる国の頂点を目指す……それがこのオレの夢だ！」

そこはかと漂つて来るグエインの野望。

「それは、全ての国を支配すると言う事なのか？」

グエインはカイルの質問に困惑したことなく、平然とそれが当然と言つたように、相変わらずかき混ぜている。

「決まつていいだろう。オレは、たつた三つの国の頂点を狙つてゐる訳ではない。特に、『エストラーザ』から出でている船はありとあらゆる国を行き来していると聽くではないか……まずそこからオレは前に進むつもりだ」

「……」

カイルは、この男の何がここまで野心を駆り立たせているのだらうか？と言つて、ただがね？

「この夢を、あいつには果たせない。そう思つた……だからオレは今ここにいる」

そう言つと、グエインは器を用意してそれに温めた鳥肉とそのスープを注ぎカイルに渡すため立ち上がりその部屋を離れた。

「まだ熱い。気をつけろ」

そう言つて、グエインの言葉は普通に優しかつた。

「カイトはどうしている？」

それを受け取り、カイルは尋ねた。

「今は、地下の一室に閉じ込めている。今田には、『サリバーン』の者達がやつてきて救い出そつと動き始めるだらうな

「どうする気だ？」

「あいつは、大事な人質だ。そう簡単には引き渡すつもりはない。ただし、ある一つの申し出が有れば別だがな！」

「ある一つとは？……まさか、『エストラーザ』を支配下にできる承諾か！」

静かに時が流れていく。

「決まつていい。その通りだ」

グエインは平然とベッドに腰を掛けながら答える。

「それはない。『サリバーン』の者達が承諾をするはずはない。ましては、戦いを招くだけだ！」

微妙なカイルの動きで、ひざの上に置いた器が揺れる。

「『サリバーン』の者達だけではないだろう……『エストラーザ』自身も兵を上げて来る……それがオレの望んだ道だ」

「そんなに戦いたいのか！」

カイルの左手の握りしめた拳が、『ガタガタ』と揺れ始めた。そんなことは許せない。

「オレは、生まれてこのかた戦う事だけを仕込まれてきた。そんなことは当然だ！」

余りにも違う境遇の二人。

「グエイン、キミには心の安らぎは必要ないのか？ 戦いばかりに気を絞り続けていながらも……平穀でいたいと言つ願望というものは？」

「そのようなものは、ない！」

言い切ると、腰を上げた。

「今日という日は、きっと最大の祭りだ。カイル、明日の朝を楽しみにしているんだな……それじゃ、また来る」

それだけ言うとグエインは、この陽の当たらない部屋を後にした。ただ、残されたカイルの小さな影のみがそこに残されていた。

#1-5 夢であつたなら・・・

夢であつたなら……

暗闇の中で、オレはただ水の音を聴いていた。石に弾ける水の滴る音。

それは、光のないただの暗闇の中、それを一人でその音だけを聴いていた。

そうしてみると、何となく自分がだんだんおかしなことに感じられてくる。

何故オレはここにいるのであろうか

そう。ただそれだけを考えていた。

幸せな日々を過ごしていたはずだった。それなのに……

これが只の夢で、明日になれば何もかも嘘であつたと言つのであればどれだけ良いであろう。

大分、慣れてきていたこの闇の中、四方を積み重ねられたレンガの石の壁に囲まれ、身動きもとれない。今にも狂いそうな気分だった。

声に出して叫んでみたい。そんな心境である。

それでも、一度、『サリバーン』の間者が訪れてから少しだけ勇気が出たのかも知れない。

時の感覚が失われてからも必死で意識を保とうとしていた。そんな事を考えていた時、遠くで鍵が開く音が聴こえてきた。

暫くすると、人の気配が感じられた。

「カイト皇子、出ろ！」

声と共に、四方の壁の一部から幽かな光が差し込んできた。

淡い光。甲冑を身に纏つた、『キリアートン』の兵が扉を開いた

ようだつた。

「どうこいつことだ？」

その兵に問う。しかし何を訊いても答えは返つてこなかつた。

沈黙の中、オレはその兵の後を歩いた。手首に架せられた錠が歩く度に、『ジヤラジヤラ』と音をたてる。空腹のため、足下がふらついていた。それでもそつ見せないために、しつかりと地に足をつけて歩こうとした。少なくとも、ふざまな姿を見せたくはなかつた。そんなおり、

カイト皇子……カイル皇子は生きておいでです

幽かではあつたが、耳もとに流れ込んできた声。

詳細は申し上げられませんが、御安心下さい

その声が、以前に聴いた者ハイルの声であつた事に気付くのに少しつ時間は掛らなかつた。

カイルが生きている？

暗い地道を歩きながら、オレは嬉しい知らせなのに困惑していた。

フーンディ皇子が確認されました。確かにカイル皇子でございま
す

再び聴こえてくる。

いつたい何処から聴こえて來るのであるつか？前を歩く兵に視線を送るが何も気付いていないようだ。

それでは、これにて失礼致します

そういうと、その声は一度と再び聴こえる事はなかつた。
オレは考えていた。

オレが見たあの首は偽者? グエインによる或る仕掛けだった?

そう思つと、一気に力が湧いた。

暫く歩くと、立ちふさがる扉の前に来ていた。その扉が開かれる。すると眩しい光が瞳に流れ込んできた。眩しくて架せられた両腕でそれを退けた。ようやく慣れてきた時、眼前に温かな光を感じていた。外は昼間であった。

「これより、『サリバーン』の一一行に会つて頂く。」ちらりく……」「促されるままカイトは歩いた。狭い廊下をひたすら歩いていた。

「グエイン陛下、カイト皇子をお連れ致しました」

あの日捕らえられた場所。

オレはハッキリと憶えている。屈辱を感じたあの場所だ。

「こちらに……」

そう促すグエイン。

オレはグエインの座しているその椅子の側へと導かれ歩いた。

「このようにカイト皇子は預からせて頂いております。何かござりますか?」

グエインの隣に導かれてやつて来たカイトは、中央のその言葉を掛けた者の方を見た。

銀髪の年頃がオレと同じくらいの青年が跪きくらを見上げていた。

青い瞳が印象的に見つめて来る。それが、『エストラーラー』を出る前に会つた事がある、フェンティ皇子だと気付くのにそんなに時間が掛らなかつた。

「フェンティ皇子!」

考えるより先に名前が口から言葉が漏れ出した。

「これで御安心下さいましたかな？」

グエインは、フエンディにそつこつと微笑む。

餓死するかと思う待遇をしげておきながら何をヌケヌケと

オレは思った。

「ところで、この書状がありますが」

フエンディは、グエインの前に突き付ける。

「その事ならば、こちらのカイト皇子にも申し上げたが、無効な物。わたくしのサインではないのでね……」

その言葉を待っていたかのように、フエンディは答える。

「しかし、『キリアートン』としてのサインでもござります。これはどう考えても違反されたもの……すぐにでも撤回致して頂かなければなりません。そして、カイト皇子を今すぐに解放して頂きたい！」

真実味の有る言葉がグエインに向けられて発せられた。

「ほう。確かに、『キリアートン』の物でありますな……しかし、そのサインを書いた者は、この国で既に処刑されております。我が国の裏切り者として」

片ひじを付きながらグエインは、高い所から見下ろしているかのようにゆつたりとした仕種でフエンディの言葉を軽くかわす。

「それでは、申し上げます。既に血は流された。この状況を見て、誰もが思うであらひ。『キリアートン』は、『エストラーザ』及び、我が國『サリバーン』を敵とみなし反乱を起こしたと！それでも宜しいのですね？」

静かに、そして、熟のこもった言葉で威圧するフエンディ皇子。

「そう取られるのでしたらそれでも結構、今より戦いを決行すると言つのであればそれも構わぬが。立場上不利なのは、そちら側なのではござこませぬか？」

相変わらず、落ち着き払っているこの一国の王に、フュンディは底知れない恐ろしさを感じていた。初めて逢い見たこの男。噂以上だ……今ここを引かない限りダメであるうと考へたフュンディは、「それでは申し上げます。明朝より我が国及び、『エストラーザ』は、この国『キリアートン』に対し宣戦布告いたします。なればライト皇子を解放して頂きます。それだけの事で戦況が乱れると有れば、『キリアートン』も大した事ないと認めますが、いかがなものでしようかな?」

言葉に対し『一ヤリ』と笑うグエインの表情は言ひ尽くせない程不気味であった。

「そう来ましたか……それでは、我が国の威信に係わる。分かり申した。カイト皇子はお返し致しましょう」

辺りにざわめきが起ころ。国の威信と有つては、それをグエインに強いる訳には行かない。

「本来ならば、裏切りの行為を働いたのは、そちら側であると覺悟しておいて下され。申し出に偽りの皇子を差し出し、あまつさえ、その事を認めておられたのですから……このカイト皇子は…」

そう言ひとオレを解放するように兵に申し立てた。

『ガチャリ』と手枷が外れる。

「カイト皇子! ご無事で何よりです」

と、フュンディは開放されたオレに向かつて、自らの手を差し伸べた。その手を取る。オレは少しだけ安心と言つ物が心に芽生えたが、その反面、これから事を考えると不安が残る。

「では、約束通りこれより我が国『キリアートン』は、『エストラーザ』及び『サリバーン』に全面的に戦いを挑むことをこの場にて言い渡す。よいな、覚悟しておれよ!」

そういうと、グロインは立ち上がり、マントを翻し奥へと下がつて行つた。それを追うかのように宰相のメイティンがイソイソその後を追つた。

「メイト下がるぞ!」

フーンディが腕を横に差し出すと、『サリバーン』の一行と、オレはこの場を後にした。

#16 適わない想い

適わない想い

この日をどれだけ待ち望んだことだらう。

グエインは考えていた。過去の事など、とうの昔に捨て去つていつつもりでは有るが、次から次へと沸き出して来る過去の産物を難ぎ払い一つ自室の大きな木の椅子に腰掛け笑いを隠しきれない。

しかし、ただ一つだけ彼の中に不安要因が残つた。

カイルである。

「」のまま、あの地に止めていて良いものなのか？

『サリバーン』のフロンティ皇子の田にはカイルの姿を見たと言つ事實が残されている。

あの場所は、もう知られている。ならば移動させなければならぬ。例えカイル自身が逃げ出さなくとも、グエインにとつては大切な一つの駒なのである。

あいつはオレのエゴで手に入れた駒だ。それも特上のは

しかし、そう考えれば考える程、グエインの中に憤りが沸き起ころ。

なぜ、逃げなかつたのだろう。オレの事を探りたいのか？そして、『エストラーザ』にその情報を？

誰もが、やはりそう考えるであらう。それならば、道理が通るからだ。

もつと身近で、そして、強引にでも引き連れておいた方が良いのかも知れない

そうは言つたものの、一度死んでいる人間だ。ここで皆の前に連れだせるものなら、こんなに気にかける事もなかつた。

一度助け出している人間を陽の光の中に出す事は控えたい。

いつぞ、違う人間として引き出そつか？

まるで、自分と同じ境遇のように見せかけて……つまり、この国 の重要人物として祭り上げる。それが出来るとしたら……

何を考えているのだオレは……

いきなり自分で何かが芽生えようと/or>していいる感情を、自力で押さえつけた。

もしそうだとして、それでオレはどうするつもりだというのだ

否定と肯定が、入り乱れる。

感脩と言つものは厄介だ……そんな事を忘れてしまったのか？

そう考える。しかし相談出来る者さえいない。

安らぎなど欲しくない

そう今までそうしてきた。これから先もそれに頼るつもりはない。

そう決心できたからこそ今までやつて来れたのだ。

明日から、オレは戦いの王者になる。それは望んできた事だ。今さら顧みる必要など、これっぽっちもないのだ

より高みへと上りはじめる。これはほんの序章に過ぎない。

不安の芽は摘み取るのに限る！

グエインは、決心を固めて立ち上がった。そして静かにこの部屋を後にした。

「もう寝たのか？」

ギシリと床の軋む音が聞こえてきた。

それが耳もとに届いた時、始めてカイルは目を醒ました。

「オレの『ヒゴ』さみ？」

グエインの声が耳もとで聴こえる。

「明日早朝にも、『エストラーザ』と『サリバーン』の連中はこの城に向かつて動き始めるだろ？ オレの思い通りにこの平穏な世の中は、戦乱の世となる」

「それでは、やはり……」

カイルは静かにその声の主に向かつて覚醒しきれない様子で問い合わせた。

グエインはお気の毒様とでも言いたい表情で、

「カイト皇子は無事、一度『エストラーザ』に帰還された……が、あの身だとまだ自由に動けないである」

「カイトが？『エストラーザ』の地を譲ると彼は言ったのか？ そんなど……」

カイルは困惑した。

「それはない。これから始まる戦での事だからな……つまり、承諾は戦う事のみ、とあいなつた！」

「……」

黙り込むカイル。

「そこでこれから、お前の身の振り方だ。どうしたい？」

「一度死んだ身、いかよつにも……」

静寂の暗闇の中、カイルは観念しているように呟く。

それをグエインは、この暗闇の中でさえカイルの表情を読むがごとく眺めていた。

「……」

「やはり、お主は他の者とは違つ。普通懇願して来るものだ…殺さないでくれと」

今までがそうであった、最後には命を奪われる事を恐れ、命乞いをする者ばかりだった。所詮人間などそんなものよと高を括つていた。

「それはあなたがお決めになるものでしょう……ボクは、今、『キリアーネン』の…敵国の中にいるのですから」

俯くカイル。その様子に、グエインは動搖してしまう。

「…不思議だ……やはり、オレにお前を殺す事が出来ないでいる。これは一体どうした事なんだろうな…お前に生きてもらいたいとそう願う」

そういうと、カイルのいる所まで歩み寄り、肩を掴む。

「ボクは、何処にいても、不自由な身。いつそ、戦いの場に出て死ねるのであれば本望。しかし、それさえも適わないでいる」

「…お主の目は治る。解毒剤があるからな……そうすれば、見えるようになる」

カイルがその言葉に反応した。

「この目が見えるようになると?」

「そうだ」

グエインの表情が曇つた。それをカイルが感じる事は無い。

「もし目が治つたらカイル、そなたは如何致す?やはり、我と戦つて、対峙すると申すか?」

「… そうしたい……と言えれば、あなたの行為を裏切る事になりますね……そんな事ボクには出来ません」

力強く掴まれた肩の骨が軋む。グエインはその言葉に反応したかのように、力強く握り締めた。まるで、屈辱とでも言つかの「」とく。「恩は返すと言つのか？」

的外れの言葉に、グエインは心から癪されない憤りを感じた。

「何故そんなふうに考えられる？」「

「ボクの身の振り方は、今ここにいると言う事で既に決まっているのです。運命には逆らえられません」

「オレなら、運命を変えてやる。と、そう考える……神の領分を超える事になつたとしてもだ！」

有り得ない！グエインは思つた。細いカイルの肩がガクガクと揺れる。

「グエイン、あなたは恐ろしい方ですね」

神をも恐れない闘志。それをヒシヒシ感じた。

「神などいないのだ。どこにもな……ならば何を恐れる必要がある？」

信じよつとしない者の言葉だった。グエインは、肩に引っ掛けていた物を下ろし、

「この服を着る。そしてオレの言つまま、今からお前は女として振る舞え……そうすればこの状況下、何の不利なく動きがとれる

「どうしても、ボクを助けると？」

「お前にはまだ、やつてもらわなければならぬ事があるからな」「やつてもらいたいこと？」

「ああ、そうだ。今は言えないが……お前でなくては出来ない事だ」

そう言つと、グエインは立ち上り、この部屋を後にして、暫くすると隣の部屋から、

「着替えなんだら、教える。我が部屋にお前を連れて行く」

カイルは、着替えだと渡されたその布を、ベッドの上に広げた。

「」の不自由な田で、何処まで思い通りに「」この服を着こなす事ができるのであるうか？初めての経験であった。

母上は？他の給仕の女の人たちは…どんなふうに着こなしていただろ？

ただでさえ、国が違うのだ。それなりの着こなしの違いだつてある。

「」で、グエインに、『着る事が出来ない』などとは言えない。決して言えないのだ。

「どうした……手伝わないといけないのか？」

カイルはその言葉に反発する。

「一人で十分。少し黙つていもらおつか！」

確か……

と、思い出せるだけの女性の衣類の着方を思い巡らしながら悪戦苦闘する。

何となく「」これのよくな……

手探りで屠蘇の布を頭から被る。

程なく広げられた布達はカイルの体を取り巻いた。

「準備は出来た」

そう言つと、壁伝いに隣の部屋へと向かつた。

暗闇の中、この部屋に取り付けられた蠟燭の火がぼんやりとカイルを照らし出す。

悪戦苦闘したのが分かる着こなしに、

「やつぱり、手伝った方が良かつた様だな」と、含み笑いをするグエイン。

「ククク、後ろと前が逆だぞ！」

『えつ』と言づぶうにカイルは服を触った。

「どれ、貸してみな……下の方はまあこれでも良いだらつ」と、一番上に来ている布だけをとつてカイルに腕を通しておせる。

「すまない……」

なーになんて事ない。とても言づぶうにグエインは、それでも着こなしたカイルを眺めながら微笑んだ。

「髪、その後ろで結んでいる物は外せ」

「いや……これは……」

カイルが少し焦つているのを横目にグエインは、その結んである金属を取り外す。今まで固まっていたその茶色の髪は、柔らかなウエーブを描きカイルの肩を覆つた。

「その髪止めを返して下さい！」

グエインに迫る勢いでカイルはグエインの腕を掴んでいた。

「何？そんなに大事な物なのか？」

少し興味深くカイルを観察しているよつこじらした。

「ええ、そうです！」

それ以上は何も言葉を発さない。

「分かった。返してやる。ほら！」

そう言つと、カイルの手を掴むとそれを握らせる。

「なんとか、化けられそうだな……戻つたら、お前用の侍女を宛がつてやるつ。

「そんな事をすれば……ばれてしまつのは……」

逆にカイルは焦つていた。

「何も焦る事はないだらつ……カイル殿、お主の秘密へいらっしゃうの昔に知り尽くしておる」

カイルの焦りで周りの空気が蠢いた。微妙に揺れている蠅蠅の炎。立ち去っているカイルが今にも崩れ落ちそうに顔色が蒼白にな

つていた。

「知つてゐるつて……な……何を？」

沈黙が続く。それは、この夜の静けさにも増して広がりを感じた。
「何を？そのくらい、自分の事なのだから分かるであろう？カイル・ラ・シユメール？」

グエインは見下ろしながら優越感を感じていた。

「そんな……知つてゐるのは、母上と、周りの侍女と……そしてカイル……」

ボソボソと咳く。

「オレが、『エストラーザ』に送り込んでいた者が教えてくれたわ」「ボクの……周りは徹底した防衛の中で。しかも、そうやすやすとは……」

混乱しているカイルは、今までの『エストラーザ』のことを思つていた。

「だから、大丈夫だ。どういう経緯でお前が男として、生きてきたかは知らぬが安心しろ……」

これからオレの元にいる限り何の心配もいらない」

グエインは、静かにカイルの手を取ると、燭台を持ち外へと促した。

「『キリアートン』では、お前は女として扱つてやるから、安心しろ」

凍えるような夜の星空の下、二人は秘密の穴を抜け『キリアートン』の城へと歩いた。

ただ、カイルの胸の内に知られざる恐怖が渦巻いていた。
山下、遠くで炎が燃え盛つていて。それを、カイルは今はまだ知らなかつた。

#16 適わない想い（後書き）

カイルは女の子です。

つて、多分、此処で驚かれた方沢山いると思ひ。。。済みません。。

男装の麗人風なイメージでここまで書かせていただいておりました。
後書き・・・最終話で書こうかなと思ったのですが、一応此処で書
いておこうかなと。。。もしかして、男の子だとやはり思つてらっしゃつてたら「めんなさ

い m (-) m

つて、ずっとそう言ひ風にしてたから、嘘をなんやつぱりんどん返し
食らつてしまつたのでは・・・

一応謝罪をこめて。

でも、あたし的には女の子でいて欲しいです(望)

まだまだ続きますが、これからも温かくこのキャラたちを見守つて
いただけると嬉しいです^ ^

#17 もう一人の自分

もう一人の自分

燃え盛る炎の中。泣き叫ぶ子供の声が辺りのとどろく。

オレが『エストラーザ』に到着して半刻も立たない頃のことであった。

宮殿の東に位置する街より出火した火のため、辺りは騒然としていた。

まだ、何も口にしていないオレは、連日の衰弱のため動きもとりづらく、足取りも重かつた。が、この惨事に動かない訳にも行かなかつた。

「カイト皇子！出火したのは東の外れの国境近くです。今、消火のため、村の長オーベンが中心となつて活動しております」

「そうか、御苦労」

『キリアートン』の奴らだな

確信を持つてオレは思つた。

早くも、行動を起こしてきたか

「オレも後で行く。取りあえず上手く鎮火する事を第一としや」

「そういうと、肩に力が入つた。

「カイト皇子、少しお休み下さい」

ケルト宰相は、疲れ果てたオレに優しく声を掛けたが。そう言う氣分になれるはずなど無かつた。

「何、こうしていると少し気分が、落ち着く……それに、一国の大
事に休んでなどおられん」

ここで今自分が出来る事など限られる。幽囚ゆうしゅであった時に自分の存在意義を考えたが、今の子の世界が自分のいる世界だ。夢などでは無いのだから。

「では、せめて食事だけでもとつて下さい。見ている私達が困ります」

チラリと視線を流す。心配している周りの者達の視線が痛い。

「わかった……そうさせてもらおう」

軽く食事をしたオレは、再び広間にある椅子に座る。皿の前には、『サリバーン』のハザウェイ王と、フロンティ皇子がすでに控えていた。

「カイト皇子、この度は御無事で何よりです」

「とんでもない。そなたの息子フロンティ皇子のおかげで今ここにいる事が出来るのです。」ちらりと、有り難く思つております、

オレはフロンティの方に田配せをし礼を盡つくつ。

「どうやら、カイルの方も生きていることらしいが、その事を詳しく述べたい」

そう言つと、顔を上げてフロンティはその経緯をオレに伝え始めた。

「では、カイルは、そなたの助けを退いたと言つのか？」

オレの声に、周りでざわめきが起こる、

「カイル殿には、何か策があるようでしたので、敢えて、その意見を尊重致しました。これで宜しかったのでしょうか?」

一度、フロンティはカイルの事の処置についてカイト皇子に訊いておく必要があった。

「カイルがそう言つたのであれば……それは仕方ない事だ。フロンティ皇子が気に病む事ではない」

そういうと、オレは少し考え込んでしまった。

「して、これから的事なのですが……」

と、ハザウェイ王は、先の事を安じてオレに進言してきた。

「既に、戦いの火ぶたはきつて落とされたのです。如何なる手段を用いて『キリアートン』を攻略するのかを考えなければなりません！」

「火付けが行われてしまつております。事実を曲げる事も出来なければ、この城内に、『キリアートン』の者が紛れ込んでいる事も考えられます」

フヨンディがその先を列ねた。

「そうです。今すぐにでもこれから対処を練らなければなりません。できれば、会議を開く必要があります」

ケルト宰相も同意見で参列した。

「分かつていい。ならば、会議室を設ける」

そう言つとオレは、力強く立ち上がり会議室を案内した。

「こちらが『キリアートン』の城への地図となります。ほとんどと言つて、何処を通つても木々の中で、開けた道は南から抜けれるこの道一本です」

探索も兼ねての奪還作戦だつたと、テーブルに広げられた紙切れにあるのは自分が扱つた物より少しだけマシに感じられた。

「一日歩き回つてみたものの、地の利を考慮された防御が引かれており、さすがに簡単には突入する事が難しいと言つほかありません」

フヨンディが、その地図を見ながら答える。

「ただ、カイル殿がいたのは、この辺り（西方面）で、グエイン自ら足を運んでいるともなれば、この辺りに隠し通路なるものがあるのではないかと、そう確信ができるのですが……何ぶん、私の力ではその際、探し出す事は出来ませんでした。今一度、わたくしの密偵が情報を集めております」

フヨンディは言つと、一礼をして一日話すのを止める。

「きっと、グエインの事だ、ここ以外にも多数の抜け道を作つていることであろう。その散策をしてみる事は良い事かも知れぬ」

ケルト宰相がその後に続いた。

「今一、謎に包まれた国でありますな『キリアートン』は……物資の運び入れなども、独自の方法をとつてゐるらしく、こちら側から覗く事は出来かねました」

そう言つ宰相の言葉は、余りにも意表を突かれた今回の出来事だとでも言つかのようであった。

「戦をするに十分な食料の貯えは、取りあえずの所安定はしています。ただ、我が国の兵力が足りるのかが問題です」

『エストラーザ』の、兵を管理するマクベ大将が、答える。

「その件でしたら『サリバーン』も、協力致します。兵として、五千は出せます」

フェンディは自分の持ち部隊について話し始めた。

「何？ いつの間にそれだけの兵を？」

国王ハザウェイは驚いていた。

「何事も、備えあれば……ですよ。父上」

我が息子の言葉の威儀を一瞬心強く感じられた瞬間だった。

「面倒ない。それでは、我が國も募れる兵をすぐ準備致します」

そう言つと、マクベ大将はこの場を後にした。『エストラーザ』の沽券に係わるからであった。

「では、我が国『サリバーン』も、翌朝までにはこれだけの兵を用意するように致さなければなりません。この事に関しては、メイトに頼む。それでは具体的な話をして行きましょう」

メイトが下がつたところでフェンディは話を元に戻した。

「どういう風に戦陣を組むのか？ だな」

オレはきっとそこに行き着く話だらうと感じたとおり答えた。

「そうです。出来れば、無駄に血を流すような戦いは避けたい。ならば、地の利を利用できないように、平たい丘に誘い出すような戦いをしていくのが無難です。あと、グロイン国王をしとめる事が第一目的だとすることです」

フェンディは自分の考えを、すらりと口に出して答える。

「此度の戦の火ぶたを落とした元凶は、彼自身。他の者達はただそ

れの傀儡と言つた所でしょ。……独裁的な国に近いのですから。ただし、そのために、すこぶる敵の力は強いはずです。その点は十分注慧しておかなければなりません」

そして続ける。

「基本的に、この場所を拠点に敵を燐り出す事。きっとそう簡単に誘いには応じない事と思われますが、一番有利に立つ筈と思われます」

と指されたのは、『キリアートン』と、『エストラーザ』の国境に面する場所。

「確かにここであれば、少し開けた場所だし動きもスムーズにとれる」

『フム』といづらうにケルト宰相が同感する。

「そして、もう一つは、この場所。北回りで、木々が茂つており実際に動きをとれるが分かりませんが、ここからの進出をなされると、対応する者がいなければ『キリアートン』側に問題が出る所であると推測されます」

その地点は、カイルの母が住んでいた所の近くであった。

「実際、攻められると困るであろう場所と言つのも考えておかなければなりません。不意打ちで、焼き討ちにあつのはたまりませんからね……」

そこで、

「では、この反対に、焼き討ちをすると言つ考えは如何でしょうか？」

ケルト宰相は一案を講じた。

「敵は、やや、山頂に拠点を構えています。いわば、籠城を決め込んで来る事も可能性としてあります」

「それは名案です。しかし、あの場所にはまだカイル皇子もいらっしゃるのではないか？それに、必要以上に山を焼き払つて行くのは、感心できません。國土のほとんどが木で覆われているのですから」

フロンティの言葉にそれもやつであると並んで「ケルトは捻つた。

「なるべく、火は使わない方向で考えて行きましょう」

フロンティは、まるでこの場を取り仕切っている。

オレは考えていた。この者を敵にまわさなかつた事だけは、確かに勝利への道ではないだろつかと、少し、自分の力のなさとうものを感じつつも……

そして、引き続き会議は続けられて行く。

「では、カイト皇子。このような感じで話を進めてはきましたが、何か異存はございませんか?」

「いえ、この方法で行くのが一番良い策だとオレも思う。なれば、今少し体を休めこの策に順じた方法をとつて行く準備をして欲しい。では会議はこの辺で終えよう。みんなのもの、大儀であった」

締めくくると、会議は終結した。

「現地での細かい算段はその時に……」
と、フロンティは言い残しこの場を去つて行つた。

田まぐるしい……

とオレは感じていた。

今でもこの状態が本当の自分の姿であること事態が、夢でない事を悟つてはいるものの、未だ慣れない。

何やら深い海の底、重いヘドロが足に巻き付けているかのようである。

オレは、もう一人の自分の世界に紛れ込んでしまったのか?!?

と、SFじみた事を考えては頭を抱えた。が、違和感と事実が確実に交わり始めていた。

もう、この世界で生きて行くしかすべはないのだろうか？

これから先に起つては全ての事が悪夢にしか成りえないこの状況。それを今、両手の天秤に掛け量ろうとしている悪魔の姿が脳裏を過ぎた。

もう考えるのはよそう。疲れた

オレは短い眠りに就く。

この日は何の夢を見る事もなく、深い眠りに就いた。そして朝はこれからの始まりであった。

#18 眠りの狭間

眠りの狭間

手を取られカイルは、『キリアーテン』のグエインの部屋に導かれていた。

『エストラーザ』にはない簡素な寝室である。それは、部屋に入った瞬間、厳格な空気を感じさせる何かを感じたからであろうか。みな寝静まっているかのようだ、カイルはこの不思議なグエインの行動と、主の考えを野放しにしている国の体制に改めて隙間風を感じた。

「安心しな。何もしさしない。今日までの部屋を貸してやるからここで休め。明日の朝には、お前用の部屋をあてがうよ」と伝えておく。何の心配もいらない

「……何だか静かだ」

「侍女をこの部屋に入れるのは朝と掃除をする時ぐらいだ……滅多に入れるものではないぞ。感謝することだな。ま、実際その方がオレ的に安心するからな」

素直な言葉だ。感謝と言つのは、少し違つ氣がするけれど。

「ベッドは貸してやる」

「何? それは、女だからか?

「それじゃあ……」

「オレは、そのベッドの寝心地が嫌いだからな……逆に清々する」と言つと、近くの椅子に腰掛ける。カイルは音だけで判断して、もつそれが当たり前ののだと思い、

「ありがと」

そういうと、ベッドに腰をかける。

「まだ気になるか?」

「えつ?」

「自分が本当は女である事をだ……」

「何故こんな姿でいるかつて事か?」

「ああそうだ」

グロインはまじまじとカイルを見ていた。

「今では慣れてしまつて氣にもならない」

そう慣れてしまつていて。何てこと無い。

「しかしそくそこまで、『エストラーザ』の者達を騙すことが出来たな」

「それは君だつて同じだろ?」

「そう、似た生い立ちだつた。」

「それもそうだ。しかし、オレの場合には眞が承知の上だつたからな」「そうなのか……それでも、みんなはお前を選んだと?」

「かなり無理強いもしたがな」

グロインは笑いを堪えながら答える。

「君の年で國王と言ひ事は……両親はもう?」

「あいつらは、とつぐに御陀仏を」

「まさか殺したんぢや……」

「当たらずとも遠からずか?御名答へつけと死にやがれつて思つてたら、ぱつくとな」

「……」

その言い方はどうだろ?と思つ。

「それより知りたいもんだね。何故わざわざ男の格好をして偽つているのかを」

興味津々に訊いてくる。

「人の勝手だ」

「つれないな……オレはとつぐの世に告白してゐるの」

それは無いだろ?と言つ感じで問い合わせられた。

「……何が知りたいんだ?」

「カイル、君の全部だ」

知つてどうする?得になる事などないだろ?」

「面白い事などない」

「そんなのはこのオレが決める事だ」

「息つくように深呼吸をするカイル。別に話しても自分にはどういつ言う事でもないだろ？ そう知られて困る事も無い。グエインがこれを餌に何か企む様に感じられなかつた。だから、

「ボクも、君と同じ双子だったんだ」
ボソリと咳くように話し始めた。

「まあなんと可愛らしい子なんでしょう」「

ど、ボクを取り上げた人が言つたそうだ。

「もう一人産まれるようだぞ！」

「何！？」

「大変、なんて事でしょ、不吉な……」

しかもその子は逆子だった。

「大変だ、早急に取り上げないと母体がもたない！」

それでも何とか母上はその子を産み落とす事が出来たんだ。

「この子息をしていない！」

それは男の子でボクの弟になる子だった。

「泣かせるのよ、何としても！」

母付きの主治医が逆さにして叩いたそつだ。それでも泣く気配はなかつた。

「残念な事ですが、この子は天命を全うできずに逝つてしまわれた。主よ、この子の魂に平安を……」

そして、ボクが弟の変わりに男の子として育てられる企みが、一部で起こつた。

「同じ性をもつて生まれなくとも、只でさえ双子と言つ事で不吉なのに……第一皇子としての男の子が亡くなつたとあつては……なんとも不吉だ」

「ならば偽りますか？ この子を男として育てる……そんな事……私は出来かねますわ……」

しかし母上は反対したそうです。只でさえ居心地の悪い宮廷で、正妻よりも先に子を授かつた事で気持ちが弱気だった。

「大丈夫です。私達はミレディー様の御味方ですよ……決してはないように育てます！」

多くの者達そう言つて話を納めていったそつだ。

「……分かりました。ならば、御任せ致します。この子に幸ある事を祈つて……」

結局母上はうやむやに、その事を承諾されたのです。

「男として育てられたボクは、この時第一皇子になった……カイトが産まれて来るまではね……しかし、話の成りゆき上、父上が第一皇子をカイトにした事が母上にとって良い事だった……母上は、この嘘がたまらくなっていたのだから」

「気が楽になつたのか……」

グエインが初めて口を挟んだ。自分と同じ境遇の者に対する言葉であろう。

「しかし、それまでの心労が重なつて母上は宮殿を後にした。何かと側室のくせにと人々は豪語したんだ……初めから何も生み出す事のないものなのに」

「……」

「静かに生きていたい人で……優しい所を兼ね備えていた母を味方する人はとてもボクに優しかった。

それだけがボクにも母上にも心のよりどりころだった」

今でも感謝しているという、心の中の紐を解くかのような静かな表情がカイルの顔を綻ばせた。

「これが、ボクの秘密だよ。こつやつて話すのは……これで一度目だ。初めて話したのはカイトだった」

眠りの狭間に垣間見た安らぎのように気持ちが優しく揺れている。しかし今のカイトは、その事さえ忘れてしまっているから……

「お前は、カイト皇子を好きでいられるんだな……」

「好きだよ。義弟として考えた事はない。死んだ弟の生まれ変わりだと思つて今まで接してきた……今のボクにとつては男として生きていた中で一番田に大切なものの。一番は母上だから……」

「もしカイト皇子が死んだら……お前はどうする?」「ボクは狂つてしまふかも知れない」

行き場のない感情。

「確かに前に聞いたぞ。お前は大切な者のために強くなるんだと、それが狂つてしまふと言つうのでは矛盾しているのではないのか?」

「大切な人がいなくなつたら、強く生きていても仕方がないだらう? いるからこそ強くなれる!」

「オレは、自分のために強くなる。誰かのために強くなるのではなくて、自分自身のために!」

反諭するグエイン。

「水掛け諭だ。何を言つても君には理解が出来ないんだ……ボク達の間にはかなりの距離がある。きっと平行線のままの」「交わる事のない?」

「きつとね」

「……」

もういい、というようにグエインは張り詰めた糸を解いた。そして、

「もう遅い、お前は休め」

そうして灯された火を吹き消した。買つかな明かりが消えた。

「忘れるな。明日からは戦だ。お前の大切な者達の命が消え行くのだ。そして、それが今のオレのただ一つの楽しみだ!」

グエインは捨て台詞を残してその場を離れたのであった。

戦い

明朝、火災を鎮めた頃、兵を集めた『エストラーザ』と『サリバーン』の一行は、国境近くに陣を張った。

「総勢三千足らずのこの軍勢をよく一晩でここまで集められたものだな」

オレは宰相ケルトに囁きかけた。

「國の一大事、皆その事を承知しているのです。中には志願して雇つた兵もいます」

「愛を感じるな」

自國愛とでもいうのであるつか？そして、今こそ力を！

「今一度、忠誠を誓え！」

オレは慣れないながらも皆に誅す。

「我らが國の繁栄を。そして、永遠の輝かしい勝利を！」

この言葉に皆が沸き立つた。

「ハザウェイ王、フェンディ皇子。この戦は私達だけの戦いではない、貴方達の未来をも賭けた戦いになる。それを承知でここまで来た……もう、後戻りは出来ない。ありがとう」

オレは脇に控える二人に敬意を表すかのように一礼をした。

「それでは、作戦を実行に移す。各陣、配置につくよう！」

号令と共に各陣は己の使命を果たすかのようにその場を散つて行つた。

オレ率いる兵は正面南の坂を手指して歩をすすめる。

ハザウェイ王率いる兵は東を、フェンディ皇子率いる兵は、一度
辿つた事のある西を手指す。

この晴天の下、各々勝利を導くための行進がついに始まった。

食料を運ぶための兵は十分に備わっているようで、今は遠征をす

るにも充分な程である。

それでも、今は、先の事など判らない戦が事なくして済む事を望むだけである。そして、勝利を持ち帰る為に。

「カイト皇子！」

脇に控えていたマクベ大将が、馬をオレの側に寄せて來た。

「気付いてあるか？」

オレは周りに悟られないように返す。

「人数は少ないものの、足の速い者達が、木々の聞を伝い確實に我々の足取りに合わせ潜んでいます」

「今は捨ておけ。何かの算段があるのであれば…その内しつぽを出して来る」

「承知致しました」

マクベがゆっくり下がつていぐ。

密かにこちらの動きを観察してきている。

きつとこの先の少し開けたところで陣を引いている事だらう

一度迷った事のあるオレの記憶の中にその場所が見えていた。

その場で体制が崩れないようにしなくては…

オレは無い頭でその算段を考えていた。

開けたその丘は、見晴しの良い場所だ。狭いこの山道での対戦よりきっと立ち回りが可能な場所だ。

伝令をオレの前を往くトールに言付け、前線の歩兵達の今一度の体制づくりを敢行した。

次第に近付いて来る丘。

オレの胸の内は鼓動をより高まらせていた。

しかしその後、オレのその考えは的中した。

「うわー——つ！」

前線から悲鳴があがつて来る。

敵の弓隊が、矢を射かけて来たのである。

「落ち着け！なるべく多くの者よ、丘の中央まで歩をすすめろ！」
隊より前へ！」

見た所、三千人に近い敵の兵力。そして確実な戦力は我が軍の数にまさるとも劣らないと言えよう。

地に不利なのは覚悟の上の事。だが、それ以上にこの場を有利に事を進める事。それが先決だ！！

押し寄せて往く大軍。暫くして、馬隊がその前戦を突き抜けるかのように追い込みを掛けてゆけるだけ先を進んで行った。

「カイト皇子！前線は大分疲労をきたしてはおりますが、このまま一気に畳み掛けましょう」

クルトが進言してきた。

「それはクルトにまかせる！オレも今考えていた所だ！」

オレの周りにいる騎馬隊は、今こそという風に駆け出して行った。そして数人の兵は、槍をたずさえオレを守るかのように控えていた。「これで、五分五分になつた」

開けた丘での戦闘は程なくして、終結を迎えるようとしていた。

それは、オレ率いる『エストラーザ』の勝利であった。

しかし、その兵の半分がその攻防により痛い打撃を受けていた。

数的に有利であつたはずの兵力が、地の利をもつた『キリアートン』の戦力に苦しめられた結果が今ここに顕著に表れていたのである。

「今日の所はここまでである！」これからこの地に陣を引く。できる限り負傷した兵を休ませる！」

オレは全ての隊に伝令を遣わせる。これ以上の兵力を今日のこの日に全て使い切る事よりも、少しでも『サリバーン』の動きに合わ

せた戦いに賭けていた。

フェンティ皇子の動向は逐一報告が来る事になっている…今はそれを待とう

オレはじつくり考えていた。カイルを生かしているグエインが使っていたであろう抜け道。それを利用し、城内からこの厚き壁を開けて中に攻め入る瞬間。これが全てのチャンスになるのだということを。

しかし、グエインはこの事までをも見通しているのではなかろうか？

何よりも得難いチャンスだと思わせておいて、絶望の底に叩き付ける。これはあり得ない事ではない。

あの王ならばやりかねない

周りに無残にも転げている敵国及び我が軍の死体を見回しながら、オレは脳裏にその事がちらついてならない。

ただ、今はフェンティ皇子そして、ハザウェイ王の連絡を信じ、体を休める事。その他なかつた。

「今日は、あの日のような天候でなくて良かったな」

フェンティは、数騎の兵を率いて山中を歩いていた。

フェンティが率いる『サリバーン』の一行は、途中数十部隊に別れ西の斜面を散策するかのように歩いている。

確かにこの天気だと足取りは速いのですが、その分見通しが良すぎて、敵に見つかる恐れがあります。気を引き締めて下さい、皇子

！」

「分かつていいるさ、メイト…それだけじゃない、敵のこの狩猟用の罠、これにも注意を払わなければならないのだからな」

と、言つたその瞬間、木の根に張られた罠をまたいで越える。

そろそろ、あの小屋の近くまでに差し掛かっているだろうと、辺りに目を光らせながら進む…が、いまだその小屋は見えてはこない。「そろそろのハズだが…」

「そうですね。足取り的にはあの日の天候を考えれば有つてもおかしくはないのですが…」

メイトが相槌を打つように返す。

一部隊を率いるフェンディ皇子の言葉は正しい。とでも言つかのように頷くメイトは、優しい声色をもちながら鋭い視線を辺りに投げている。

メイトは、フェンディの三つ年上の女性で、フェンディ付きの近衛兵として参列するだけの実力を持つ男顔負けの大将である。

髪は短く切りそろえて剣を構える姿は艶やかな風情で人を魅了させる程美しかった。

「この作戦…上手くいくとお前は思つてはいるか?」

作戦をたてた当の本人がこんな事を言つのはどうかと思つ。しかし、心無しある事を心配していた。

「カイル殿の事ですね…」

メイトは、その心配の真髄を見事当てる來る。

「……」

黙り込むフェンディ。

「今は信じる他有りません。あの方が味方である事を…」

フェンディの中で、渦を巻いているのはこの事だけであった。敵国グエインの足元にカイルが跪いてしまつてはいると言つのであれば、この作戦は成功し得ない。

我々を城中に引き込み、その足を止められたのでは、成り立たないのである。

「カイル殿を信じるしかない…か」

ひたすら歩き続ける一行。

その先に、暫くするとあの夜の小屋が視界の中に映り込んできた。

「先ず訪ねてみるか

そういうとフェンティはその小屋へと足早く進んで行った。

東の地を散策するように歩いていたハザウェイ王は、川に沿つた細い道をフェンティ同様何部隊かに別れて移動していた。

この川は上流にいくほど深みを増した緑色をたずさえて流れている。

「この川の水はどうやら『キリアートン』の主水になつていて、時間が来ると城内に流れ込んでいるようです」

と、一度この地を訪れたマーチンはハザウェイにその旨を申したてる。

「時間になると？」

「そのようです。常に外敵からの侵略を気に掛けているのではないかでしょうか？」

「ふむ」

「しかし、一つ面白い事に気付いたのですが……」

「なんだ？」

良案と田されたその策を聴いてみたい。

「その時間を利用して、流れ込む水嵩をいつもの倍にすれば城内に被害を持ち込む事ができるのです。つまり、水攻め

「なる程……」

「これに乗じて、城内に忍び込む事も可能なのではないかと」

「しかし、それをするには、この川の流れを一時せき止めなければなるまい？」

「その事なのですが……」

と、マーチンは静かにハザウェイの耳元で語る。

「ふむ、面白い。ならば合流地点で作戦会議を開こう……あと、この

事をハイルに伝え各陣に報告する手はずを整えるようだ……」

ハザウェイは、この事をマーチンに告げる。マーチンは、連絡するための狼煙を上げていた。

東と西の盲点を見つけだしたこの戦いの火ぶたはすみやかに切つて落とされようとして始めた。

しかし、この事を知らないカイルは未だ『キリアートン』の城中にいる。

そして全くこの時は、カイルにとって、これが悲劇の始まりだとは気付く由もなかつたのであった。

#20 招かれたる客

招かれたる客

「グエイン国王。朝の支度に参りました」
静かで冷たい響きの声が聴こえてきた。その声は目覚めて間もないカイルの耳に届いた。

「入れ」

既に目覚めていたのであるうグエインは、その声に反応するように声をあげる。

「失礼します」

とその隔てたドアが開く。

「今日から、この者の世話を頼む。私は暫く戦場に赴く」
そういうと、カイルの手を取りベッドから立ち上がらせた。
「この方は？」

見かけない者に驚く女中。

「我の客だ。名はジャスティ。失礼のないよう接客しろ」
前もって用意していたかのようなグエインの言葉。

そして、未だ信じられないものを見たかのように女は大きな目を見開いて本国の王グエインを見ていた。

「オレが、女を連れ込んでいるのがそんなに不思議か？」

その立ち尽くしている女中に軽く皮肉を込めてグエインは言う。
「いえ、失礼いたしました…お言葉に背かないよう努めます」

一礼をし、カイルの元にその女は足を進めた。

「彼女は、目が不自由なのでな。少し手間取ることだとは思うが宜しく頼む。後で良いから薬師に診てもらつよう取りはからつておくよ」。オレはこのまま一度会議に出る。

それだけ言うとグエインはこの部屋を静かに後にした。

女はそれをただ訝し気に見送っていた。

それから暫くすると、侍女は動き始めた。

「ジャスティ様。それでは、こちひく」

カイルの手を取りその侍女は、部屋に案内するとこの風にこの部屋を出るよつと導いて行つた。

「グエイン国王は、何故こんな時にこのような女に現を抜かしているのであつ……」

カイルはわざとその手を引いている女に聞こえるように言葉を漏らした。

「…分かりましたか？」

女は答えた。隠す気は無いらしい。

「そう言つ事は誰もが感じるであろうつ、実際、ボ…私がそなたでも感じじる事です。所であなたの名前はなんと？」

『カツーンカツーン』一人の足音だけが石廊下に響き渡る。

「メイと申します。以後御見知りおきください」

「ではメイ。一つ聞きたい事がある」

「なんでしょう？」

「何故、あんなグエイン国王のような男に従つてているのだ？」

何を？いぶかし気な表情でメイは、

「異な事を…誰もが恐ろしいから」「やります……」

「恐ろしい？そんな国王をよく奉つて来れましたね……謀反を起こう者はいないのですか？」

「謀反者など居やしませんよ。そんな事を考えるだけの力を持つた時には、それこそ国王の偉大さを身を持つて痛感する事になりますようから」

「…立ち上がる者はいないと？」

「立ち上がる必要なビジョイません。強さこそが全てです。の方方がいらっしゃるから今の今までこの国はあつたのです」

それこそ当然な事で有るとでもいうかのよつにメイは語つた。

そして、こちらにとでも言つよう力の手を引くメイは右に

曲がる廊下を指し示した。

「まず、浴場で御くつろぎ下さい……その様子ですと、何日も入られていないです。それから、貴女様のお部屋に御案内したく『」ゼーしますゆえ……』

そう言つとカイルは御呑場へと導かれて行く羽目になつた。

戦場に赴くグエイン国王。彼が背負う者達は、ただ一途にも自分達の王を信頼している?

湯舟に浸かつたカイルは、立ち籠める湯気の中一人考えていた。

「……『キリアートン』では、平和イコール、グエイン国王の政治の仕方。を心から信じているのであろうか?ならば、戦争を招いても誰一人として逆らう事などないかも知れない。いや、まだ成り始めた國一代。その事がすべてそう思い込ませるのかも知れない。もしそうで有るのであれば、これから起こる悲惨な出来事をかの者達はどう思つであろうか?

「お湯のお加減は如何ですか?」

控えているメイが声を掛けてくる。

「ありがとうございます。気持ちの良いお湯です」

響き渡る声が耳に心地よい。

カイルは、思う所をズバリ聞いてみたくなつた。

「メイ、ところで、平和な国とはどのような国を言つのだと思われます?」

先程の続き、メイはまたそんな事かという風に、

「我が國、グエイン国王が統治しているこの国こそを言つのに決まつております」

「本心か?」

カイルは、それが訊きたかった。

またもや訊き返される。こうも自分の国の事を訊かれると流石に

認し気に思いメイは返す。

「ジャスティ様。あなたは一体何が言いたいのですか？あたしは、
グエイン国王に貴女様の事を預かつた身では有りますが、あまりに
不躾な事を訊かれます……もしや、あたしを謀反人に仕立てたいので
すか？」

少し語尾に陰が籠つてゐる。それを察知した、

「ごめんなさい。そう言つつもりはないのです……ただ、あなたの事
が知りたいと思つたから……」

カイルは、誤魔化すのに骨を折る思いであつた。

「そうですか。ならば結構です」

メイがそう言つと、湯舟に流れ込んで来る水の音だけが辺りに響く。

メイにとつても、この国にとつても、ボクという存在は招かれざ
る客なんだな……

そう思いながらカイルは暫くゆつたりと湯舟に浸かつていた。

程なくカイルは、メイに導かれこれから先自分が身を置く部屋へ
と向かつたのである。

#2-1 キリアートン会議

『キリアートン』会議

会議にはグエイン国王及び、宰相メイディン、そして大将クラスの騎士達が集まっていた。

「…ですが、この人数を持つてこの場を保たせるのはこさか困難なのではありますか？」

響き渡る大将の声。

「いや、この人数で良い。敵もこれ以上は攻めては来れまい。ただ足留めをすることと、敵への打撃を考えての配慮だ」

グエインは、その、大将アランにその心の内を明かす。

「確かに、開けた台地としてのこの場所は、我々にとつても、敵にとっても一斉攻撃を仕掛けるのに都合が良い場所でござります。そして、地の利としても高台を持つ我らが有利にことが運びます。一時敵の足を止めるにはこの地が最良かと…」

『隊を率いるモラン隊将は答える。

「多分敵は、東と西に面した地より攻撃を仕掛けてくるでしょう」「メイディン宰相は地図を広げて いるその場所を指し示す。

「正面より侵入するのは、決して容易ではない事は、『エストラーザ』のカイト皇子が承知しているはず。無闇に行動を起こす事は決して有るまい」

グエインは正面の門の強固なる場所を指し示す。

「『サリバーン』の者は、一度我らの城の周りを調査した形跡がある。もしかするとその盲点を突いてくるかも知れない。心しておこうように各部隊に伝令をまわせ！」

その言葉に各将校はざわめく。

「特に西側の陣は見張りを厳重にしておけ」

これは、隠し通路のことをグエイン自らの意図も含まれてはいる

のであるが、誰もその事には触れないようにしていた。

「承知致しました」

そう言つと、一致団結を決意する返事が返つて来る。

「一段落する頃、またこの城を出て、『エストラーザ』の街に、火を放て！敵はこの城にばかり気を取られているはずだ」

そう言つと、グエインは座に腰を下ろす。

それを合図に、

「では、我々は各部隊に連絡致します。これにて失礼致します」

会議は一段落を終える。各隊将は、この場を後にした。

「グエイン王、手始めにと言う事では有りますが、この作戦は後に尾を引く事はございませんか？」

少し心配気なメイティン宰相は言葉を濁しながらグエインに忠告する。

「大事ない。籠城を決めこんでの戦だ。ただ、今は物資の事のみが我の安堵出来る物であれば、そう人々と、打ち崩れる事はないと確信しているからこそだ」

グエインの言葉を聴き、メイティン宰相も素直に従つ決意を新たにする。

「承知致しました。そうやすやすと、敵の思つ壇になる事はないでしょう。今は、王の意志を尊重する事が、我らの志氣を高める事となりましょうから」

弟のグエインを頭としてやつて行く事より兄の方をとつたメイティン宰相の策略は好する事でなければ成らない。今だからこそ、皆は信じているのである。

「それでは、私もこの場を失礼致します」

短い会議ではあった。が、静かにそれは幕を下ろす。

独り残つたグエインは、確かに勝利への道を、感じ取っていたのである。

予告

フェンディ一行が、小屋を訪れてみると、中はもぬけの殻であった。

はじめ、これがカイル皇子の不在を意味するのであるのか。それとも、既に『キリアートン』に人質として捕われた事を意味するのか皆見当が付かなかつた。

「フェンディ皇子、これは一体どう詮つ事なのでしょう?」

一人歩きをするだけの気量が、彼にあつたのか?否、ないはずだ。「あの日だ、そう遠くには行く事は出来ないはずだ。なれば、人質として囚われていると解釈するのが妥当であろう?」

フェンディは小屋の中のあらゆる所を見回す。

別段荒らされている様子もない。この前訪れた時と変わらない内装であつた。

そこに、背後からハイルが現われた。ハイルは直ぐ様フェンディに跪く。

「フェンディ皇子、カイル様は昨夜グエイン王に連れられて、『キ

リアートン』城に入られました。今は城内にいらっしゃいます…」

最後の方は語尾が聞こえづらく、何とも言ひがたい表情である。

「どうした? 何かあつたのか?」

その様子を不審に思い、フェンディは、ハイルに問い合わせる。

「…いえ大した事ではございませんが、ただ引っ掛けた事がございましたので…」

少し勿体ぶつた物言いが、フェンディにとつて氣に入らない事のようと思えた、

「何? 言いたい事があるならば申せ!」

と少し口調を荒げる。只でさえ、大切な『エストラーザ』の第一

皇子がいなくて緊迫している時であるのだ。

「実は、彼は…カイル皇子は女性である様なのです」

「何…？」

「グエインが単に、女装させたのであれば氣にもならない事なのですが…実際、敵国で、目を不自由な身をさらす事から氣にして見守つていたのですが、侍女をつけ且つ女として振る舞える事ができるように、配慮されている点が…」

「わかった。それが、『エストラーザ』にとつてまた、カイル殿の隠し事とあるかも知れないと申すのであれば、我らは、少し考えて行動する他あるまい。男であろうが、女であろうが関係はない。見聞違いだけはするな！」

フェンディ自身驚きの表情を隠す事は出来なかつた。しかし、誤つた行為を避けなければならない事だけは事実なのである。

「承知致しました。それから、ハザウェイ国王側からの伝言が有ります」

そう言つとハイルは、事の次第をフェンディ一行に伝えた。

「分かつた。御苦労であった。また何かあつたら連絡をくれ
「それでは…」

ハイルはその場をすみやかに立ち去る。

「ハザウェイ国王も、難しい手を考えつかれましたな」

メイトは、フェンディの側に仕えたまま言葉を発する。

「東側でこれからやることの前に、我々も気を引き締めておかなければならぬ…それに成功すれば、一気に正面からと、この西から攻撃を果たさなければ成らない」

「…カイル皇子を助け出すだけの余裕は有るのでしょうか？」

おぐびにも見せてはいなかつたが、メイトは氣にしているようだつた。

「そのためにも、ハイルには氣を配つてもらわなくてはならない…大事な事だ」

そう言つと、小屋から出ようとフーンディは歩き出した。

「どこかに、抜け道が有るはずだ……しかし、この状況下で見つけたとしても、ただ罠にかかる事になるかも知れない。よつて、下調べをするだけに止めておこづ」

そう言い残すと、東側の動向を待つてからの行動を出来るだけしておこうとフーンディは、『キリアートン』の者らに気取られないように城周りを重點的に見回るよう云々を出したのである。

城、正面側で待機をしているオレ達は、今は只これから算段を昧方に伝える事で持ち切りであった。

一通りの事は、やつていた。あと残った兵力。そして、生け捕つた『キリアートン』の者から情報を聞き出す事は、ほとんど終わっていた。

「グエイン国王の手の内は大体分かつたが……すべて、向こうの通りの策にはまっている。焦りは禁物だ！」

オレは思つていた。

もし、東側の攻略までをも配慮していた時にはどうする？

ただ不安に騒られていた。

この高台での戦略は既に深い痛手を負つている…きっと、西側の方も計算に入つていてる事であるだろう

きっと、その事は、フーンディ皇子の方で対処している事では有ろうと考へ、まずは、

「ユール殿、申し訳ないが、一時『エストラーザ』に戻り、『キリアートン』の夜盗が出て来ていなか調べてきてはくれまいか？」

オレは、『エストラーザ』に、緊急の兵力を置いていない事に気付き、『サリバーン』の将校に遣いを出そうと思いつた。

「承知致しました」

「伝令を伝えたら、またこの場に戻ってきて頂きたい」

ユールは、その言葉に返事をすると、来た道を馬で駆け降りて行つた。

もう日も沈もうとしている頃であった。

三日後の夕刻。ハザウェイ王の策。これが、最後の賭けになるであらう事。それを頭に入れオレは自らの体を休める事にした。

緑色の瞳

水しぶきの音が聴こえる。それは新緑の中。雄大な青空を従え、オレは城近くの泉で水浴びをしていた。

「気持ち良い〜！」

光り溢れる中、水しぶきはその光を浴びて『キラキラ』と光っていた。

その泉の淵で、静かにカイルは素足を浸している。

「どうだ、カイル！ 足が付く所までなら入つてみないか？」

オレの言葉にギョッと驚くカイル。

「いいよ。ボクは……」

遠慮するかのようにカイルは答える。

「遠慮するなつて！ オレが手を引いてやるから…気持ち良いぞーー！」

そう言つと、オレは、カイルのいる所まで泳いで来る。

「本当に良いてばっ！」

ただ遠慮しているんだとばかりに思い、オレはカイルの手を取り、泉の中まで引きずり込む。

「ちよつと、カイ……」

拒絶する間もなく、滑り込むかのようにカイルは肩まで水に浸かっていた。

「いつもオレが泳いでいるのを待つているだけじゃつまらないだろうが！」

と、言いかけたオレは、カイルの様子を顧みた。

「カイル？」

そんなカイルの様子がおかしい。衣服のまま引きずり込んでしまつた。

「そんなに嫌だつたか？」

無言のままであった。頭まで被つた水が滴り落ちている。

「『じめん……悪ふざけし過ぎた』

オレはしょんぼりと肩を落とす。

「でも気持ち良いだろ?」

そうやつてオレが宥めているのにカイルは黙つている。何もそこまで怒らなくても。

「わかったよ。悪かつたって! 機嫌直せよお」

どうすれば良いのかに困つたオレは、そう言いながらカイルの手を引き陸へとあがつた。

しかし、カイルは、オレに背を向けて座り込んでいた。

「どうしたんだ? 本当にそんなに嫌だったか?」

しぶとく謝つているにもかかわらず、カイルの機嫌がなあらない様子なので、オレは頭を抱えていた。

「いいから、こっち見ろつて!」

手を取り振り向かせようとするオレ。

その手を振りほどこうとするカイル。

余りにも尋常にないカイルの行動に、オレはついに怒りを覚え始めていた。

「何、だよ……そんなに拒む事ないじゃないか……」

言つた後に表情を無くした。

「お前……」

胸元を押さえているカイル。そこには少し膨らんだ胸元が、濡れた衣服の上から覗いていた。

「……女……」

ただ、カイルの緑色の瞳が揺れていた。

ここで、『はつ』とオレは目を醒ました。

戦場で仮眠を取つていたオレは、岩影で跳ね起きる。まるで、思い出の中に真実の一コマを見た気分であつた。

夢？

いや、これはきっと事実なのだ。

まるで見た事のあるそれは、實際、己の中の大切な何かである事だと言ひ事をおぼひげながらにも悟つた。

オレの中に、己の世界の何かを思い出しかけている

何と言ひ事であるのか？

事実、記憶喪失と言ひ病症の縁に立つてはいたのは誠の事であるのか？

それさえ、何が眞実か分からなくなつていた。

しかし、こんなにもカイルの事を思つてはいる自分は、異常な程度ある事は前々から悟つてはいる事ではあった。

オレの中で、沸き上がつてはいる感情

これを押さえる事が出来ない。

カイルが女？

なれば己も、こんなに心配してはいる？

もしかしてオレは……

頭の中で言葉を無くした。

あの時、カイルは言つた。

『全て忘れてくれた方が良いのかも知れない』

オレはもしかしたら？

「」の世界に来る前のこと…

そんな覚えのない事に、引き込まれている想い。それは、気付かぬ内に、行動としてにじみ出でていたのかも知れない。

オレが知らないオレは、カイルを愛していたのかも知れないとうのか……？

頭の中で響き渡る音。

まだ明けない夜。

独り静かに起き上がっていたオレは、再び眠りに付く事をえ出来ず考えていた。

振り返る記憶に有る過去。

今までに自分自身の悩みの種である全てが「」に来て明らかになりましたのである。

「薬師をお呼び致しました」

メイはそう言つと、ベッドに横になつているカイルの元に、薬師を呼び寄せた。

「ところで、そなたの症状はいかがなのでしょうか？」

分からぬ事ゆえに薬師は尋ねる。

「幼少の頃、毒で目をやられたのです」

「毒で？」

「」に細工してあつたよつて……実際どう言つ物であるのか分かりません。ただ、私の視力は暗闇か陽の当たつている場なのかを判断する事は幽かに出来る程度で「」をいいます」

そう言いながら、半身を起こしカイルは簡単ながらも答える。

「それは難儀な事で「」ぞこましたな」

氣の毒に思つた薬師は、それだけ言つと、何やら藥草を取り出し

煎じはじめる。そのなんとも言えない薬の臭いが部屋中に充満し始めた。

「今さら効くかどうかは分かりませんがこの解毒剤を作りますので、田に当てておいて下さい。決してはずさぬ事」

そう言つと、布にその薬をしみ込ませカイルの緑色の瞳に軽く押し付け、布で巻き付ける。

「もう暫く安静にして下さい。言つておきますが、必ず効く物だと
は努々思われない事でござります……」

それだけ言つと、片付けを済ました薬師は速やかにこの部屋を後にした。

その後、暫くすると、

「一先ずあたしの仕事は終わりましたゆえこのまま引きあげます。
何かございましたらお呼び下さい。それでは夕食の時に参ります」

と言い残すと、メイもこの部屋を後にした。

残されたカイルは、体を起こしベッドの端に腰を下ろした。
瞳に施された布が熱い。

この日まで一度たりとも外界を見た事などなかつた。
もちろん、初めから期待などはしてはいない。

でも…もし見えるようになる奇跡を願わざるおえない期待。

少しでも、見えるようになるのであれば、これほど嬉しい事はない。
と今まで心の奥に仕舞い込んでいた想い。

今まさにその先に来ている。

しかし、それは悲惨な光景を見なくてはいけない状況下。

……これは見えない方が幸せなのか？

カイルは考えていた。

光が、宿る。その瞬間は、実は闇なのかも知れない

カイルは再び床に横になつた。

夜明け

清清しい朝は、変わること無く訪れる。

「一体昨日とどう違うのか？それさえ疑問なカイルであった。」

「おはようございます。ジャスティ様」
メイが社交辞令のように挨拶をする。

ここには、昨日から使用しているカイルの部屋。シンプルで、『キリアー・トン』独特の石レンガで囲まれている。

「本日もまたよい天気でございますよ」

と、唯一ある窓の閉ざされていたカーテンを開く。
しかしその様子など、明かりの加減でしか見当も付かないカイル
は、

「おはよう。それは良い事ですね」
とだけしか答えられない。

「本日は、グエイン国王不在のため、あたしが全てお世話をさせて
頂きます」

カイルの前で一礼する。

「少し風に当たりたい。外に連れ出して頂けますか？」

この動きのない部屋に居ては、気分も優れない。それも、既に戦
乱の火蓋が切つておとされている今なればこそである。

「結構ですよ。外の空気を吸うのは体にもよろしい事でしょうから
…ただし、お先に朝食を召し上がってからですよ」
そういうと、食卓に手を取つて案内してくれた。

「三千の兵より、二千の兵が戻ってきたのか…」

第一の門の近くに引き返してきた兵を迎えるながら、グエインはモ
ラン率いるその隊を眺めていた。

「敵は五千の兵を動員していて、なるべくこちらの被害を避けたためでござります」

「して……敵の被害の程は？」

「五千の半分はしとめた次第でござります」

「まあ、妥当な所だな」

その言葉に反してグエインの表情は堅い。

「少し兵を休める。また、夕刻に奇襲を仕掛ける。準備は怠るなー。」

「承知致しました」

それだけ伝え終わるとグエインは第一の門へと足を向けた。

「国王も、寝ずの番をしている。それでもオレ達の帰りを待ち望んで下さっているのだ！それに報いるため立ち上がりうぞ！」

モラン大将は、そう言つて味方の兵を煽つている。

「城壁の外で不穏な動きはないか？」

各城壁の場にグエインは赴いて情報を聞きに回っていた。

「今の所はまだ何も！」

アラン隊将以下の兵は口々に言つ。

「ならば良い。これからも辺りの様子に気を配れ。よいな…」

「はっ。もとより承知してござります！」

そして立ち去る。

「グエイン国王。少しお休みになつて下さい」

メイデイン宰相は、そんなグエインの行動をたしなめるように進

言した。

「なあに、心配するな。戦線に立つてゐる訳ではない。本当だつたら、オレが全て取り仕切つていていたい所だ！」

「お気持ちは分かります。ですが、今は一国の王であらせられます。その自覚を少しあ持ちください！」

そつは言われるものの。野生の魂がグエインを搔き立てているのである。

「ところで、女を匿わされてとか聽きました……国王は一体何を御考

えなのですか？」

早くもメイティン宰相の耳に入つたらしい。

「気に入る事では無い。只の退屈しきだ」

その言葉に、何を真廻なという風に、

「あれは、『エストラーザ』のカイル皇子ですね。生かしていらっしゃったのですか？誰の目をも誤魔化したとしても、この私の目は誤魔化しきれませんぞ！」

「それがどうしたという？大した事ではないぞ。捕虜が一人増えたまでだ」

「捕虜の待遇とは思えませんが？」

「邪推な事を聞くな。オレが気に入つてゐる。只それだけだ」

「…目を不自由にしていると聞きますが、一体この『キリアートン』に何の得があると言うのです？！」

「人質にはもつてこいの人物だ。しかも上玉のな！」

「確信あつての事なのですね？」

「当たり前だ」

「それならば、お言葉に従います。しかもしもし、災いをもたらすとなれば、この私が黙つてはおりませんぞ。心して置いてください！」

そう言つと、メイティン宰相は一足先に城の中へと立ち去る。

災いだと？あの者にそれだけの器量などあつはしない。只の玩具だ……

グエインは、再び城外を視察するために辺りを見て回つた。

城外は簡素な木々を取り巻くだけで、何の変哲もない。が、遠く

木靈する木を切る音。

『カツーンカツーン』

一瞬何事かと思う。

「おい、あの音は？いつから鳴つているのだ？」

近くに控えている兵に声をかける。

「昨日からで、」ゼロさま

「……」

何か考えるように腕組みをするグエイン。

「におうな……」

「すみません。一昨日から風呂に入つていませんもので……」

そんな事を聞いているのではない。と思つたが、
「気をつける。何かの前触れになるかも知れない」

「はっ？」

「見張りを厳重にしろと言つたんだ！」

「はっ。心得ました」

この時グエインの頭をかすつたのは、まぎれもなく、これから先の末路への一つだったのは、言つまでもない事であった。
その木靈は、三日三晩に続き聽こえるのであつた。

「まあ、綺麗！」

庭を歩いているカイルとメイ。

冬の『キリアートン』の肌寒い風に誘われて、一人は庭を歩いていた。

「こんな所に春蘭が！春も近付いてきているんですね？」

そう言うメイは一房花を取りカイルの耳に挿す。

「お綺麗ですよ。ジャスティ様」

少し照れているのかカイルは顔を赤らめながら答える。

「ありがとう」

少し香りの強い花のようでその臭いを楽しむ。そこに聞き覚えのある足音を聞いた。

「慣れ親しんできたのかな？ジャスティ殿」

その足音を聴いた瞬間、それが、グエインのものであると確信した。

「まあ。グエイン国王。こんな所に足を運ばれるなど、お珍しい」

メイは、その姿を見て感嘆の声をあげる。

「ええ。メイ殿が、お誘い下さったんです。外は良い陽気のようですね」

皮肉にも軽く挨拶をかわす。

「薬師に、治療してもらつたらしいな」

カイルの目を見てその様子を感じ取る。

「ありがとうございます。しかし、治るか治らないかは、期待せぬように忠告を受けました」

「時間が経ち過ぎておるからな」

一度治るといった手前、

「そのようです」

「それより、グエイン国王お休みになつて下せによ……みな心配されていります。国王が、ここにいつ時に寝込まれでもしたら困りますから!」

メイは、力強く忠告をする。

「分かつていて。メイ、お主の言いたい事は、メイティンの口からも聽かされたわ……」

頭をかきながら、答えるグエインの様子は余りにも年相応の普通の少年のようであった。

カイルにはその姿を見ることは出来ないが、声色が優しく感じられた。

「良く似合つてゐるぞ……ジャステイ」

なんとも形容しがたい様相のカイルを見ながらグエインは少し照れくさそうな声色でカイルに語る。

「ええ、メイが取つてくれたのですよ。似合いますでしょうか?」

「似合つてゐる。本当に…」

カイルは少し違和感があるものの、グエインの口からも聽かされる言葉に嘘がない事は感じ取つていた。

「何だか変な気持ちですよ」

カイルは未だ少し顔を赤らめていた。

「西の空に、雨雲が立ち籠め始めた。早く城内に入れ、一雨来るぞ」

「あら、本当。さあジャステイ様、お手を……」

そう言つと、メイはカイルの手を取り城内へと向かつた。

「オレも少し休む。ジャステイ、話したい事が有るオレの部屋へ来い」

その言葉をメイは聞き入れ、カイルをグエインの部屋に導きその場を離れた。

「宰相のメイティンが、お前の事に気付いた。なるべく城外に出る事は控えてもらいたい。まあ、縛り付けるつもりはオレはさらさら無いから氣にしてはいないのだが、我が国の士氣に乱れが出ては困る」

「ボクは、『エストラーザ』の者ですよ。そんな事気になどしてはおりません」

「敵なのは承知の上で言つている」

グエインは、椅子に腰掛け対峙しているカイルを傍観しながら答える。

「もともと、オレのエゴで、助けたのだから、何も困る事など起っこりはしない事は重々承知の上だ。しかし、あまり自由に動かれたら、人質として匿つているオレの身が怪しまれてしまう」

「本当はそんな事などどうでも良い事なんでしょう?」

心の内を読まれた。が、グエインは動じずにカイルに告げた。

「お前をこの城に招き入れた道筋を『サリバーン』の連中は血眼になつて探し当てる事だろう。いや、既に見つけているかもしだぬ」

「罷を張つてゐるんですね」

「そのような事は、もう既に分かり切つてゐるからな。敵も注意している事とは思うが、隙あらば何か策を考えて行動に移すであろう」「女でこの身の上。もう、助けなど送る事は無いでしょうに……」

カイルは、思つていた。それが当たり前である。

「いや、カイト皇子はそんな事考へてはおらんであろう」

しばしの沈黙。

「カイトは、カイト皇子は、ボクがこんな身で有つたとしても確かに助けようとするとかも知れませんが、『サリバーン』の者がそうやすやすと危険をおかしてまでボクを助けようと動くことは無いでしょう」「うう

動じずに答える。今動じてしまつたら、何か策を講じてやつて来る『サリバーン』の者達に立つ瀬が無い。

「本当にそう思つてゐるのか？」

「あの時逃げなかつたボクの事など氣にもしてはいないでしようから……」

「……」

「そんな事より、籠城を決め込んだのですか？」

戦場に赴いてゐるはずのグエインが今ここにいる事が疑問であつた。

「我が國の城壁を破つて来る事などできはしないであらうからな

「甘いですね」

「何を？ 甘い？」

語尾を濁らせるグエイン。

「物資は余り有る程に豊かなのだ。後は日を置いて敵の物資を減らして行けば事足りる。そこに、付け入つて一気に国境を越えて叩き潰すのみだ」

「なるほど。 そう言つ事ですか」

カイルは今ここにいるグエインの考えを知つてしまつた。

「本当に上手くいくのでしょうかね？」

「決まつてゐる。 オレを見ぐびるな

「見ぐびつていたりしませんよ。 ただ、『エストラーザ』や『サリバーン』の事を甘く考えてゐるようですから忠告しただけです」

「ここで、『キリアートン』を卑下してみる。

「ふんつ。まあいい。 奴らの戦力のなさは、分かつてゐる。 後は、奇襲しか無い事。 うちの千の兵力に三千近い兵力を持つてしか太刀打ちできない様じや、たかが知れている」

その言葉をグエインは何とも思つていらないらしい。自らの兵力を過信しているのかそう告げた。いや、勝てると確信を持っているのだろう。

カイルの鼓動は高鳴った。

「既に血は流されたのか？」

「ああ、高台の地でな。ぶざまなもんだなあカイルよ。たかが弓隊にやられているようじゅ、言葉もでないぞ」

「……ボクはここで一体何をしているんだろう？この田さえ見えていたら戦いに出で……」

「そう望んでも詮方なきであるつ？この地で、己を恨むが良いわ」

足を組み換えるグエイン。

打ちふせられたカイルの様子を楽し気に眺めていた。

「これからが楽しみであるよな。カイル？」

「楽しくなど無い！今ここに剣が有ればお主を切り捨てるのに

……」

カイルの手が小刻みに震えていた。

「笑止。もしお主の目が見えていようど、そんなに容易く切れる事など無いわ！」

『わはははは』と、高笑いするその声があたりに響く。

「もしできたら？その口をへの字にしてくれるー！」

「待つていろぞ。楽しみにな！」

「……」

怒りのためこれ以上話したく無いと思つたカイルは、腰をあげた。それを合図に、

「メイ！ジャスティ殿が、部屋に戻られるそだ。手を貸してやれ！」
グエインは立ち上がり、扉を開いて手を打ちメイを呼ぶ。

「それでは！」きげんよう。ジャスティ殿

カイルは、グエインの手を振り払いドアが有る方へと歩いて行つた。

「今の言葉、覚えておいて下さいね！」

捨て台詞のつもりだった。

「ああ、覚えておいでやろ?」

しかし、返ってきた言葉は、自信の有る言葉だった。

奇襲

この日は、朝から夕刻まで、兵の看病と統率に余念なく行動していた。

一日中管理体制をしいていた兵は、見張りも交代制で上々である。見張られてはいるものの敵の動きは一向に無い。

「一体『キリアートン』の者は何を考えているのでしょうか?」「クルトは疑問だとオレに話し掛ける。その答えが欲しいのだらう。

「本日は、戦う気が無いのかも知れない」

「……にしても、見張りは絶えずこちらを伺っておりますね」

「ああ、だからとて気を抜くな。いつ奇襲をしかけてくるかも分からぬ」

「ええ、その事は皆承知の上です」

まだ、物資の余裕は有る。また何かをしかけられてもその算段を怠つてはいられない。

「もし、仕掛けてくるとしたら夜半であろうな」

オレは確信していた。

疲労している兵。休んでいるのはなにぶん夜の者達が多い中、攻められて困るのは夜であった。

刻々と日が暮れる。

この一日が長く感じられた。

早く約束の日が来る事を願つて止まない。

オレは昨夜、余り休む事が出来なかつたから、今頃眠気が襲つてきた。

中央で焚き木を絶やさないよつに兵が寝ずの晩をしている中、岩影でオレは『うつらうつら』していたそんな時であった。地鳴りがしてきたのである。

「私は、『キリアーントン』軍大将アランである！カイト皇子の首を貰い受けに参上つかまつた！」

騎乗した兵とその配下の者たちが一気に坂を駆け下りてきたのである。

「カイト皇子！」

身近に控えていたクルトがオレを揺さぶり起こす。

「敵の兵が参りました！」

慌ただしく退く『エストラーザ』の兵達。再びの戦闘。闇の中戦い慣れない『エストラーザ』には、分が無い。

「この闇に隠れているようでは、何と腰抜けの皇子であろうつむ…」敵はと言えば、言いたい放題言つている。

「クルト、オレは出るぞ！」

その言葉に一気に頭に血が上ったオレは、すばやく立ち上がり、剣をたずさえてその音のする場へと走り出した。

「カイト皇子！」

叫ぶクルト。しかしその言葉も聽こえないため、オレは中央の灯りがある場所まで走り込んでいた。

「お主がカイト皇子か？」

「いかにも。オレがカイトだ！」

「腰抜けかと思つたが、少しは骨の有る奴の様だな？」

アランの口元が笑いのため釣りあがるのを見落とさなかつた。オレの血が滾^{たぎ}つた。

「では、覚悟！」

剣を鞘から引き抜き襲い掛かるアラン。

周りでも他の兵がそれに続く勢いで突進して来る。

『カキン』と、一度刀を重ねる力と力の勝負が続く。でも後に引かないオレに、

「少しはできる様だな」

「ほぞけ！」

息巻くオレ。この有様を見ていると、イラついてしまつた。そし

て瞬時後ろに飛び退く。身を翻すアラン。

再び重ね合づ剣。馬上で身を翻すアラン。

「馬なんかに乗っているから動きもままならんってか？下りて戦つたらどうだ！」「

「きさま」と、このままで十分だ！」

その言葉に、馬に切り掛かつた。オレはかなりムキになっていた。「姑息な！」

足を負傷した馬が、前のめりに倒れ込む。

「これで、対等に戦えるな！」

転げ落ちるアランを見下ろす。これで、対等だ。それを見て、アランはすぐさま身を立て直す。

「後悔するなよ、カイト皇子！」

再び切り合いになる両者。

誰かが森に火を放ったのか、辺りはいつの間にか、火の海になっていた。

『カキーン』閃光が走る。

『ギリギリギリッ』力押しの剣は、オレの頭上を掠める程間近に迫つている。どうやらオレは力負けしているようだ。再び、後ろに退く。

しかしみると、アランの方が背格好から見ても有利である。

足下を狙つて懷に入る他無いな

オレは大剣を操つているアランを一睨みして構えを改める。

汗ばむ手の平。

そこに、クルトが走り込んできた。

「カイト皇子！この者の相手は私が致します！」

そう言つと、オレと、アランの間に入り込んで來た。

「邪魔をするな、クルト！」

「皇子には、他にやるべき事があるはずです！もう少し御自分の身

をお考え下さい！」

その言葉に打ちのめされた。

「自分の身？」

「あなたがこの場で打たれでもしたらこの先の『ヒストラーザ』はどうして繁栄して行くのですか！？」

クルトの背中を眺めながらオレはその言葉を聽いていた。

「オレが？」

『カキーン』ぶつかり合つ劍。大きな背中がアランの剣を阻止している。

「……」

「皆はあなたに、未来を託しているのですよ！」

アランの翻るマント。それがオレを搔き立てる。

「カイト皇子！お逃げください！」

「させらるか！」

『キーン』離れるアランとクルト。後ろから見ていても互角の二人。
「……すまない。わかつた……しかし決して死ぬなよ！生きてオレの元に戻れ！」

再び重ねられる剣。

オレはその姿を最後に見届け、坂を駆け上がった。周囲に居る味方の兵と共に。

道すがら敵の兵がオレ達の前に立ちふさがった。が、今のオレは、後の者達の事を考えては、ここで踏ん張る事こそが生きている証なんだと思い、その剣は冴え渡つた。

『『ヒストラーザ』の兵よ臆するな！進め進め！』

燃え盛る火の勢いに負けじとオレは先を急いだ。それは当て所も無い道であつた。

一中夜、火は辺りを朱色に染めていた。それは、夜空さえも飲み込んでいた。

やつと東の空が白む頃、敵の兵の追つ手も途絶え、オレは近くの木にもたれ掛かるかのようにして倒れ込んでいた。

夜露が鼻先を滑り落ちる。

『ピチヨーン』と言つ音で目を醒ました。

木の葉の間から霧雨のような雨の雫が体の熱を奪い去つて行つた。目の前には霧が立ち籠めていて、身動きもとれない。

「カイト皇子、お目覚めですか？」

マクベ大将が、オレの側でその様子を見守つていた。

「ああ……」「こは？ 今は何時だ？」

森の中に迷い込んだようです。少し歩けばもとの道に戻れるとは思いますが……時間の方も分かりません。多分、明け六つ程ではないかと……」

「他の兵は？」

「みな、四方に逃げましたので、今の所は十余名と言つた所しか判りません」

「やうか……」苦労であった。お主も少し休め。疲労しているだろう？

「……」

「オレは、少し見回りをして来る」

「では、私もお供します」

「良いから休んでろ！ これ以上の犠牲は出したく無いんだ！」

「……承知致しました。お気を付け下さい」

そう言つと、マクベは木に寄り掛かるよつとして、仮眠を取る体勢を取つた。

オレは周りを緋徊していた。

歩けば歩く程、辺りは疲れ眠りに就いている味方の兵に出くわす。

「こんなになつてまでする戦とは一体なんだ？ 一国を守るために？ 平和な世の中にするため？」

そのためにこんなに犠牲を出さなければならないのか？
オレは知らない。こんな時代なんかに生きた事は無い。それは
だ！

早く終わりにしたい！

この世をそして、『キリアートン』のグエインをこれほどに憎い
と思う事は無かった。

オレは、何のためにこの世に生を受けたんだ？神よ、教えてくれ
！

オレは天を仰ぎ見る。しかしその返事は返つてはこなかった。

涙の軌跡

「昨夜の奇襲は上手くいったようであるな？」

グエインの顔が少しほころんでいるかのようであるのが皆にも伝わっていた。

「ハツ。カイト皇子の首こそはそれませんでしたが、敵が、辺りに火を放つてくれたおかげで四方に散つて行つたようですが」アラン大将が、謁見の間で、事の次第を伝える。

「これで、敵の数も半減したであらう。それに、伝令の出し方も変わつて来る。動きづらいであらうな」

「十数部隊に別れてしまつては、集まるのに一日を費やす事でしょう」

「敵の物資も昨日の戦闘でそろそろ死きてきつてはいる事でしょうな」宰相メイティンが口を挟んで来る。

「あんな所に腰を落ち着けているんですから当然ですよ」

『』隊長のモランが言葉を紡ぐ。

「事の次第は分かつた。これから行動を逐一観察しておけ。また何か考え方付き、行動を起こすやもしれん。心しておけ！」

それを告げると、昨夜も寝ずに居たグエインは、寝所へと足を運んだ。

「それにしても、あの敵のクルトといひつゝ者は、敵ながらあつぱれであつたな」

「と申しますと？」

「カイト皇子を逃がす算段後、一步もオレの足を前に動かす事かせなかつた」

アランが、褒め言葉を漏らすとは、よほどの人物だったのである

うと、モランは話に聞き入っていた。

「最後には、このオレの肩口に傷をえこむまで行きやがった」
甲冑に血が滲んでいるのが見て取れた。

「取り逃がしたのですか？」

「残念だが、余りに火の回りが速く、戦う所では無かつた」
モランそれはそれはと言つた風に、

「それは残念でしたね。カイト皇子の側近であれば、名だたる騎士
であつた事でしょうに」

「そうだな。再び会い見える事を楽しみにしていろよ

「この度はお疲れ様でした」

「それじゃ

マントを翻しアランはその場を去つた。

残されたモランは、その後ろ姿を見届けはしたもの、直ぐさま
自分の配下のもとへと足を運んだ。

「お田代めかな？ カイル殿？」

昨日の事をもう忘れたのか、自然に振る舞つて来るグエインにカ
イルはあっけに取られていた。

「女性の寝所に不躾なのではございませんか？」

カイルはそんなグエインに嫌みたっぷりに返してやつた。

「戦況報告など如何かな？」

相変わらず、薬師の手ほどきを受けた日の布はカイルの目を覆い
隠していた。

「戦況？」

「昨夜、あなたの寝静まつた頃の事だよ。我が勢は奇襲を掛けたの
だ

「奇襲？」

テーブルへと足を運ぶカイル。その足取りは『フラフラ』として
いて、危なつかしい。

「そうだ。高台は火の海で、早朝の雨が鎮火させてくれたが、焼け

跡は見るも無残なものだ」

「高台と云ひと、カイト率いる……」

カイルは確か。と頭を巡らせていた。

「そうだ。三千近い兵がその半分になつてゐるだらうな。そのうえ、

塵尻に分断されでは、この先苦労する事だらう」

「カイトは？ 皇子は無事なんでしょうかね！？」

「死体の中にはカイト皇子いらっしゃる者は居なかつたらしい。無事であらう」

片肘を付き口元をゆがめている。その姿は、カイルには勿論見えないが、楽しんでいると思つた。

「カイト皇子は、この雨の中、森を彷徨つてゐる事だらう。…… 少数の部下を引き連れて」

「……もう止めしてくれませんか？ これ以上の血を流す事は無意味です」

カイルは憤りを隠し切れなかつた。

「いいや、それは無理と言つもの。敵が降参しない限り、この戦いは続くのだ」

「なんと無意味な！」

「そう思つのは勝手。しかし、敵国は『エストラーザ』や、『サリバーン』の連中は、少なくとも無意味だとは思つてやしない。そう、本国の誇りを懸けての戦いであるから……」

「皆、誇りなどののために命さえ投げ出すと言つのか！」

「所詮、平和主義のそなたには、男のロマンなど解からない

「解かつてたまるものか！」

両腕で、テーブルを叩く。そんなカイルを見つめながら懷から一本の剣を取り出す。

「この剣をそなたに差し上げよつ

と、グエインは、簡単な装飾の施されたあるダガーを、カイルの手に握らせる。

「カイル殿。そなたが、この剣をどう扱つが見届けさせて頂いづ。

今ここで、切り掛かつても結構。自害して頂くのも結構。それがどう使用されるのか、オレは見てみたい

その言葉に、鞘を引き抜くカイル。

「そんなに、ボクがどう行動を起こすのが興味がありますか？」
半分まで引き抜いた所で、その剣を鞘に戻しながらカイルは問う。
「そうだな、最後にはどういう行動をするのか？ 言葉と行動……それには興味がある……」

暫くの沈黙が、雨の音でかき消された。

「分かりました。これは預からせて頂きます。前にも言つたようですが、きっと、これをボクが使う時は、あなたを切る時だと言つ事を覚えておいて頂きたいですね。きっと後悔しますよ！」「ははは、その時を楽しみにしているぞ！」

そういうと、カイルの頭に手を乗せてからグエインは立ち上がった。
「きっとお前には、無理だな！」

カイルの胸の内、怒りと、憤り、情けなさが一気に込み上げていた。

言葉で頭で心で……このグエインを殺したい程の憎しみを抱いている。しかし、人を殺す事。それは、もしこの目が見えたとしても決して出来ない。そう、魂のどこかで解かっていた。それを見すかされている。読まれている。どこかで、警報が鳴っていた。

ボクは、根からの憶病者だ！

覆われた布の下から一筋の涙が流れてきた。

それは、自らの愚かさの証であるんだとここに来て改めて知つたのである。

嵐

待望の三日目は、嵐であった。

斜めに降りしきる雨は全てを叩き潰そうとする程に痛い。この分だと夕刻の合図に、狼煙さえ上げられないかも知れない。もう一日、日を待つ方が無難であろうか。と、東に位置したこの場所でその時を待っているハザウェイ王は考えていた。

しかし、この天候を利用するるのはいかにも部合が良い。

「ハザウェイ王よ、この天気は今だけの物です。夕刻には晴れるでしょう」

こう言つたのは側に控えたマーチンであった。

「そうか。それは誠に部合が良い。時に、水嵩は普段の倍だ。これは、なんとも言い切れない程の好都合だ。ここに来て諦めるなど勿体無い。天は我らに味方した！」

昨夜、カイト皇子の軍が、『キリアートン』の奇襲があつた事は報告済みであった。

ここは、この夕刻までに、隊を復興してもらいたいものである。密偵ハイルの伝達だと、ほぼ、三分の一の者達が復帰していると言つ伝達であつた。

「こちらの準備はほぼ完了しております」

「わかつた。今は時を待て！一気に形成を逆転してやるぞ…ハザウェイ王の勝利への準備は心に決まつていた。

「大丈夫か？」

オレは各兵に声を掛けて回つた。それが今の俺ができる。この天候だと、夕刻までには上がる見込みはある。皆、疲労している身で申し訳ないが、ここは一つ頑張ってくれ！」

刻一刻と流れる時の流れが、流れ行く雲の様子で今は刻まれて行く。

「クルト、よく無事で！」

オレはクルトの姿を確認すると、迎えるように肩を抱き合った。
「カイト皇子じゃ。一時はぐれた隊をよくここまで召集して下さいました」

「何、こうして、皆が生きていた事を確認するのが、一国の皇子としての使命だ。それに……なんだか、嬉しい。命の貴さを今、実感できている事が何よりのオレの生きている証のようで……」

「皇子……成長なされましたね」

「そうか？ 実はオレもそんな気がしてる」

少し照れくさい気がしてオレははにかんでいた。

「ははは」

その様子にまだ幼い表情を見た。とクルトは、笑い声を上げた。

「後は時間の問題だ。皆、疲労が並みの物では無い」

「立て続けに奇襲を受けたのですから。それは仕方有りません。それに、皆分かつております。後に引けない事くらいは」「そうだな……」

分かつてはいても、こう天候の悪い状況の上に疲労が重なると、人間精神的に参ってしまうものだ。

時に、志願兵などに關しては、鍛え抜かれた体とは言えない。心配にもなるというものだ。

「皇子は休まれたのですか？」

「ああ、少しばな。でも、体力的に疲れていても精神的に休む事はできないもんなんだな」

ほんの一時間そこらの睡眠で目が覚めてしまう。

「クルト。お前は休んだのか？」

「え？ ええ……」

「その様子だと、休んでいないな！」

オレは思わず声のトーンを落として威圧してしまった。

「分かりましたよ。少し休んでおきます」

「よし。聞き分けが良いやつだ。ここで休んでいろー。オレは、もう少し先を見て来る。できる限り味方の兵を捜して来るわ」

「お気をつけて」

オレは、木々の影から足早にその場を離れた。

少しでも休める場所をと、『キリアートン』城の街道の近くの森に潜るように陣を張った。

雨は木の葉の茂りでその力を弱めるためもある。

この作戦。天よ見守り下せー！

オレは心から天に願った。

一方、西に位置する城の周りを取り囲んでいたフェンディ皇子一行は、城壁の兵に気取られないように、密かに秘密の抜け道を探し当っていた。

それは、この道が罠である事はかくも承知であるかのように、ただその側に陣を張る事だけにとどめていた。

「フェンディ皇子、如何致しますか？」

メイトは、降りしきる雨に対し布を被る事で遮り、静かに辺りの様子を伺いながら、フェンディに問う。

「これは罠だ。それを承知で夕刻の号令と共に一気に攻め込む。今はそれを待てー！」

「罠で有つても、この地より攻め込みますか？」

「少しの動搖が命取りになることは分かっているだろ？？きっと、紛れ込む事ができる。それを待つのだ！」

「承知致しました。ならば、わたくしが先頭に立ちますー！」

「メイト？」

「何、心配はございません。皇子は後ろに控えていて下さー。約束でござりますよ？」

重ねられる瞳。それで全てが決まった。

「……わかった。お前に任す！ただし、一歩も引き下がるなよ。オレはお前をおぶさる事なんて出来ないのだからな！」

フーンディは、顔を背けてメイトに伝える。

「……ええ、分かつてありますよ。フーンディ皇子」

一瞬であつたがメイトの頬に赤みがさしていった。

降りしきる雨は一時雷雨をも伴う程荒れていた。

しかし、この流れる雲の様子だと、あと半時もすれば、青空を覗かせるであろう。

そして、勝機を掴む！

誰もが、そう確信を持つて今は静かに息を潜めていた。

#28 最期の決戦

最後の決戦

次第に弱くなる雨足は、霞の中ゆっくりとハツキリとした視界を映し始めた。

空は、今まで重圧の黒雲が滋味をかもし出し、ついには虹をも東の空に従え、晴れ渡つた。

ハザウェイは、森の木の影から、日に一度開かれる水路を眺めつつ、今かと時を待っていた。

そして、城壁に立っている兵が合図を出すその瞬間を見逃さなかつた。

「今だ！」

隠されていた三日三晩切り倒していた木を上流と、下流に投げ込む。

そのため、逆流を含むいつもに増した水が一気にその水門めがけて流れ込んで行く。

激しく流れ込む水は、大きな音をたて、城壁にぶつかつた。すると、今日の今日まで崩された事の無かつたであろう、その城壁が一気に崩れ落ちたのである。

「今だ！ 突撃！」

各部所に控えていた兵千余名が、その水流を泳ぐようにして、突入したのである。今まで城壁の上に居た兵は、崩れ落ちる壁と共に落ちて行く。

「うわ！！」

幅、十メートルもの穴が開いたその壁は、今崩れる音と共に、破壊されていた。

「狼煙だ！ 合図だ！ 兵をあげろ！」

正面の門を見上げている形で今かと待ち望んでいたカイト皇子一

行は、一気に門下へと走り込んでいた。

門の上では、東の城壁に気を取られていた兵が慌てふためいているのが視界に入つたが、そんな事一の次と言つかのよう、「打ち落とせ！そして、門をこじ開けろ！」

千にも足らない兵ではあつたが、皆気持ちを一つにしてこの場を盛り立てる。

その思いが叶つたのか、第一の門が大きな音と共に開かれて行つた。

その様子を畠然と見下ろしていた敵兵はそつはさせるかの勢いで、弓を打ち放つが、既に開かれた門は『エストラーザ』及び、『サリバーン』の兵を飲み込んで行つていたのである。

「うわ！！」

逆に、打ち落とされる兵。次々と、門下へと降り落ちて来る。

第一の門を潜ると、壊された東の水門の一部がむき出しへなつているのが確認できた。

そこから、膝上までにも及ぶ水が流れ込んでいた。

第一の門は簡単に打ち落とせた。というより、見張りの兵が既に打ち落とされていたのである。

そして門を開こうとする。

「カイト皇子！水が……」

門から水がしみ出していた。

「少し待て。この門は、内側に閉ぐ仕組みになつてゐる。今、中は

……

押しても引いても門は動こいとしない。

流れ込んできている水が、押し止めているのだと悟つた。自然の力と言うのはかくも恐ろしいものであるのだと、痛感した。

「フェンディ皇子！」

「メイトー皆、行くぞ！」

「はい！」

今か今かと待っていた西側でも、ついに動く。

あの隠された隠し通路。底の前で待機していた。

遠く東の果てで、轟音が鳴り響いていた。

その中、五百の兵が列を作るかのようになだれ込む。

暗い一本道。しかし、メイトの目にはすぐにその道より、ぼんやりとした光を感じ始めていた。

進む途中、何人かの兵にぶつかるが、勢いで次々と切り倒して行く。その上をなだれこんでいく『サリバーン』の兵達。

程よく進むと、二つの道に別れていた。

「メイト。お前は左の道を行け！ オレは右の道を行く！」

すかさず指示を出すフェンディ。

「承知致しました！」

ここで一歩に別れることとなつた。

一度も足を踏み入れた事の無い道。少し湿気を帯びた道は、足下を救われそうになるがそんな事を気にもしないで一気に駆け込んだ。

どっちが、正しい進なんだ？

下調べをしておけば良かつた。と、心の中で思いもしたが、今さらそんな事を思っても詮方なき事である。

フェンディが進んで行つた道は暫くすると蠟燭のともった石畳の通路に出た。

これだ！

確信を持つて進んで行つた先には明るい広げた部屋へと出る。そしてその先には、辺りを包み込むほどのはうだい悲鳴が沸き起つていたのであった。

オレは時を待っていた。しかし一向に、門は開かれない。

逆に、漏れ出て来る水の量が増した。

「危ない！カイト皇子下がって下さい！」

ハツとしたクルトが叫んだ。

その刹那、『ドーン』と言ひ音と共に、城壁の一部が崩れ落ち始めたのである。

「皇子！」

一気に水がオレ及びその配下を飲み込むかのように流れ込んでくる。

「うわー！！！」

という、人々の叫び声が沸き起る中、只無我夢中でオレは逆流の水中を泳ぎ切っていた。

暫くすると、水高は減り、流れなかつた兵は、一の門の中へと腰まで浸かつた体を前へと進んで行く。

「クルト！無事か！？」

「ええ、何とか。数十名の兵が流されたようですが……」

「仕方ない。オレ達は前に進むぞ」

「はい！」

オレ達は、向かい合つてお互に頷く。

「カイト皇子！」

遠くからオレを呼ぶ声が聴こえてきた。

「ハイル？」

「御無事で何よりでござりました」

「心配掛けて済まない」

「これ以上の水は流れ込まないよつ、東の地で、対処致しております故、今は御辛抱下さい」

「わかつた。お前には本当に色々迷惑を掛けたな」

「そのようなお言葉……もつたいない」

「では、これより城内に攻め込む！！！」

「はい！」

流れに負けないように、下半身に力を込めてただひたすらオレは足を動かした。

その姿を見る者は、皆思つた。これが、これから的是エストラザ』を担っていく男の姿であるのだと。

#29 未知なる城

未知なる城

「カイル皇子！…何処にいらっしゃいますか…！」

広間に出てフェンディは、この騒ぎの中、自分の使命を全うしようとカイル皇子を捜していた。膝上にまで及ぶ水が、この城の中にまで流れ込んでいる。歩く度に思うのは、着込んでいる甲冑を投げ出したくなる程に動きづらうことだった。

「カイル皇子！」

後からこの広間に入つて来る兵は、四方に別れて、襲つて来る兵や逃げまどう人々を選び分けながら城内を巡回して行つた。

こんな時ハイルがいれば……

ハイルこそが、この城内を知り頗くしているであろうと思いつ瞬心が揺らぐ。

もつと、情報を詰き集めておくべきだった

フェンディは、自分のいたら無さに歯がゆい気持ちになっていた。その時、カイルが、女性として扱われているという事をふと思い出した。

ならば、逃げまどう女から詰き出す事ができるかも……

一か八か賭けに出る気持ちで、フェンディは、出合つた女に歯を掛け歩いた。

「お主、田の見えぬ女を知らないか？」

何が起きたのか分からぬこの状態。ただ、パニック状態に陥っている者に声を掛けたところで、はつきりした答えなど返つて来る事など無い事は分かつてゐるのにフェンディは一人一人訊いて回つた。

「そんな者知りません。誰か助けて……！」

「何が起きたの？イヤーーー！」

返つて来る答えなどこんなものである。

しかし、フェンディは諦めなかつた。暫く、辺りを落ち着いて見回した。

左奥から、女中らしい者達が広間へと流れ込んで来る。

「どの奥か？」

フェンディは確信に似た物を感じ取つた。

オレが一の門をくぐり抜けた先。街は、水浸しであつた。屋根に上つて命乞いをしている者の姿が見える。

凄まじい

オレは思つた。

敵とは言えども、今まで平和に暮らしていた者も居たのだ。それを考へると、政治的理由でこんな戦をしている自分達はなんとも罪深い者のように思われる。

「後少しで、城内です！」

「一度来た事があるから分かる。広間に……いや……謁見の間に向かう」

「カイト皇子！ぐれぐれもお氣をつけ下さい……！」

「わかつてゐるさ……」

暫くすると、少し高台になっている階段を上る。膝下までの水嵩でなんとか動きも楽になった。

グロイン、覚悟している

オレは、今一度見える『キリアーテン』の王に今度こそ恥ずかし目を受けない勢いで前を急いだ。

一方、フヨンディ皇子と別れて行動していたメイトは、牢獄の有る通路へと足を踏み入れていた。

「どうか、そこのお方……お助け下さい……！」

湿った石畳の上に横になつたり、うずくまつた男達が牢の中、口々にメイトや他の兵に声を掛けて来る。

「お主達は？」

「私たちは王の怒りをかつた者共です」

「鍵は？」

「そこの角を曲がった先の所に居る兵が持っています」

「わかった。今暫く辛抱していろ！」

メイトは兵に指示を出し、兵を倒す算段をたてた。遠くで叫び声が上がる。

「ぎゃー」

暫くすると、悲鳴と共に足音が聴こえて来た。

「メイト様！ 鍵です」

「今すぐ出してやるぞ！ 何処へなりとも逃げるが良い

「助かつたーー！」

「ありがとう、ネエちゃん」

いろいろな声が上がる。

そんな中、メイトはこの先に通路があつたかを、鍵を取つてきた兵に訊く。

「今の兵の奥には道はあつたか？」

「いえ、行き止まりで」*じりこ*ました

その言葉に、

「全兵よーもと来た道を進めーーそして、先程分かれ道があつた逆の道に急いで進むのだーー」

しまつた

とメイトは思った。

フェンディ皇子……早まつた行動は決して為さらないで下せーー！

味方の兵の列の後尾。一人メイトはこの成りゆきを焦る気持ちで見守るしか無かつた。

「カイル皇子ーー！」

フェンディは、女達が騒いで逃げて来る道逆行していた。時々そんな女達に声をかける。

しかし、誰一人として、その言葉に耳を貸す者は無かつた。暫く行くと、いくつかの部屋前を通り過ぎるようになつた。その部屋をくまなく見て回る。
しかし、既にもぬけの殻であった。

「のまま行くと、最奥の間に行き着く……

もしかしたらと思う一心で、重い足を動かした。
暫くすると、日差しの当たる渡り廊下に出た。

「カイル皇子！何処ですか！？」

もうここまで来ると逃げまどつ者もいない。

一番奥の部屋だ！

フーンディは、そのドアの前まで来ると思いのたけを込めてそのままドアを開いた。

水の重みもあつたため、『ズズズ、ギーッ』という音がした。

「カイル皇子！？」

その部屋を見回す。暗い部屋。先程の渡り廊下で、既に辺りが夕日のために赤く染まっていた事を初めて知った様な気がした。

「フーンディ皇子か？久しいの。ここまで来れるとは……してやられたわ！」

聞き覚えの有る声。

「グ、グエイン……」

フーンディの目の前には、女の胸に剣をたずさえた格好のグエインが、立ちはだかっていたのである。

#30 勝利の果てに

勝利の果てに

喚き立てる城内は混乱の渦と化していた。

立ち向かつて来る兵は、一時立ち止まりながらもオレはなぎ払つて行く。

女や、兵で無い貴族の者達は逃がす。そのつもりでこの城内に入つてきた。

『パシヤパシヤ』と辺りは水の弾ける音と泣き叫ぶ声で他には何も聞き取れない程であつた。

「そろそろ、謁見の聞だ」

オレは足早にそんな事を考えながら走つていた。

暗い通路を右に曲がる。

そこにあの時の光景を見た。が、実際に捜している姿は無い。

「カイト皇子！ グエインが居ません！」

「一体何処にいるというんだ！」

ここにいると踏んだオレだからこそ、一早くこの場に赴いたのである。

しかし奴はいない。

城の奥か？ 王ならこの場にいるのが当然だろ？

悔しい気分に陥る。

その時、頭の端に嫌な思考が流れた。

カイル！

この時ための人質だったのかとばかりに、しまったと言つ表情

を浮かべ、階段を駆け上がる。

「グエインはこの奥だ！」

確信を持つて、オレは走った。

確かあの時、グエインはこの扉を開いて奥へと下がった…きっと、この奥に居る！

「卑怯ですね……グエイン王ともあろう者が！」

フェンディは、この場に及んで人質を取つてまで引きこもつているこの王に不様な姿を見せてくれるなど言いたかった。

「何とでも言え！この者が、カイル皇子である事は、そなたも知っているであろう！」

グエインは、鼻で笑っていた。

「知つていて。本当は王女である事も」

「ならば早い、邪魔だ！そこをどけ！道をあける！」

グエインは、前に進むために足を一步踏み出した。

「弱りましたね。ここであなたに逃げられては困る。しかし、カイル殿を殺されても困る……」

フェンディは、グエインの行動を静かに見守っていた。

「フェンディ殿！ボクの事は気にしないで下さい！ここで死ぬこそ本望です！」

カイルはそんな心遣いは無用とでも言つよつにフェンディに伝える。

「そう言つ訳には行かないんですよ、カイル殿。私の使命は、あなたをお助けする事なのですから！」

「しかし……」

カイルは戸惑っていた。

「しようがないですね、グエイン国王。あなたの言つ通り、この場を引き下がりましょう

フェンディは道をあける。

「悪く思つなよ」

グエインは、フヨンディに背を向けながらこの部屋を出て行った。

その後を追うフヨンディ。

再び渡り廊下に出る。

西の空は血のような赤い夕日色で染まっていた。

そして流れ込むその光は、三人を赤く染め上げていた。

『バタパタバタッ』

「カイルっ！！」

そこに、オレとクルトが走り込んで来た。

「これは、これは、皇子様のご到着でござりますよ……カイル殿？」
静かにグエインは皮肉を言つた。

「力、カイト？」

「無事だつたのか、カイル！」

「そう言つ雰囲気ではございませんが？」

と後方からフェンディが水を差す。

「卑怯だぞ、グエイン！ その手を離せ！ そして降参しろ！」

オレは無意識的に叫んでいた。一陣の風が吹き抜ける。揺れる髪が、幽かに頬を撫でて行つた。

「もう、勝敗は決まつたも同然だ。潔く負けを認めろ！」

クルトが追い討ちをかけるかのように言い放つ。

「まだこの戦いは終わつてはいない。カイル殿の身は、我が手に有るそして、我が命も！」

「何を言つている。未だそんな事を言つているのか？ いいかげん周りを見る！ こんな状況下で、何が出来るというのだ！」

オレはこの道を来る途中に見た光景が、未だ目に焼きつけていた。

こんな莫迦げた戦いはこれで終わりにしたい

「周りはどうあれ、オレはまだ負けを認めてはいない！」
グエインの瞳には未だ宿る野心が火をつけていた。

「民の事を考えない王など…… オレは認めない！お前の考えている世界は、ただの肩だ！」

「言つてくれるな…… カイト皇子？」

それでもグエインは怯む事がない。

「ああ、いくらでも言つてやるさ！ 肩には肩なりのけじめをつかつて事をな！」

静かに時は流れしていく。

「喚かないでくれるか？ 頭に響く」

「判らない頭に言つて聞かせてるんだ！ そのくらいよく聞いておけ！」

うんざりだとでもこいつよひ、グエインは首を捻った。
「ならばわかつた。いいから、だけ。決着をつけよう！」

「決着？」

「こんな所ですか？」

「何を莫迦な。王としての決着をこんな所でつけられるか。王座に来い！」

オレは王座と言つ葉で理解した。

「わかつた。ならばこちらも尋常に勝負する。だから、カイルを離せ！」

その言葉に、グエインの手からカイルが解き放たれた。

「グ、グエイン……」

カイルは弛んだその手から抜け落ちる。そして、その主を仰ぎ見るかのように見えない目でその方を見た。

「誰も手出しをするな。これはオレと、グエイン王との一騎討ちだ！」

そう言つとオレは、今来た道を引き返した。

フェンディ皇子に手を引かれたカイルは途中、

「すみません。フェンディ皇子」と声を掛けた。

カイルが心に決めた事。

「申し訳ないのですが、この瞳に巻き付けられた布を取りたいのです。ほどいていただけませんか？」

少し屈む形で膝を曲げた。今、今見なくてどうする？でも見えるのか？

「……承知しました」

それは、ゆっくりと取り外されていく。

暫くすると、真白い世界は少しずつ形有る像を成し、今、カイルに奇跡が起こった。

「……見える……」

「えっ？」

フェンディは不思議そうにカイルの後ろ姿を見下ろした。

「お手をありがとうございました。ここからは独りで歩けます。御迷惑おかけ致しました」

あの時から十年の月日が経っていた。

十六歳の冬。初めてみた光景。

それは、忘れもしない金色をした髪のカイトの成長した後ろ姿。そして、初めて見る漆黒の髪の色をしたグエインの後ろ姿。それは、望んだ光景であつたのか？

ボクは…やはり悲劇を見なければならぬ運命にあつたようだ

五人の後ろ姿が夕日に飲まれ黒い影となり城内へと消えて行つた。

城内は、未だ水が引かない状態であった。そして、光の無いこの部屋は暗闇のようである。

「何故窓をつけない？」

「暗いのが好きだからだ」

オレへの答えは、ごく個人的理由であった。

「今、蠅燭に火を灯して回る。この薄暗がりになんともドラマチックであるかな。どうだ？残った方が、この火を吹き消すってのは？」
グエインは『ニタリ』と笑っていた。

「悪趣味な演出ですね……でも悪くは無い趣向だ」
売り言葉に買い言葉。オレは暫くの間、グエインの行動を待った。
四方には、ゆうに五十本もの太い蠅燭が壁掛けられていた。
「これで少しば明るくなつたのでは？」

「まあな」

「それでは参りや」

「よし」

両者は自らの剣を引き抜く。

オレよりひと回り太い剣が蠅燭の明かりでギラつく。
細みの剣を持つたオレの剣は鋭利な光を放っている。

「はつ！」

『力キーン』

重なり合つた二つの剣は押し合いをし始める。

すると、一度『ヒュウ』と退いたオレは横つ跳びにグエインの腰
めがけて剣を走らせる。

しかし、その魂胆を見抜いたグエインは、上からその剣を押しと
どめる。

白と黒のマントは、その度に舞い上がる。
どこかで見た光景だとオレは思つた。

この感覚。あれは……

押しとどめられた剣を素早く引く。
そして間合いを取る。

緊張と、これまでの疲労の為か額に汗が伝つ。『ジリジリ』と足
が忍ぶ。

それから、下段に剣を構える。

振り上げられる剣。再び辺りに金属音が鳴り響いた。

その交わった剣がオレの右頬を掠めるように引き抜かれた。

『ツーッ』と一筋の血が滴り落ちる。

「力では勝てんぞ？」

「言われなくともわかっている！」

どう見積もつても小柄なオレが力で勝てるとは考えられなかつた。

機動力を生かさなければ、負ける

オレは、再び間合いを取つた。

再び下段の構えから剣を振り上げると見せ掛けで、剣を突く構えで突進した。

それは、グエインの胸目掛けた太刀筋であつた。が、上手く弾かれた。

夢で見た光景だ。でもあの時は……

『パシャーン』と水しづきが上がる。

足をすらす。その度に足に纏わり付く水の重みを感じた。遠くの方で、人のざわめきが聴こえてくる。

「なんだ、何をやつているんだ？」

男達の声であつた。

「あれは、カイト皇子…」

「グエイン国王…」

散り散りになつていた者たちが、今再びこの地に戻つてきたのである。

「フエンディ皇子、御無事でしたか！」

メイトが安心したという表情で声をかける。

「ああ」

「これは何を？」

「二人の尋常の勝負だ」

「良いのですか？」

「構わない。これで全てが終わるのであるのだから」「えつ？それは……」

辺りに見物者が現われて、気が散る。ついには煽る者達まで出てきた。

オレは、今まで静かに打ち合っていたのが、その人々の勢いと共に剣の呼吸を短く保ち始めた。

『キーン。カキーン』

激しく打ち合ひ両者。

確かに外から見ていたはず

息が上がり始めた。小回りを利かせて動き回つていただけに息が持たない。

そしてあの続きを……

気づいた時には左腕にも傷が付いていた。吹き出している血。しかし痛みなど感じない。生きるか死ぬか。その瀬戸際で、緊張感だけで精神力が続いている感じであった。

ここに来るまでに費やした体力は並外れたモノだ。

しかし気力だけでこの場は保つている。

汗で手の平が滲み、今にも剣を落つことしそうだった。

絡んだ剣。『ギリギリッ』と音を立てている。

「そろそろ限界か？カイト皇子……」

「なにを……！」

と弾き飛ばすように剣を引いたつもりだった。

「あつ」

しかし、不幸にも剣は… オレの剣は、手許から吹き飛んだのである。

「これで最後だなー楽しかったよ。カイト皇子!」
そう言つと、剣を拾おうとしたオレ田掛けてグエインの剣が真直ぐ振り下ろされた。

「うつー！」

と身構える。

『ガキーン』

しかし、降り下ろされた剣がオレの頭上で止まつた。

「カ…カイル?」

オレの頭上に鞘を抜かないダガーを両手にしつかり握りしめたカイルが立ちはだかつていた。

「カイル殿。これは一人の尋常な戦いだ！邪魔は為さるな！」

グエインは静かな闘志をたぎらせていた。

「至極承知しています。しかしこの勝負、ボクは敢えて間に入らせて頂きます」

剣を下ろすグエイン。

「そのダガー。今ここで使用すると言つんだな？」

その言葉に、

「いいえ。違います」

「なぜ？オレを殺したい程憎んでいるんだろう？良い機会ではないか！」

片腕を腰に当て、一息つく仕種をするグエイン。

「ボクには、あなたを殺す事は出来ません。それはあなたも御存知のハズ……」

「では、何故この場にシャシャリってきた。邪魔だ…だけ…」

片手でカイルを引き剥がそうとする。

「ならば、ボクを今ここで切り捨てて下さい。あなたに殺されるの

でしたら男として生きてきた甲斐が有つたといつものしつこく抵抗するカイル。

「……カイル。 どけ！」

「いいえ、僕はここを退くつもりはございません！」

対峙する一人。

「カイトを殺す前に、ボクを殺してくださいーー一度はあなたに助けられた命です。これも運命だと思っていました。運命の輪からは逃れられないのだと。しかし、抵抗してみる、自らが決めた生き方をする事で逆らつてみる決心が出来ました！」

カイルは叫んでいた。

「戦場で死ぬことが出来る。こんな嬉しいことは無い。さあ、切つて下さい！」

そのカイルを仰ぎ見ていたオレは、立ち上がりその手を引き寄せた。

「カイル！ 退け… お前は見ていれば良い！」

「カイト？」

「まだ立ち上がる元氣が有るのか？ カイト皇子様？」「ほざけ！」

「カイトこの剣を使って！」

と、握りしめた剣をカイトに渡した。

「えつ。こんな物で奴を倒す事なんか…」

焦る。ありえない事だった。

「違うよ。この剣でボクを殺しなさい」

「な、何を莫迦な！」

「ボクはね、『エストラーザ』に戻る資格など無い。ならばこの地で葬つて！」

「……何を言って……」

「国に返ればボクは嘘偽りの皇子を演じていた罰を受けなければならない。そつなる前に殺してーーここで死ぬ方がまだましだ！」

沈黙が訪れた。それはオレの心に深く重く。

「……出来る訳ないだろ……」このオレに……

オレの手が震えていた。

「でもやらなければいけないんだよ。君の手で！ボクのこの命を奪わなければ同罪になつてしまふんだから……」

カイルの瞳は落ち着いて澄んでいた。そして今確かにオレを見ている。

「大切な者を守るのって、本当に難しい事なんだって、今痛感したよ。ボクにとって、誠の弟のように思つて育つってきたカイトと、自らのエゴだと称してまでボクを救つてくれたグエイン王。ボクにつたらどちらもかけがえのない大切な者だ」

「……カイル皇子」

「……カイル」

「どうする？どちらがボクを殺してくれるの？今更人一人殺す事くらい、簡単なことなんだろう？だつたら、早く殺してよ！」

「……」

「ハイ。ちょっとストップ！」

この緊張感を崩したのは、『サリバーン』のフェンティ皇子であった。

「これは『エストラーザ』の皇子カイト殿と、『キリアートン』の王グエイン殿の尋常な対決だ。カイル殿の入る余地などないでしょう？素直に戦わせれば良いのです。違いますか？カイル殿？」

「そうですね。しかし、ボクは、見ていられない……どちらにも死んではもらいたくはない……だから……」

「止めに入った……というのですね？しかし、それは止められるものではない。もう多くの者が犠牲になつた。それは我が国『サリバーン』の者達をも巻き込んでいるのです。ここで決着をつけてもらわなければならぬ。それが、一国を背負う者達の定めなのです」

「ですがこの対決が何の幸せを招くのですか…？」これで負けた者たちはまたその恨みをぶつけ再びの戦を生むのです。そんな事はあってはならない！」

そして、一息つくとフロンティアは続けた。

「カイル殿？あなたは私的な感情で動いてる。これは政治なのです。負けた者が、勝った者の支配下になる。強い者こそがその栄光を勝ち得るのです。御理解下さい」

「では、あなたは勝った者につくと言つのですか？それとも、カイルトが負けて『エストラーザ』の報復を考えると言つのですか？」

「それは、この戦いが終わってから決めることです。今の私はただの傍観者であるのですから

何とも客観的な言葉。

「ならば、この『キリアートン』の今姿を御覧になつて、復興する余地を与えられると言つのですか？『エストラーザ』の味方をしていて負けたらその民を囚人扱いして…新たな国を創ると言わるのですか？そんなのは余りにも酷い仕打ちではありませんか！」

「カイル殿…」

「どうして、もう一度三国の平和協定を結ぼうと誰も唱えないのです…？このまま同じ三国で元のように、平和な世にしようと考えないのですか！」

「…もう、歴史は動いてしまったのですよ。それを変える事は出来ない事は分かつてゐるはずですね？カイル殿？」

「ああ…」

崩れ落ちるカイル。その瞳には止めどもなく涙が溢れ出していた。
「だからあの時、私の配下、メイトと共に逃げになつていればよかつたのです。賢明なあなたなら分かつてははずだ。自らの祖国『エストラーザ』と、少しの間でも身を寄せてしまい情が移つてしまつ『キリアートン』の両方の国をその手で天秤に掛けてしまう事を…」

静まり返った広間。その広間にまたフーンティの言葉が流れる。

「しかし、グエイン王よー一つ聞きたい事が有る。なぜ、先程、カイル殿を人質に取つた時、剣を只構えているだけだったのですか？どうみても、壊れ物を扱うようなあの身のこなし……必要な剣先は何処を向いていたのでしょうかね？」

話の鋒先は、いきなりグエインへと向く。

「……何が言いたい？」

「茶番だと申し上げたのです。あなたは、カイル殿に剣を向ける事などできはしない。ましては、既に負けをも認めていた……つまりは、カイル殿を人質に取るつもりなど、いつさい無かつた」

「……」

「あなたも、私情を挟んでの戦いをカイト皇子に挑んでいる。違いますか？」

「何の事だか、さっぱり解からないが？」

「不思議だつたから訊いたまでですよ」

「何も不思議ではない」

「そうですかね？今となつてはもう、国の事などどうでもいいのは有りませんか？」

「そんなんはある訳がないではないか！」

「そうですかね？ここで一つ言つておきますが、私は、もしあなただが勝つたとしても『エストラーザ』側に付くつもりです。私情を挟んでいる者には用は有りませんから……」

「フーンティ皇子？」

思わぬ事を聞いたとオレは驚いていた。

「これでも、人を見る目は有るんですよ。私には。さて、お引き止め致しまして申し訳有りませんでした。続きをどうぞ？」
ざわめく観衆。

「フーンティ皇子ーあんな事を言つていいのですか？」

メイトが囁く。

「もう決着は付いている。我が国は『エストラーザ』を支援する。『キリアートン』は滅びの道を転がつて行くまでだ」「しかし、あのカイト皇子が勝つ確率は無いに等しい……」「メイト、もっと洞察力を身に付けた方がいいぞ。カイト皇子は勝つ。『サリバーン』は『エストラーザ』を支援する」そう言つたフェンディの横顔は自信に満ちていた。

改めて再開された二人の戦い。

脇に退くカイル。もう、誰にも止められない。

オレは、先程落とした剣を拾い上げ、再び力強く握り直した。

向き合つカイトとグエイン。

重ねあう剣は光を取り戻していた。

それをはね除け、オレはグエインの背後に回り込む。そうはさせまいと振り向きざまに剣を降り下ろすグエイン。

「カキン」

受け止められる剣。

この戦で死んで行つた民の分もオレは……

カイト皇子の背中にはオーラを見た気がした。思わず退くグエイン。

なんだこいつ、先程より……

オレの足は、素早く動く。再びグエインの背後に回る。斬り付けては撥ね付けられる剣。その繰り返しが、もう何度も繰り返された。

オレは、勝たなきやダメなんだつ

その繰り返されていた剣が、ついにグエインの脇に刺さつたのである。

吹き出す血飛沫。

「うわー」

その瞬間、歓声が上がった。

オレの剣がグエインをしとめたのである。

そして、倒れ込むグエイン。

「オレの勝ちだな。グエイン王よー。」

その姿を静かに見下ろしながら叫びつ。

そして沸き立つ『エストラーヴ』の兵達。

その横を、カイルは走り込んでグエインを抱き起こしていた。

「首を落とせ！こんなナリを兵に見せたくない！！」

それを無視するかのように、宣言するグエイン。

しかし、オレは、その事を否定した。

四方に取り巻かれた蠟燭の火。初めの予告通りオレはそれを吹き消して回る。しかし最後の一本にさしかかり、吹き消す事を止めた。

「何のつもりだ？カイト皇子！一思いに殺せーー！」

グエインはカイルに抱き起こされながらも床を這いずるかのような仕種でオレを見上げた。

「その傷はそう深いモノではない。直に血も止まる」

「なぜだ……」

「お前も一国の王なら、この荒れ果てた地を再び建てなおせ。生きてなーー！」

「……」

黙つて聞いているグエイン。

「カイルと共に……」

「……カイト……」

見上げるカイル。その先には、偉大なる王となる姿を見た。

「カイルよ、お前は今日より『エストラーザ』の第一皇子ではない。何処へなりとも去れ！只今をもつてこのオレにより国内追放の处分を下す。『キリアートン』でも『サリバーン』でも好きな所に移住するがよい……でも、オレは……お前を心からいつまでも兄だと思っている事に変わりがない事は……覚えておけ……」

それだけ言い残すと、オレは、暗闇になつたこの広間を兵達と共に後にしようとした。が、

「言い忘れる所だった。『キリアートン』の王よ。その傷が癒える頃、今度こそ本当の不可侵条約を締結したい。必ず、一週間後には我が『エストラーザ』にお越し頂きたく思う。待っているぞ！」
『ギーツ、ガチヤン』と、扉は閉ざされた。

ただ一本の蠟燭の火のみのこの広間は暗闇に閉ざされる。

残されたグエイン、カイル、そして、その他の『キリアートン』の兵や侍女たちは、横たわる自らの国王を取り囲んでいたが、直ぐさま薬師を呼び寄せようと動き始めた。

「カイル殿。完敗だな……オレの」

「そうですね、ボクもカイトに愛想をつかされました……」

「これで良かつたのか？お前は……」

今まで剣を握っていたその手で、カイルの髪を撫でる。

「ええ。ボクの国はこの地です。あなたさえ良ければ……」

「何を言つ。できれば、この地に留まって欲しい。オレと共に、二人で……平和な国を創ろう」

「…………はい。グエイン国王」

「そういえば、いつまでも、カイル殿じゃなんだなあ。ジャスティという名で良ければもらつてやつてくれないか？」

「素敵なもの前です。ボクも、いえ、私も言葉遣いに気をつけないと
いけませんね」

にこやかな笑顔が一人の間でかわされた。

それはまるで、暗闇から明るく灯る『キリアートン』の明るい未来を暗示しているようであつた。

「カイト皇子、本当にこれで良かつたんですか？」
道すがら、フェンディは問いかけた。

「……」

「あなたも本当は、カイル殿を……」

だけど、言葉をばばむかのようにオレは言つ。

「これで良い。オレは『エストラーザ』を担う皇子だ。帰還したら、戴冠式をも迎えなければならない身だ。それに……」

「それに……？」

「弟だと思われていたんじやあ……な」

「よし！帰つたら、祝賀会でも開きますか？」

励ますつもりでフェンディは、他の兵と、オレを見る。

「いいな、それは！」

周りから歓声が上がつた。

「ところで、我が妹がカイト皇子の事を気に入つていてるんですが……いかがですか？今度お会いになつて頂きたいんですけど……」

「そうか？会つてみるのも良いな

「本当ですか？喜びますよ！」

「それじゃ、祝賀会にでも参加してもらつか？」

「おつと、気が早いですねえ」

次第にその声は遠ざかつて行く。

カイル……………
幸せにな……………

オレは、心の中で小さく呟いた。

#3-1 それから・・・ヒューローク

ヒューローク

「海斗！ 海斗！」

誰かが耳元で叫んでいた。以前にもあつたよつたな場面だ。目を開けると、白い天井が見えてきた。

なんだよ、五月蠅い！

全身で寝返りをうとうとしたその時、ままならぬ痛みが走った。

「よかつた、目を醒ました！」

感嘆の声だと気がついた。

なんだ？

「海斗、安静にしてなさいよ！ まだ動ける体じゃないんだから。」
それが聞き慣れた声だと分かった。

「ふ…風香…？」

「風香？ じやないわよ。もう、どれだけ心配したことか……一週間近く眠り続けてたんだからあ！」

「こには？」

「病院よ！ 海斗いきなり車の前に飛び出して衝突したんだもん。驚くわよ！」このくらいで済んだだけ、幸運だったわよつ！」

見える範囲で目をこらしてみる。

足先に包帯が巻き付けられて吊るされているのが目に入った。

「あばらも折れてるのよ。寝返りも打てないでじょつ」

「ああ、痛いよ」

「先輩が救急車を呼んでくれて、素早く処置してくれたのよ。今度

会つたらお礼を言いなさいよね！

「げつ。オレあいつ……苦手」

「苦手でも何でも、お礼はしてよね！」

『シャツ』とカーテンを引く音がする。

「見て御覧なさい。今日はなんて清清しい朝なんでしょう」

眩しい光が目に入り込んで痛い。まだ覚めやらぬ何かがオレの中で渦巻く。

「風香、お前毎日来ててくれたのか？」

傍にある花瓶に生けられた花を見ながら、テレながら訊く。

「うん」

「そりゃ……そりゃええば変な夢を見たよ

「どんなの？」

「えつとな……」

それは、時間の狭間。夢ではない本当の出来事。

『海斗』は『カイト』で、同じ時間軸の異次元の世界に入り込んだのである。

そんな事とは露知らず、恋人の風香にその話を語りはじめる。カイトが入り込めないでいた肉体は、実際の海斗の中で眠りに就いていた。そして、夢を見る形でその出来事を記憶していた。

それから先は……異次元のその後の世界のことは、再び海斗の夢の中にでて来る事になる。

『エストラーザ』『サリバーン』『キリアートン』の三国は一週間後、約束通り平和条約を結ぶ。

その一年後、カイトと、『サリバーン』のウェンディは結婚。それから一年後、ウェンディは男の子を出産。名は、カイル。後に一国の王となる第一皇子が誕生。

『キリアートン』は、半年の内に国を再興し、一年後、グエイン王国と、ジャスティの間に女の子をもうける。

その一年後、第一皇子を出産。不思議な縁で、年頃になり第一王女と、『エストラーザ』の第一皇子がめでたく結婚。

そして、平和条約によつて『エストラーザ』の貿易港が使用可能となり、多くの国を行き来出来るようになる。

実際、王グウェインは、その多くの国を視察して、念願の国土拡張をはかる。

『サリバーン』のフェンティ皇子は、配下のメイトを正妃として結婚。

子宝に恵まれメイトは五人の子供を産み落とす。

男の子三人と女の子一人。同じく平和条約にて、『エストラーザ』の一部の土地を借り受け、作物を大いに収穫していた。

この平和は、一世紀続ぐが、再び戦乱の世を招く時が来る。それは、まだ知られていない未来の出来事であるので、また今度の機会にでも。

#3-1 それから・・・ヒペローグ（後書き）

これで、カイトが主人公としてのお話は完結です。

確かに、五、六年前に書いた作品なのですが、今見ると、会話文が多くて、世界観が描けてなかつたなど反省するのですが、今回はそのまま。少しだけ気になつてた所だけを加筆して、お届けしました。でも、個人的に、ファンティとメイト。グエインと、カイル（ジャステイ）のお話など改めて違う方向で書けたら本望かなと。

特にファンティとメイト。この二人の過去と未来など加筆したい気分です。

また、読みたいなつて方いらっしゃいましたら、ひとつそり教えていただければ幸いです。

それでは次も、ファンタジーでお送りします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8461c/>

エストラーザ戦記

2010年10月8日14時06分発行